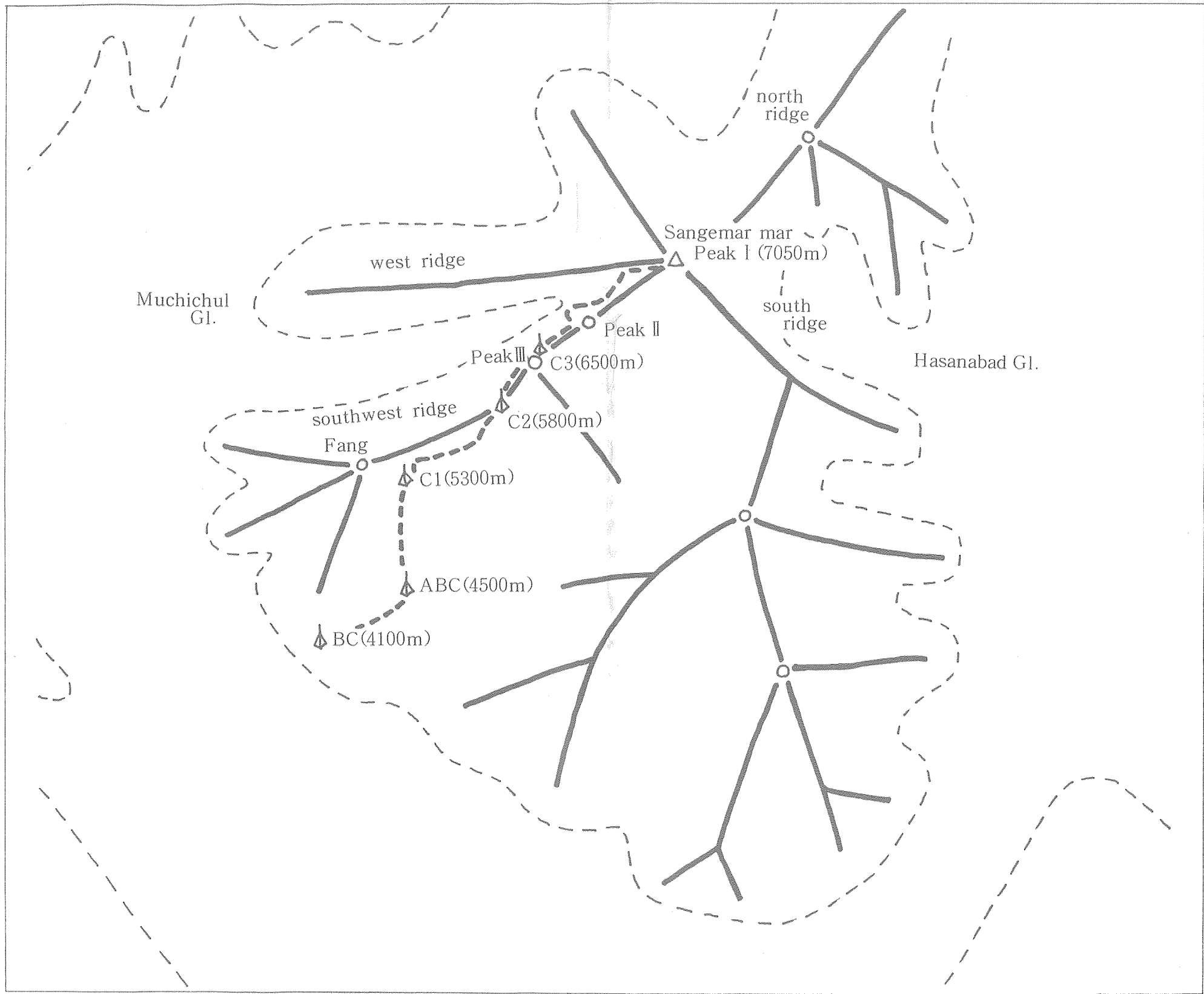




1984

大阪大学山岳会
サンゲマルマル登山隊



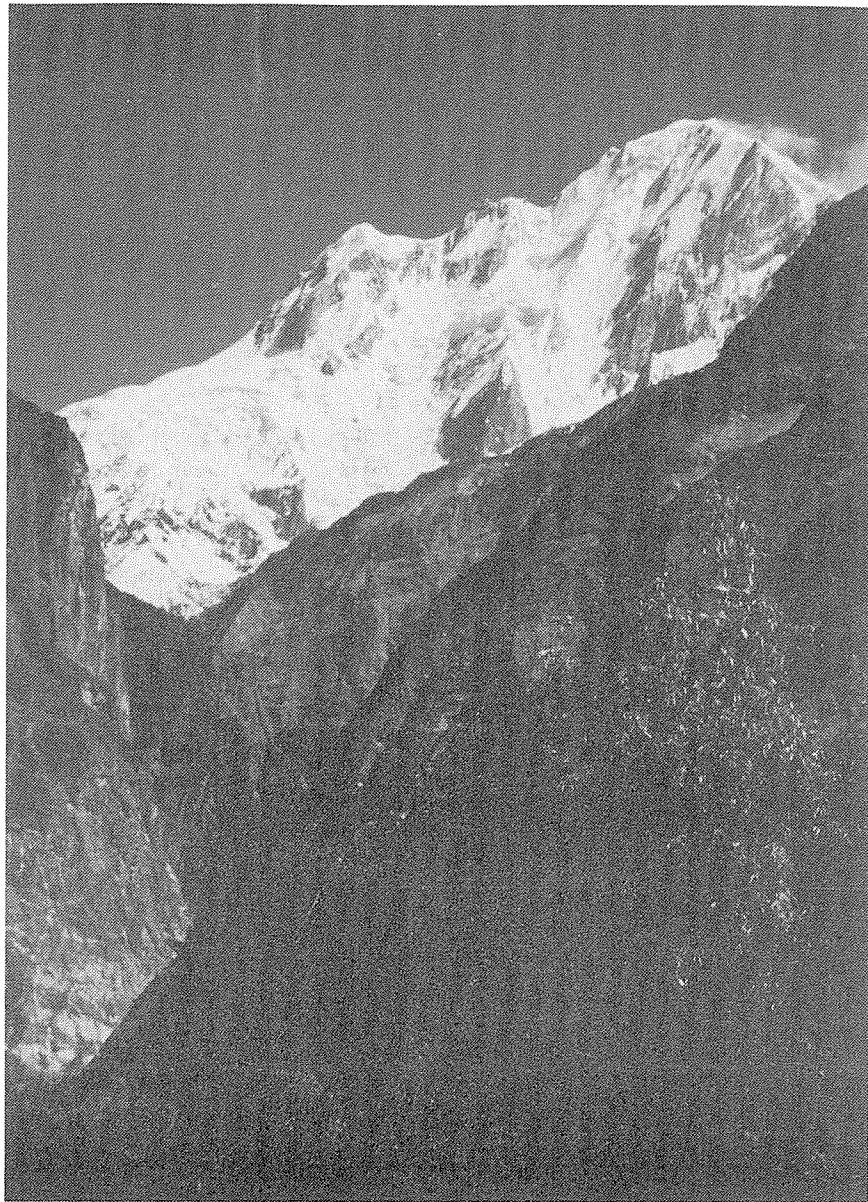


1984

大阪大学山岳会

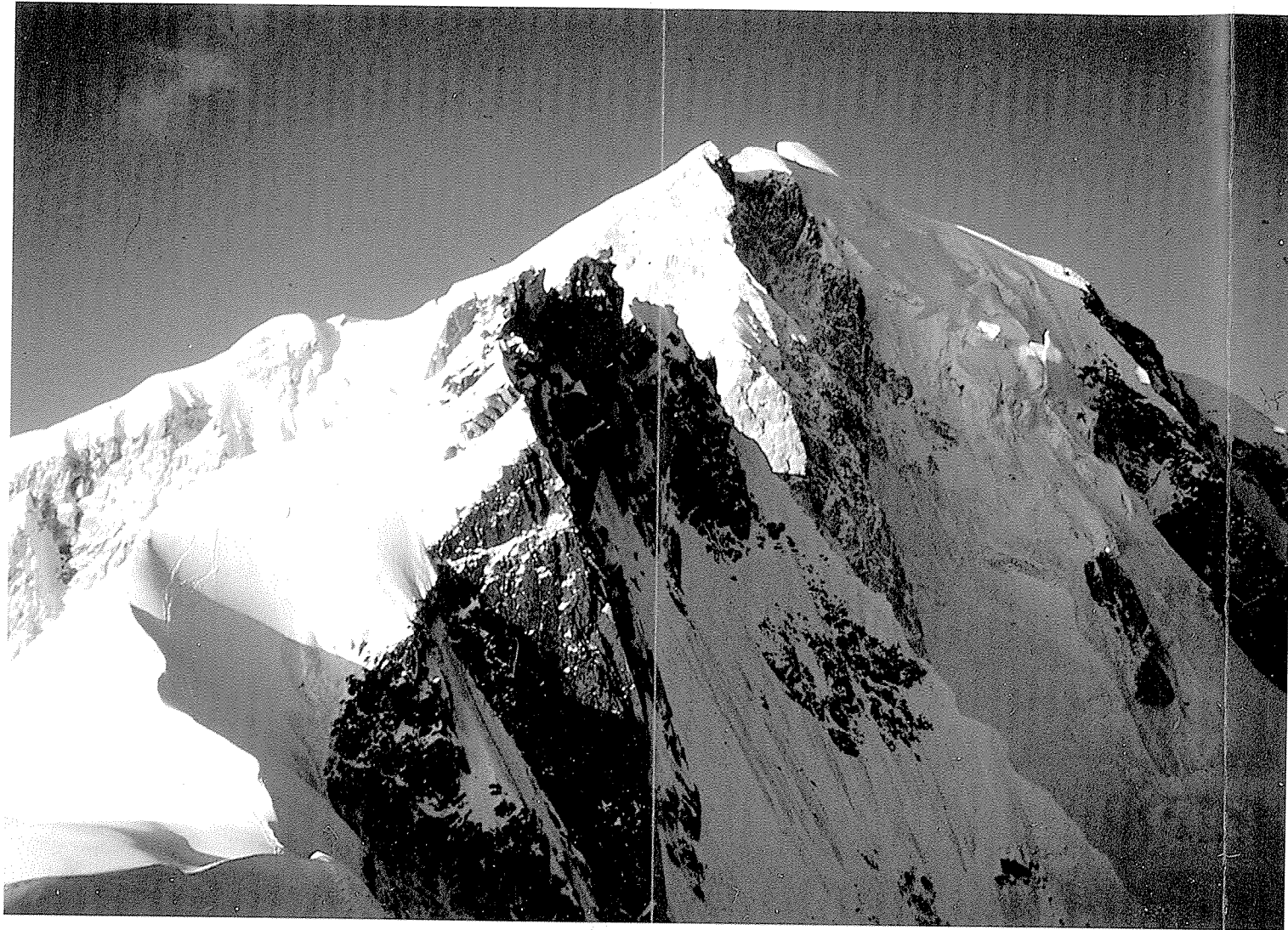
サンゲマルマル登山隊





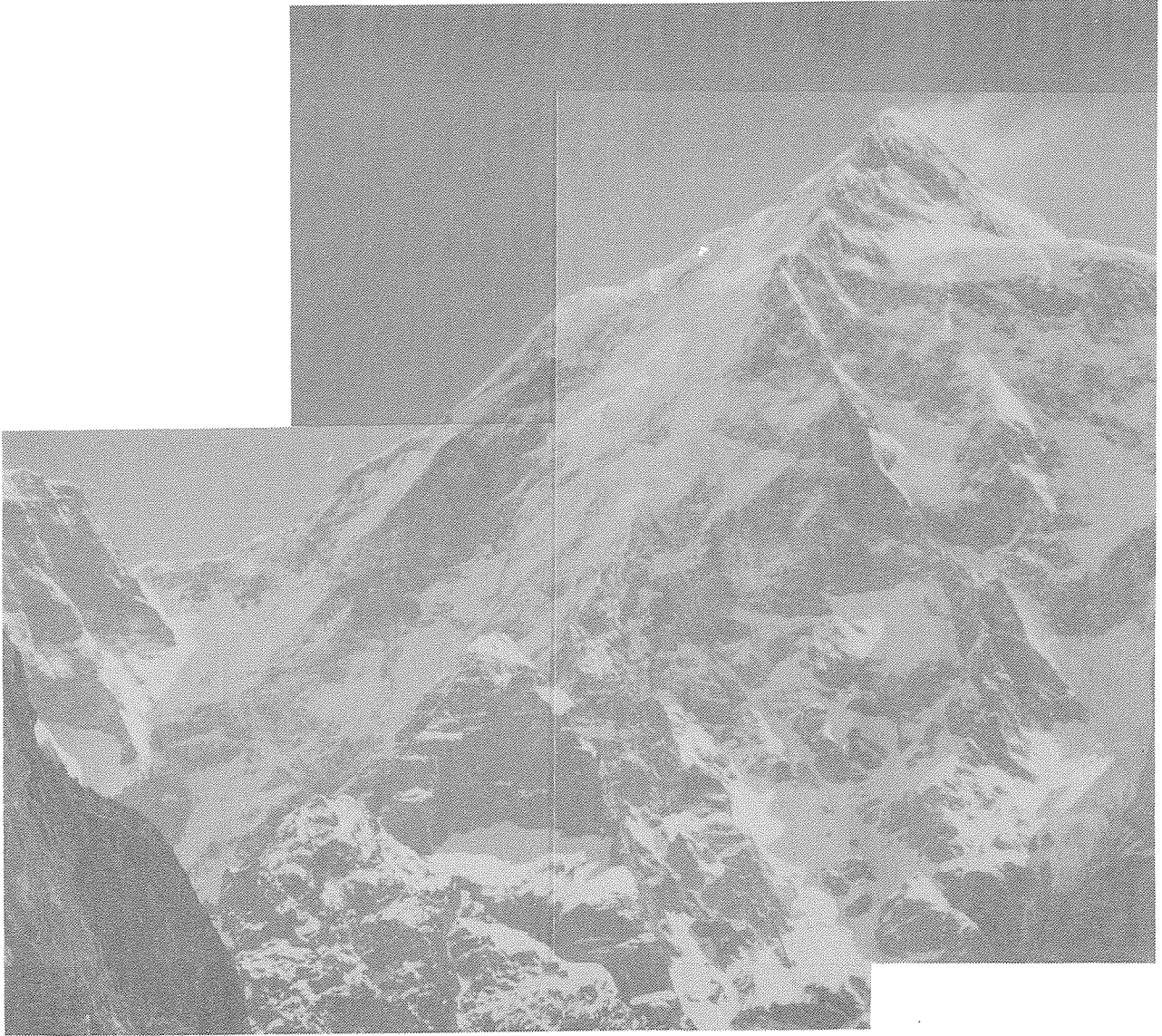
前頁：サンゲマルマール北面
頂上附近
左：ハサナバッドからの
サンゲマルマール南面
下：サンゲマルマール北面
(金沢大学山岳会撮影)





左 C3(6500m)からの1峰・2峰
下 ウルタルからのサンゲマルマール東面
(広島山岳会撮影)

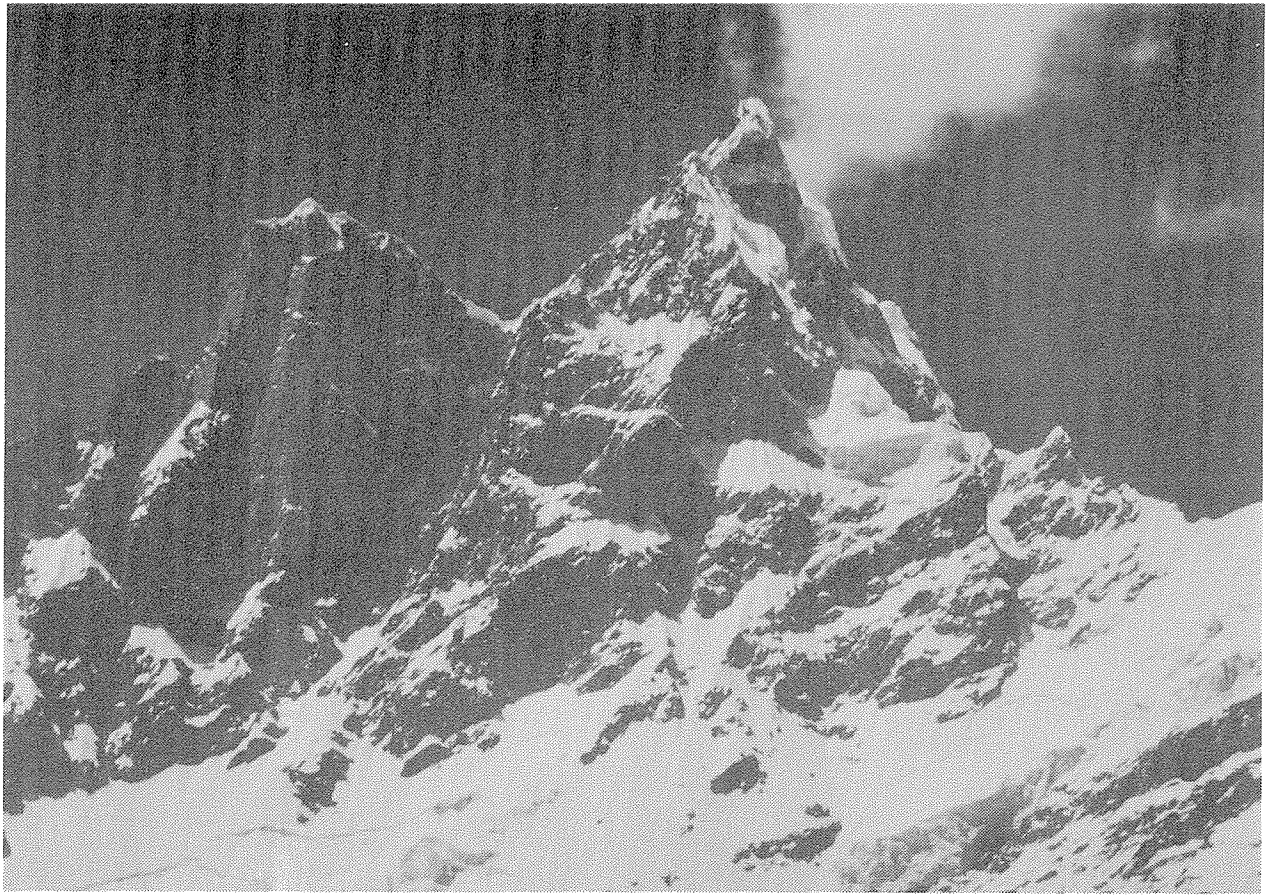




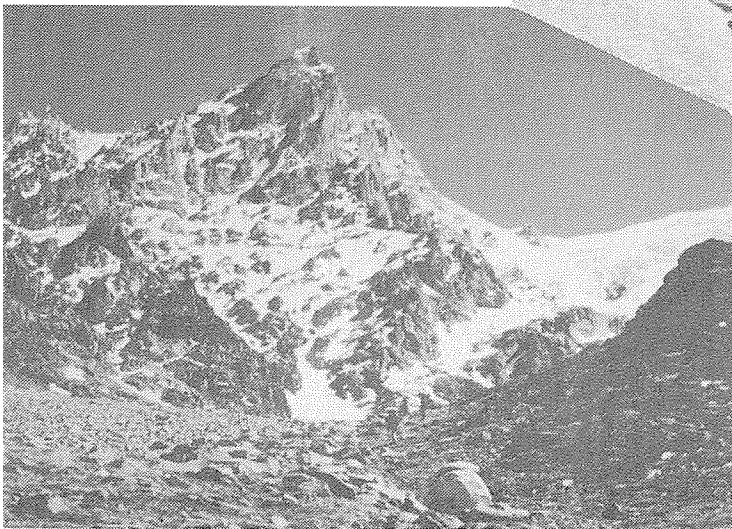
上：シスパーレ
南面

右：キャラバンを
終えて
(イルキッシュ
B. C.)



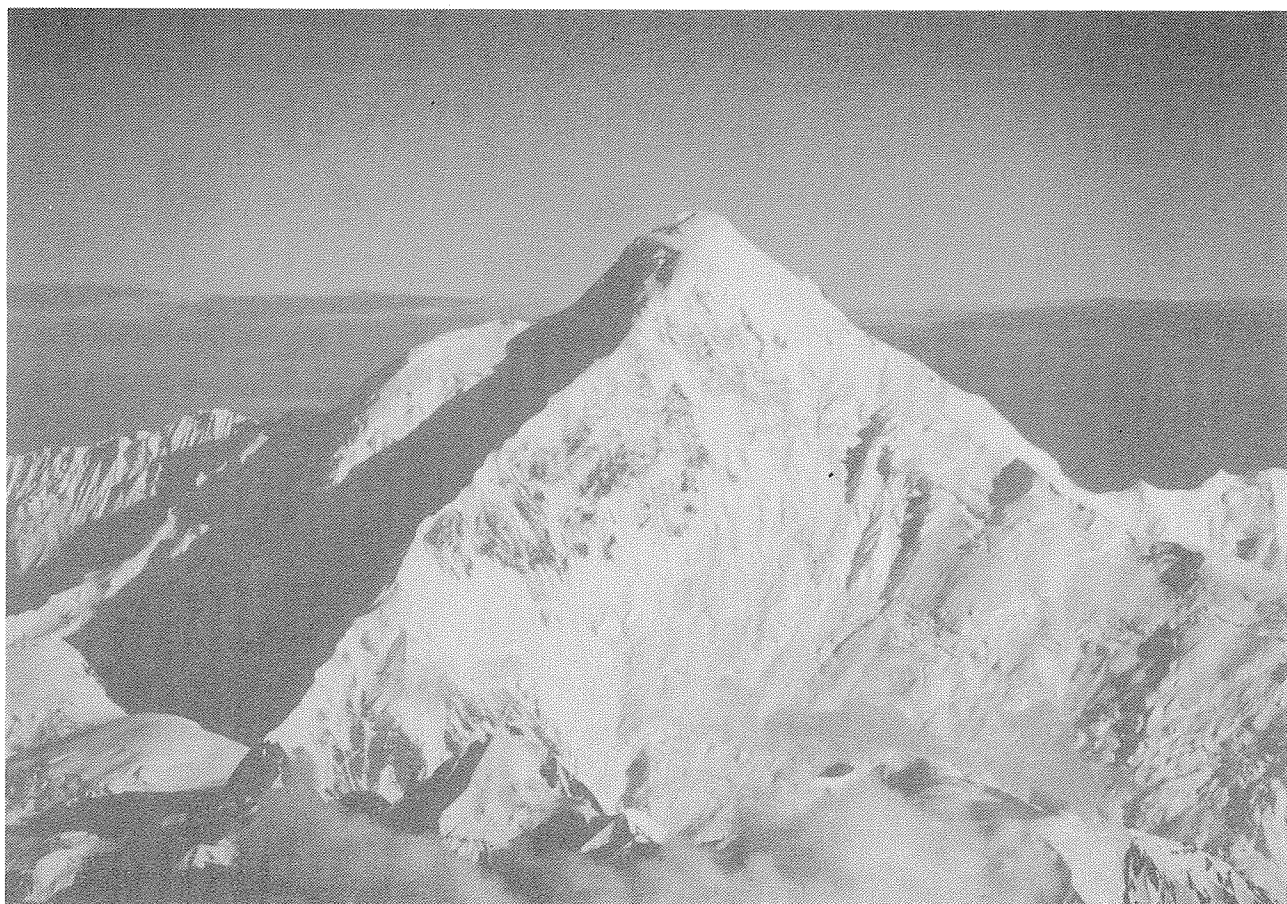


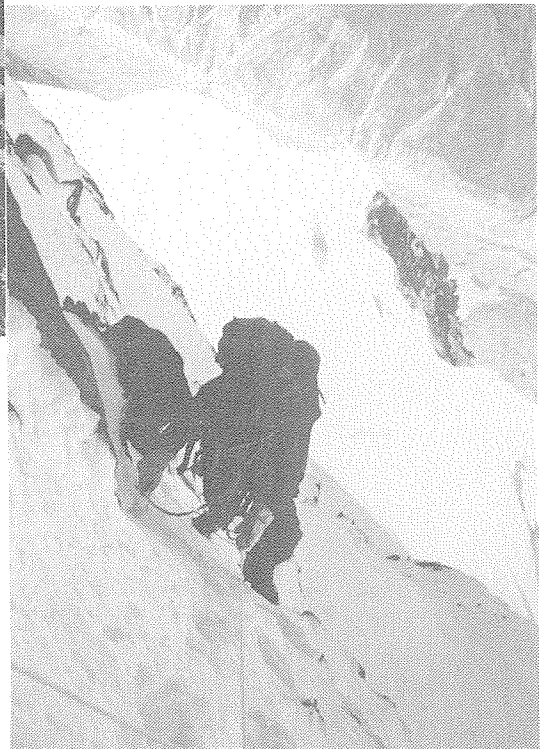
上：ハチンダールキッシュ
右：懸垂氷河
下：荷上げ（後方ファンゲ）





上：C2 直下の上部雪原
左：C1～C2間のナイフリッジ
下：ディラン





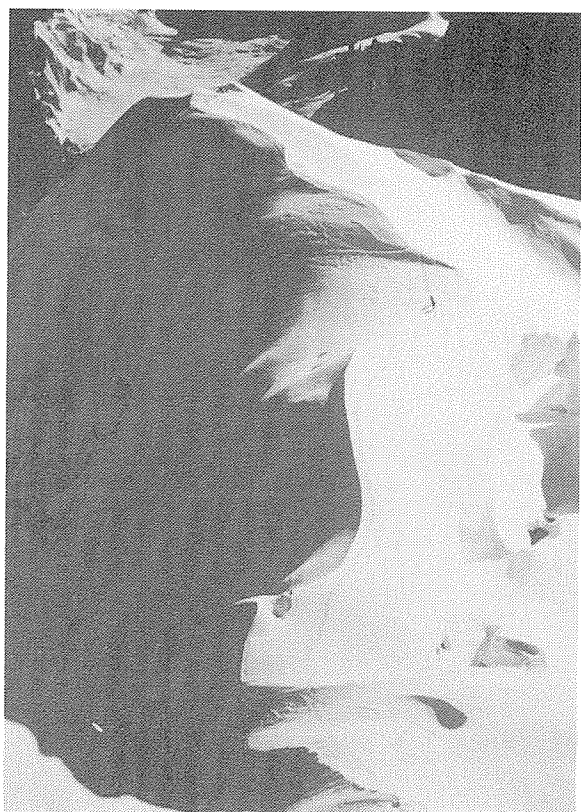
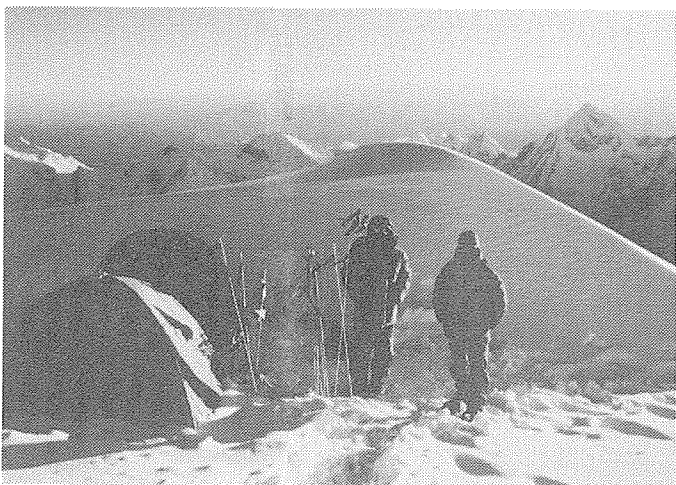
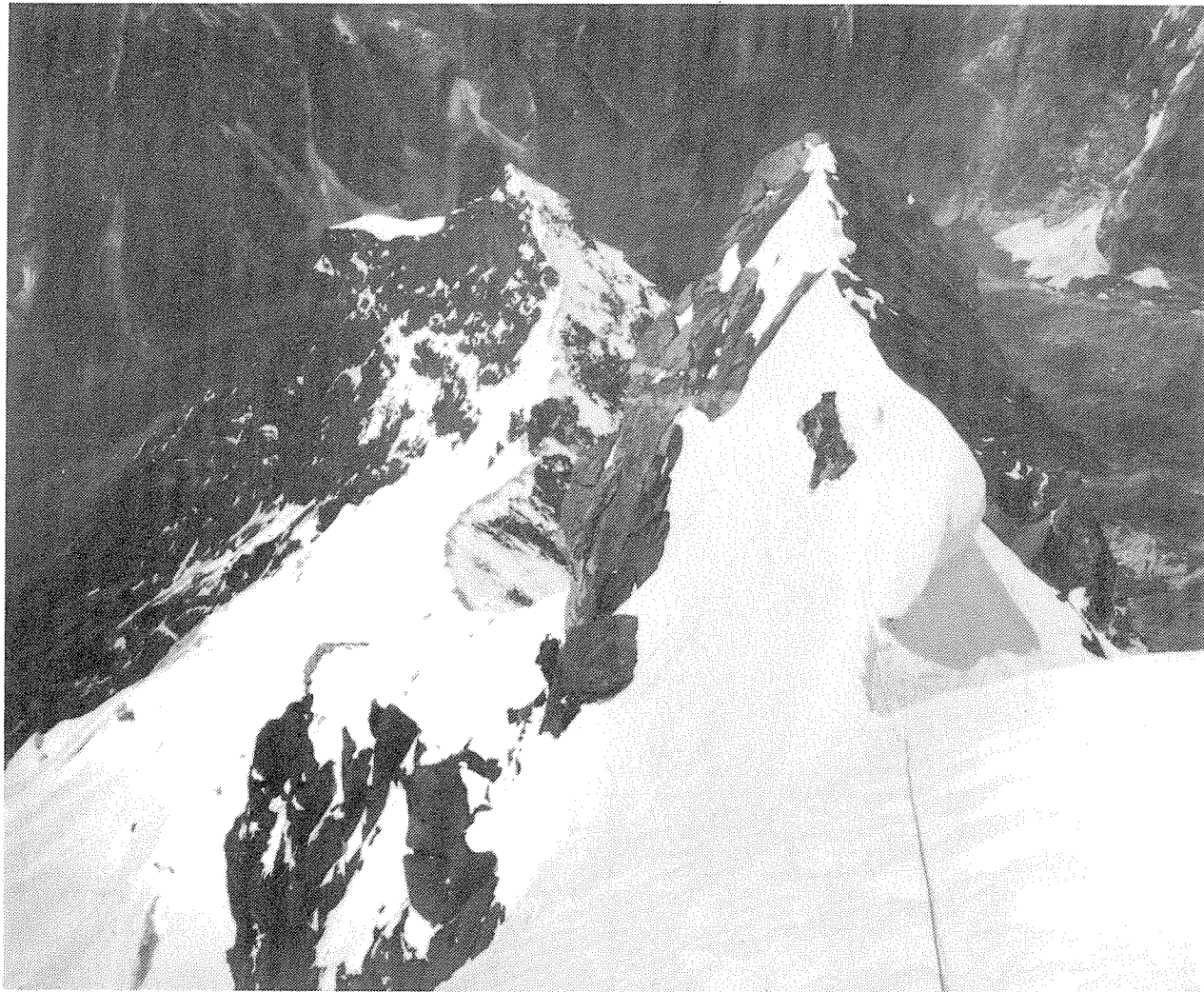
上 : ラカボン

左下 : C2 から見上げた「すべり台」

右下 : 「すべり台」上部

左：バツラ頂上附近
（下図枠部）
下：バツラ南面





上 : 3峰ピーク直下のナイフリッジ

左下 : 3峰ピークのC3

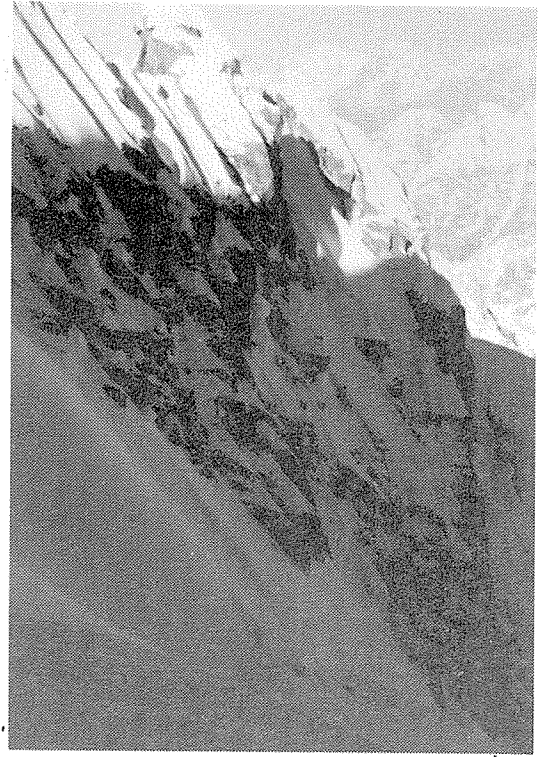
右下 : 2峰基部から見たC3

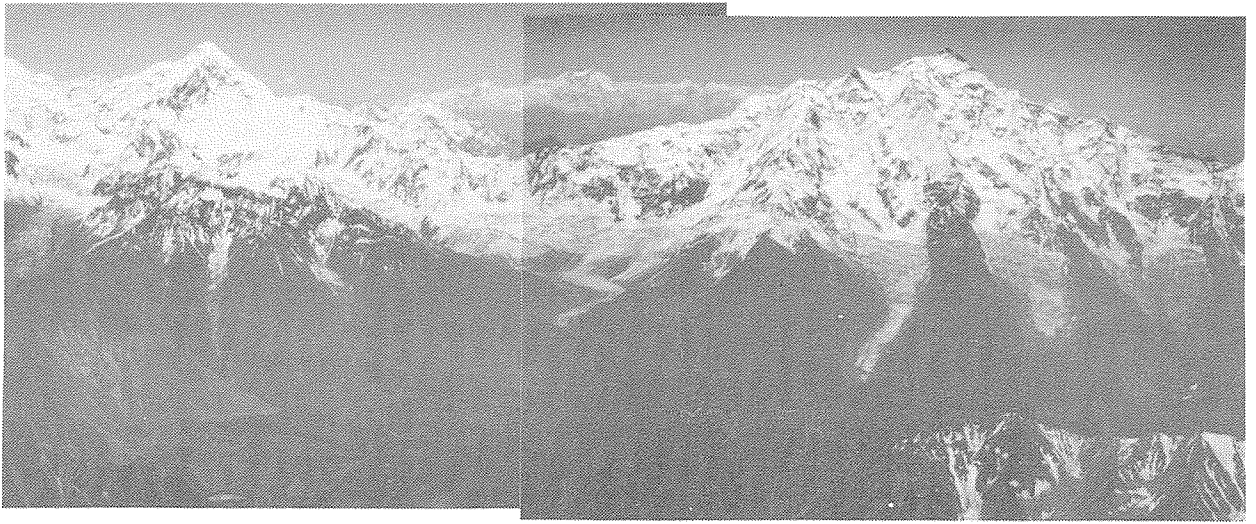


左下：2峰南面

右下：2峰北面

下：頂上雪田を登る





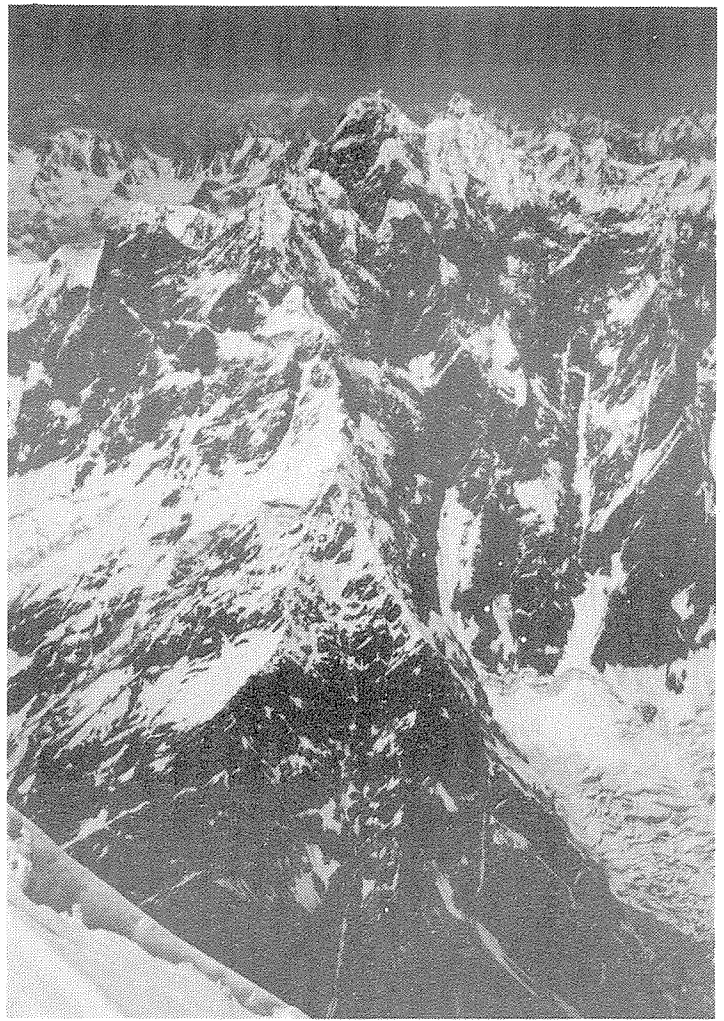
上：ディラン、ラカボシ(中央ナンガパルバット)
下：シスパール(後方カラコウ)

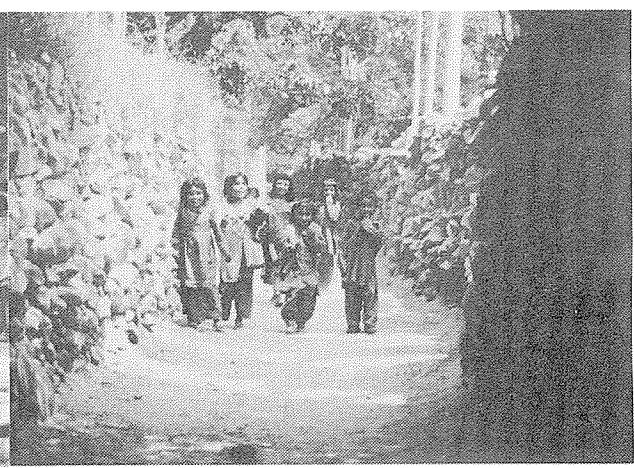
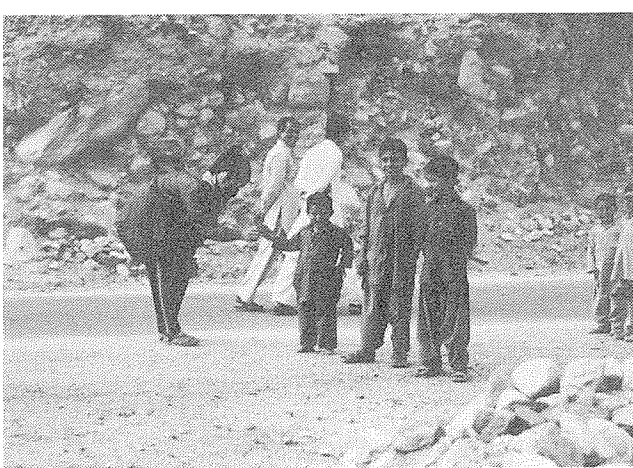
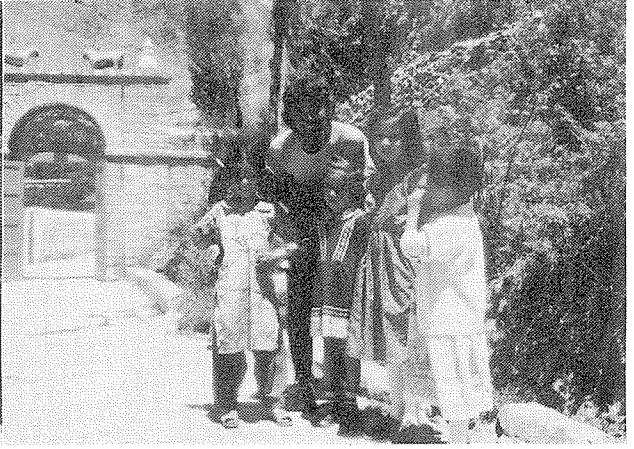
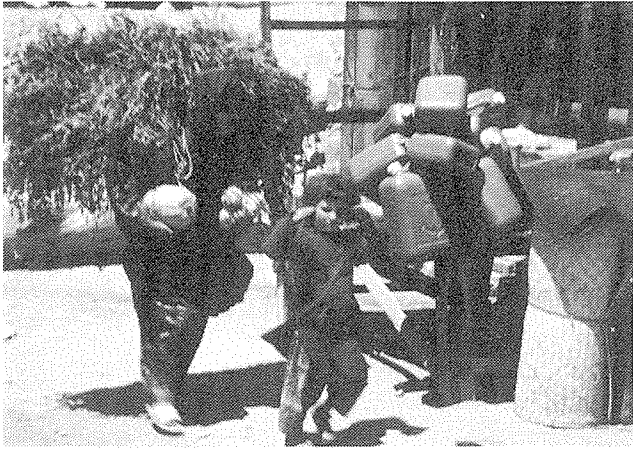


左上：頂上にて

右上：ハチンダールキッシュ

下：ウルタル北面





目 次

発刊に寄せて	山 田 朝 治	2
序にかえて	徳 永 篤 司	3
遠征を振り返って	松 尾 敬 志	4
サンゲマルマール		6
隊員紹介		8
活動報告		13
行動概要		14
行動記録		38
タクティクスについて		41
気象報告		46
担当報告		49
渉 外		50
装 備		53
食 糧		57
梱包・輸送		60
医 療		62
会 計		66
雑感（遠征を振り返って）		69
御協力戴いた方々		98
英文報告		100

発刊に寄せて

大阪大学山岳部長 山田朝治

2年前の大阪大学山岳会遠征隊の報告が発刊できるようになった。発行できたといっても私は何もしていない。すべて遠征隊員諸君の努力のおかげである。原稿の一部は見せてもらったものの、どのように編集して、どんな体裁のものができ上るのか、少し気にはかかるが、とにかく、これでやっと遠征隊の一仕事ですんだという安堵感で私なりに満足している。7年前に山岳部長を引き受けて以来の初体験である。もっとも、正式にはOBの組織である阪大山岳会の行事であり、わが山岳部には直接の責任はないのかも知れない。しかし、山岳部の若き監督が隊長であり、主力メンバーは大学院学生、さらに、3年次の現役部員3名が参加している。実質的には山岳部の遠征隊であろう。現山岳会会長の徳永篤司氏の決断がなかったら、隊長以下全員未経験であるだけに、私はソッポをむいてブレーキ役にまわったに違いない。

それにしても今回の海外遠征では、ずい分多数の方々や、企業各位のお世話になった。調査・企画の段階で詳細な資料を提供していただいた長崎北稜会、遠征隊を組織してからは当時会長であった故水野祥太郎先生はじめ先輩各位の物心両面にわたるあたたかいご援助、さらには多額の募金ならびに物品の寄付に応じていただいた数多くの企業関係の皆様にあらためて感謝の意を表したいと思います。阪大山岳部としては、P-29からアプサラサスにいたるまで豊富な海外遠征の経験があるものの、隊員たちにとってはゼロからのスタートであり、準備活動の頃からかなり苦労していたようである。それだけに、御高齢にもかかわらず募金活動に奔走していただいた故水野先生、計画立案の初期の頃から直接指導していただいた徳永現会長らのご厚意に報いるとともに、御協力いただいた各位に感謝の気持ちをこめて、隊員たちはこの報告書を作成してくれたものと私は考えている。

2年もかかって報告とは、一寸遅すぎるのではないかというお叱りを受けるとすれば、今日まで放置した私の責任である。お許し願いたい。とまれ、時報の外に山岳会報告書が一つできたわけで、後に続く若き山岳部員たちの良き参考文献となれば幸いである。

序にかえて

大阪大学山岳会々長 徳永篤司

1936年、マナスルへの途上ブルガンダキより眺めたP29峰は美しい氷の壁に飾られて魂を奪われる様な秀峰でありました。そのP29峰を始めたとき、まさかこの計画が第4次にわたり10年(1961-1970)にも及ぶものになろうとは思いませんでした。今ふり返って考えてみますと、この10年間に及ぶP29峰への傾倒が今日の阪大山岳会の基礎をしっかりと作ってくれたということを痛感します。山岳会の組織作りというものは登山活動そのものの以外では完成出来ないという当然の事が経験によって得られた訳であります。

つづくアプサラサス峰(1976年 三沢日出夫隊長)も今回のサンゲマルマル峰も、いずれも本会の全力投入によるものではなくいわばP29の余力によって完遂されたものであり、次なる目標へのトレーニングとして行われたものと云えます。その次なる目標—今日のスポーツアルピニズムをめぐる問題の焦点がここに集約されていると云っても過言ではありません。8千米峰の全てが登られた時点に於いて、もはや登山分野における目標がなくなったと思う人と思わない人、バリエーションに始まり、無酸素、厳冬期、アルパインスタイル、そして8千米峰の縦走と連続登頂など、初登頂への情熱をそのまま他の方法論にシフトさせてゆく傾向は際限なく尖鋭化されてゆきました。しかしこうした傾向も漸く峠を越したと思われれます。ポーラメソッドの本質を考えないで、コストと安全性からのみ行われるラッシュアタック、ザイルを外してのファイナルアタック、そして全員登頂志向という、余力のない、体力の限界をそのまま山にぶっつけるというだけではアルピニズムは正しく継続されないでしょう。先人の遺してくれたものを継承し、次の時代を育成していく何かが必要ならなければならないからであります。極地法のもつ普遍妥当性や、一部の隊員の登頂によって全隊員が計画遂行の満足を得るといったメンバーシップや、人間と自然と近代科学との調和が今こそ求めなければならないと思います。

サンゲマルマル登山がこうした時代を背景として行われた事に対し、私はこの計画を企画し、実行し、そして成功させた学生全員に拍手を贈りたいと思います。

最後にこの計画の成功を心より喜んで頂いた篠田軍治元会長、当初よりこの計画に参加し推進して下さった故水野洋太郎前会長に本書を捧げたいと思います。

遠征を振り返って

隊 長 松 尾 敬 志

我々は幸運にもサンゲマルマール峰の頂上を極めることができた。幸運と言ったのは決して自分達の力を卑下し謙遜して言ったものではなく、BC建設より登頂までの過程を振り返れば、さながら良くできたドラマを見ているように、危ない橋を渡りながらも首尾よく大団円を迎えたように感じられるからである。実際、登頂した頃にはモンスーンの影響が出はじめていた。もし日程が三四日長びいていれば、状況は一段と厳しさを増しており、全員登頂の可能性は低かったと思われる。天（自然）の恵みと言うべきであろう。

天（自然）と書いたのは多少訳がある。私見で恐縮であるが、天とか神とかと言うのは私の中では自然と融合しており渾沌とした概念である。何か難しいことを言っているように思われるかもしれないが、例えば春日大社の巨木を見て畏怖を感じ、神聖感を覚えるといったたぐいの素朴な感情のことである。これは私が日本人たるゆえんの処かもしれない。西洋近代文明は、人間中心主義・自我中心主義の原理がその基本にあると言われる。聖書によれば絶対神エホバは山や川、動植物を創った後、人間をこの地上の支配者として創ったと言う。これは人間とその他動植物を差別し、人間に動植物の生殺与奪の特権を与える思想である。「一切衆生」と説かれ、ナルホドと鎮く我々とは趣を異にしている。人間の自然支配を善とする思想に立脚した西洋近代文明、その人間中心主義の近代文明より出でた近代アルピニズムに私は多少違和感を覚えるのである。どこか馴染めないのである。本来私は「山を征服する」と言う言葉が大嫌いである。「山を征服する」とは何を意味するのであろうか。神戸六甲山でもこれを“征服”するのは、どだい無理な話しではないか。

とまれ私はサンゲマルマールを取りまく自然に祝福され、これに融和し登った。私は幸福を感じる。さらに嬉しいことに、私には仲間がいた。仲間とは隊員諸兄のことである。今回の登山隊の特色は、山岳部の構成・人間関係をそのまま引継いでいることにある。もちろん私を初め隊の主要メンバーはOBであり、大阪大学山岳会の会員ではあるが、彼らはほとんど学生であり、若手OBとして部活動にも参与していた。また私自身も山岳部監督として部活動を見守る立場にあった。従って隊の構成は、山岳部11回生で監督の私が、山岳部5・6回生及び現役（4回生以下）を率いると言う形となった。学年序列と言う縦の糸、同学年と言う横の糸で結ばれたこの隊は、登山期間を通じて人間関係に軋轢を生じたことはほとんど無かった。もちろん全員登頂に成功したことで、その軋轢が顕在化しなかったとも考えられるが、よしんば登頂に

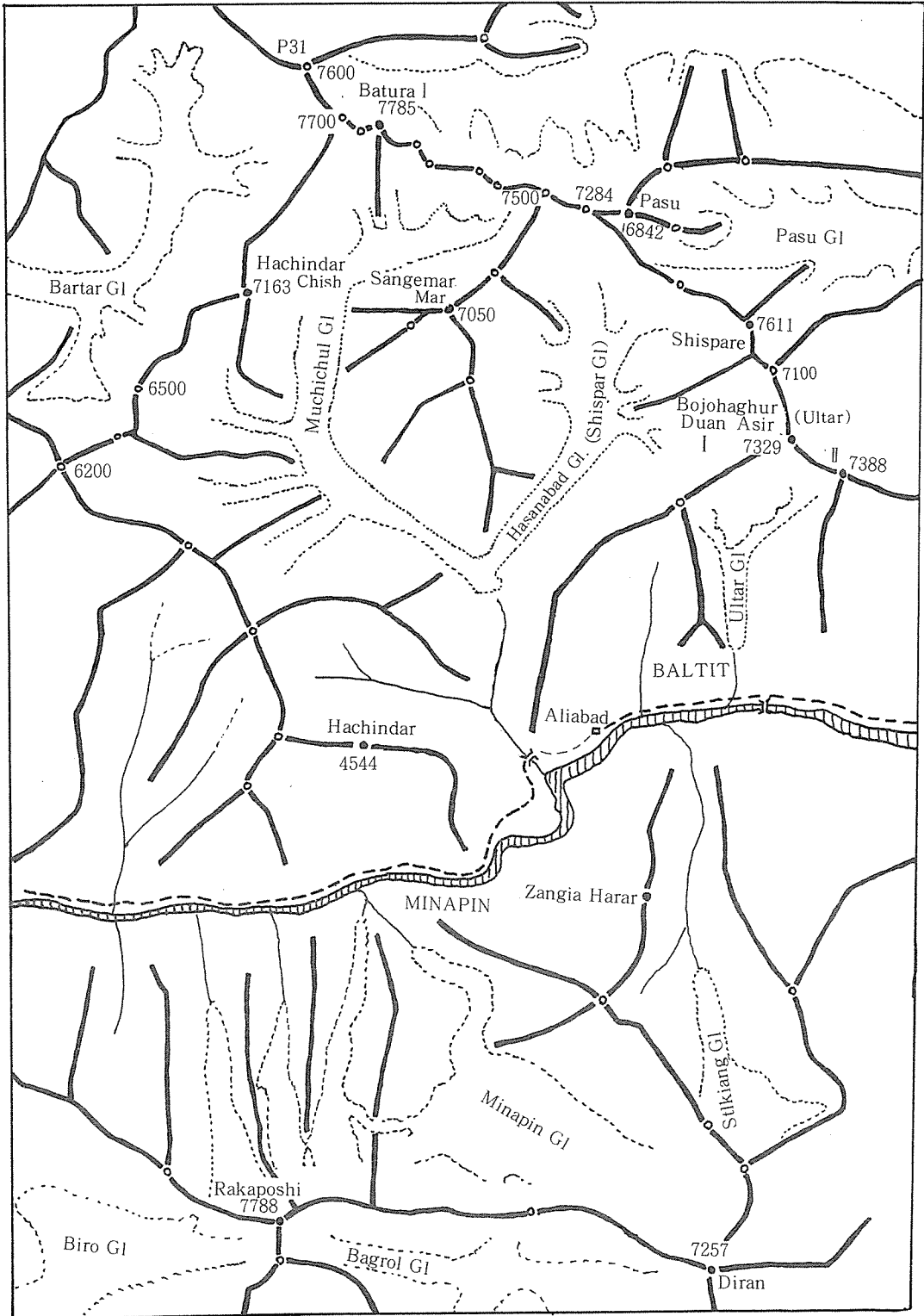
成功しなくても、それほど破綻をきたさなかったと思われる。もし今回の登頂成功の一因としてチームワークの良さが挙げられるなら、隊長として冥利に尽きると言うものである。

余談となるが、大学のクラブとしての山岳部（別に山岳部だけとは限らないが）の役割の一つとして、その活動を通じて各人に自分に対する自信をつけさせることが重要であると私は常々考えている。引込み思案であった者が部活動により自分に自信を持ち、大きく飛躍する例を何度も目の当りに見てきたからである。大プロジェクト「サンゲマルマール登山」を成功させたと言う自信を持って隊員達が実社会へ出て行くことを思うと、私は内心ほくそ笑むのである。

サンゲマルマールの豊かな自然に囲まれ、気の合った仲間と力を合わせて懸命に登ったと言う記憶は、思い出す度にさながら蓮の蕾が泥水より水面へ浮び、開花して香気を漂わすように私の心を幸福感で満たすのである。そしてこの記憶は汲めど尽きない泉であり、私の宝である。

しかしこの記憶にも多少影の射すことがある。それは山岳会会長（当時）水野祥太郎先生が、我々の出発を待たずして逝去されたことである。従って今回の登頂成功を我々は生前に御報告することはできなかった。今思えば先生は病身をおして登山準備に御尽力下さり、それが心ならずも死期を早めたのではないかと思うといたたまれない。ここに深く哀悼の意を表わすとともに御冥福をお祈りするものである。

末筆となり恐縮であるが、今回の登山は言うまでもなく各方面の御協力・御援助の賜である。ここに関係各位に改めて御礼申し上げる次第である。



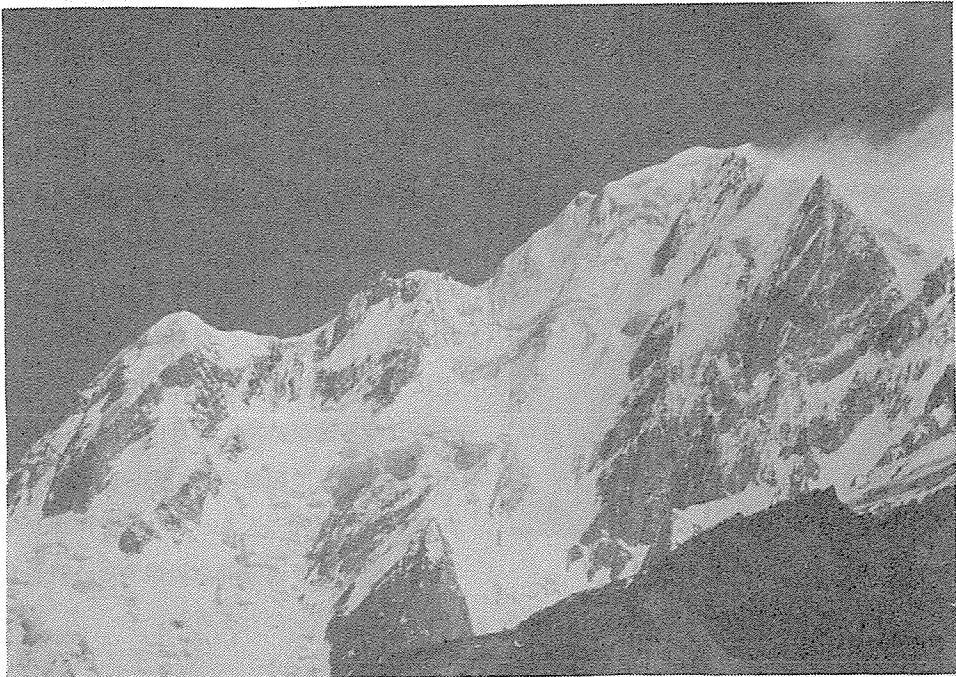
サンゲマルマール

サンゲマルマールはパキスタン北部のカラコルム山脈・バツラ山群に属する独立峰でC7500無名峰より南にのびた支尾根上、ハサナバッド氷河（シスパー氷河）とムチチュール氷河の分水嶺として聳え立っている。西にハチンダールキッシュ、東にシスパーレ、ウルタルの鋭峰を待らし、屏風のようなバツラの大岩壁で北を取り囲まれた姿は、さながら堅固な城塞に守られたお姫様とでも言おうか。南に開けたハサナバッド谷の彼方には、フンザ川をはさんで右にラカボシ、左にディラン、さらにマルビティン、スパンティクと続いている。

サンゲマルマールからは4本の尾根、北稜（バツラと結ぶ）、南稜、西稜、南西稜が派生しているが、南稜はほとんど高度を下げず2つの氷河出合いまできてすっぱりと切れ落ち、東面は氷河から数千mの壁、西面も上部に黒々とした岩壁を有してともに登路を拒んでいる。西稜は頂上と同じ大理石でできた急峻なナイフリッジ。最後に残った南西稜が我々の採ったルートで、頂上より1峰・2峰・3峰の3つのピーク、さらに稜末端にのこぎり刃状の前衛峰（ファンゲと命名）を有し、1峰・2峰は岩稜、3峰より下部は広い雪稜となっている。

サンゲマルマールの名称については多くサンゲマル・マールとされているが、正確にはサンゲ・マルマールとすべきであり、ウルドゥー語で“sange=stone”、“marmar=marble”から“大理石でできた岩山”といった程の意味であろう。ハサナバッド谷から黄金色に輝いて見える1峰南壁をさして名付けられたものと思われる。

尚、高度については6949mと7050mの2説があるが、ここでは全て後者にしておいた。



隊 員 紹 介



松 尾 敬 志 30才

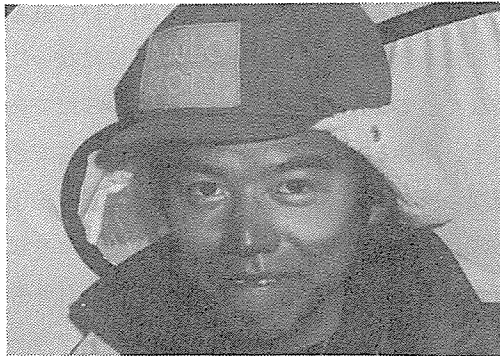
大阪大学歯学部助手

冷静沈着な我らの隊長様。その細身の体はとも山登りなどする様には見えないがいたって
壮健、他の隊員と区別なく荷上げにルート工作
にと精力的に活動し、自らも2次アタックで頂
上に立つ。実生活においてはこの3月ポルトガ
ルの女性と国際結婚、4月には大学の助手に着
任したばかりで順風満帆の勢い。とかく安定志
向に走って守りに入りがちな状況にありながら
大役を引受けて遠征隊を組織する。情熱未だお
とろえずといったところか。



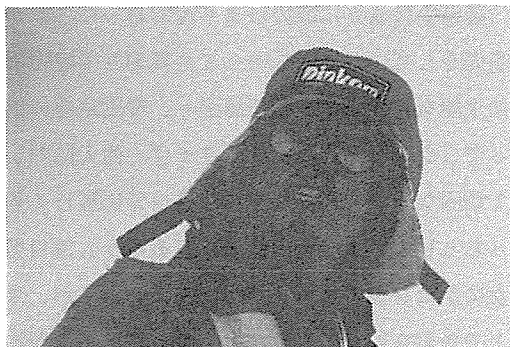
広田 雅彦 27才
川崎重工勤務

社会人として一ヶ月の休暇を取っての参加。現役時代の我々をきたえたのが彼で、いわば隊の中枢を作った兄貴分的な立場にある。口数少なく温厚、メガネの奥の目が優しい。遠征前マラソンで痛めた膝の状態が悪化、十分な活動ができなかったのは残念だが何とかC1の途中まで登る。皆に遠慮してか常に控え目だったのは却って申し訳ありませんでした。職持つ身で遠征に出る難しさを知るとともに、一瞬に賭ける執念を見る。



奥山 宏臣 24才
大阪大学医学部附属病院勤務

今春国家試験に合格したばかりのドクター。ちょっと心もとない気もするがポーターからは絶大なる信頼を得ていたようだ。隊員中唯一のヒマラヤ経験者であり、彼のトレッキングがクラブ内に遠征気運をたかめ今回の派遣に至ったともいえる。山では常時ルート工作の先頭に立って活躍、登攀隊長的役割を果たす。幾分短気ではあるがあっさりして気のいい性格。女性からの air mail は彼と榊原の2人宛で、他の隊員を大いにうらやましがらせる。



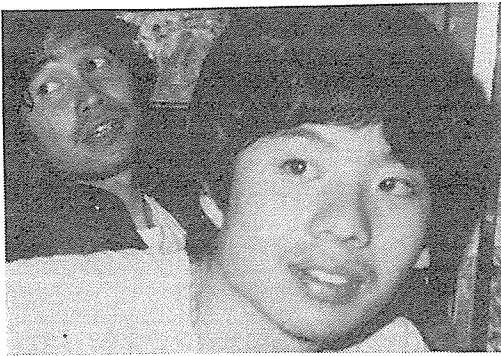
上月 登喜男 24才
大阪大学理学部大学院学生

「登喜男」とは因果な名前だ。山男として宿命付けられた名を背負って生まれた彼は、現役時代からのクラブの信頼を一身に集め、今回の登山でも持ち前のストイシズムと体力を武器にすばらしい活躍ぶりであった。幸か不幸か、下山後のインド漫遊でヒョんな病気におかされ、現在療養の身。山での仕事人ぶりがたたったのか？アラーの神も完全には平等とはいかぬ様だ。それとも働き過ぎに対する警告であろうか？



大石 真也 23才
大阪大学工学部大学院学生

小柄だが筋肉質、そのコリコリした体つきはあらゆる面に細かくきちんとした性格をよく表わしている。遠征ではそこを見込まれての金庫番。日頃静かな彼も「勘定が合わん」とプリプリしては何度も計算し直すのであった。出発直前、足の骨にヒビが入り参加が危ぶまれたのも何のその、山に入ってから体調はばっちりで、下痢や風邪でダウンするものが多い中、隊長の決めた毎日の行動予定を休みなく完遂したのは彼だけであった。



野口 明 23才
大阪大学基礎工学部大学院学生

入部当時無鉄砲で急進的と思われていた彼も逆に皆を教育し遂に夢を実現するまでになった。彼なくしてこの遠征が出ることはなかったであろう。渉外というよりも総務といった感じで煩雑な手続きや準備に大車輪の働き、英語が苦手な隊員の中にあってその流暢(?)な話しぶりには大いに助かる。中肉中背で男前、人あたりも良く、ピンディ空港では美人の外人トレッカーと知り合いになるがそれっきり。彼を燃やし続けるものは山しかないのであろうか。



榊原 淳 23才
大阪大学工学部大学院学生

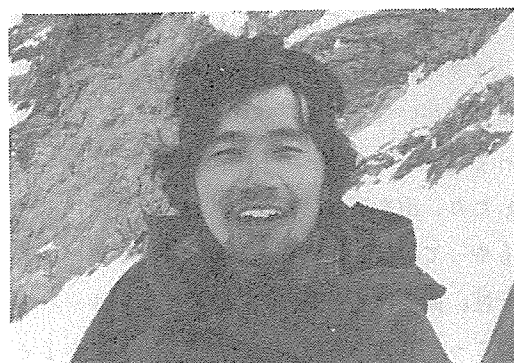
装備係はまさに彼のはまり役であった。家が商売をしているせいもあって企業廻りでは特異な才能を発揮する。責任感強く、現実路線に沿ってコツコツと進めていくタイプ。他人に対して頑固な一面もあるがそれだけ自分に厳しくきっちりしていることの裏返しであろう。毎日彼女に手紙を書くまめさ加減には感心するが、頂上でやおら彼女の写真を取り出し供に記念撮影するにいたってはずっこけました。



佐藤 健哉 23才

大阪大学工学部大学院学生

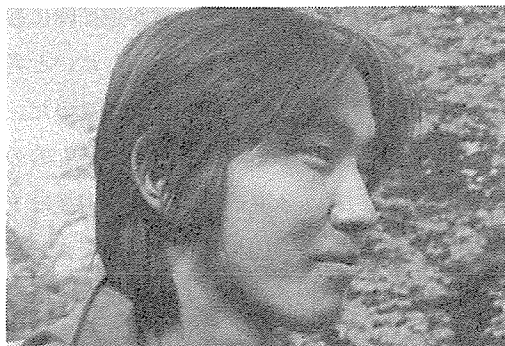
立派な体格と凄まじい体力。童顔・小柄な隊員の中にあって山男らしい山男といえば彼くらいなものだ。強運の星の下ちょっとのことではへこたれないが落ち込むと激しい。バイクに読書・山登りとダンディーを気取る反面割合ミーハー的な要素も持っている。時折飛び出す和歌山弁はご愛敬。ただ今回高度順化の失敗からその馬車馬の様なパワーが生かされずに終わったのは誠に残念で本人としても悔しかろうが又の機会に期待しよう。



大西 啓之 21才

大阪大学人間科学部学生

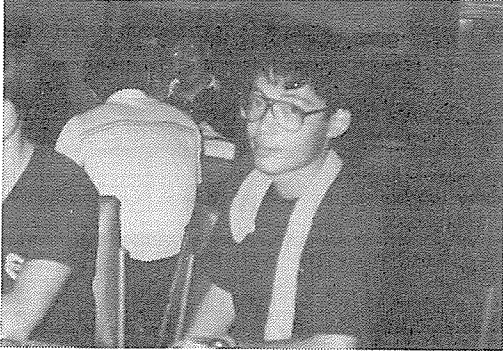
クラブきっての宴会男。チャキチャキの大阪人らしく口八丁手八丁、隊のムードメーカーとして貴重な存在である。言動とはうらはらに根はいたって真面目な努力家・負けず嫌いというべきか。しつこい下痢にもかかわらず毎日行動。「ほんまに調子悪いんか」といぶかる声しきりで「狼少年」のあだ名を頂戴する。やつれた顔に伸びたヒゲはさながらはりつけ前のクリストを思わせるが帰国後愛しの彼女の審判はどうだったのかな？



水川 朋吉 20才

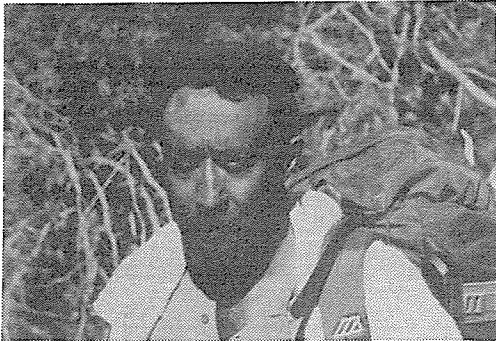
大阪大学理学部学生

現役(3バカ)トリオのリーダー格だがもう一つ得体の知れない男だ。斉藤ゆう子の様な丸メガネを掛け、哲学書を読み、レギュラーコーヒーを愛飲する。その生活状況はリッチそうに見えるながら実は赤貧にあえいでいる。「ヘビ」の様なねちっこいトレーニングには定評があるところ。今や入部当時のきゃしゃなおもかげはなく足・腕ともに随分太くなった。ただ胃腸は少し弱いらしくほのかに香る彼のシュラフは敬遠され気味であった。



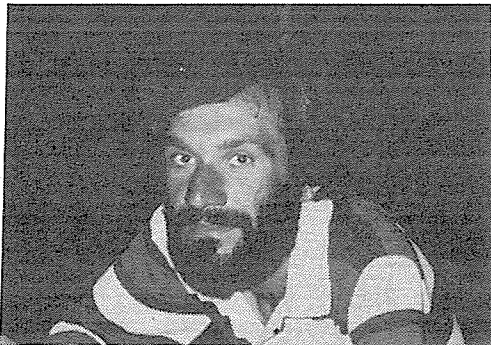
宮田 俊一 20才
大阪大学工学部学生

本多勝一か宮田俊一か、信州が生んだ2大スーパースター。岩登りの腕は確かだが山に対する理論武装となるとどうか。かつては酒乱で慣らし「スパーク宮田」の異名をとったものの最近は一ぱったりとなりをひそめ、その復活を待望する声は根強い。普段朴訥でおとなしい性格ゆえ大西ばかりか皆の毒舌の餌食であるがあくまでそれも冗談半分。その人柄にひかれこそすれ決してうとまれるようなところはない、所謂好青年である。



GLAM HANSSAN MIR

遠征隊付としては珍しい少佐のリエゾンオフィサー。高慢で鼻もぢならないのではと案じていたがいたって善良。押しが強く交渉にはもってこい。ポーターの保険契約で大幅に誤摩化したり、山を下りてピンディに帰ったりのアツもやっつてのける狡猾さもある反面ナイーブで心配性。荷上げで皆が出払った時テントキーパーにこっそり「俺は皆から好かれているのか」と尋ねたという逸話もある。2人目の子供が生まれたばかりの優しいパパ。



MOHAMMAD AYUB KHAN

フンザ出身のコック。過去幾度か遠征隊に参加した経験がありいずれどこか登頂したいと考えている。それが彼らの立身出世の道なのだ。ピンディではどこかしっくりしなかったものの地元に戻ればリラックス、リエゾン下山後は1人でBCを守る。隊員との関係も良好でABCへの差し入れや家に招かれての食事は有難かった。撤収の際一族郎党を連れて来てBCばかりかABCの残り物まできれいに持って帰ったのには驚いた。

活 動 報 告

行 動 概 要

行 動 記 録

タ ク テ ィ ク ス に つ い て

気 象 報 告

フンザへ



先発隊の上月・野口が日本を離れたのが5月18日。1週間遅れで本隊の松尾・榊原・佐藤・大西・水川・宮田が、そして6月1日には残りの広田・奥山・大石が加わり、2週間振りに遠征メンバー全員がそろそろ。翌2日ブリーフィングを済ませ準備は万端。ここラワルピンディはミセスデービスホテルに横付けされたけばけばしい装飾のバスは、天井から車内まで隊荷のプラカートンで一杯に埋まり、カラコルムの奥懐、桃源郷フンザへの出発を今や遅しと待っている。

思えば2年前、4人の部員の大学院進学を機に持ち上がった遠征計画も迂余曲折の末、11人のOB・学生から成る隊としてまとまり、遂にここまでこぎつけることができた。大学入学と同時に山を始めた者が過半数の隊で、一体何人の者が自分自身、遠征に参加するなど予想しえたであろう。遠い夢物語にしか過ぎなかったことが、今現実になりつつあるのだ。「遠征は日本を出た時には終っている」と言った先輩がいたが、けだし名言であろう。煩雑な手続きを終え、山に入ってしまうばこちらのものである。むしろそこに至るまでいかに要領良くマネジメントするかが問題の大半と言える。我々も

どうかこうにかパキスタンまで入り、明日の夕にはサンゲの麓にいる。

イスラムのラマダン（断食月）で昼間閑散とした街も、日没とともにその豊かな生命力を吹き返し、俄然活況を呈する。いつもの「スーパー」食堂でハンバーガーを買い込み、いざ出陣。けたたましい轟音をたてて走り出したバスには、11人の隊員とリエゾンのメジャーミール、コックのアユーブの他、なぜか見知らぬ男（後で単なる便乗者だったとわかる）が2～3人乗り込んでいる。

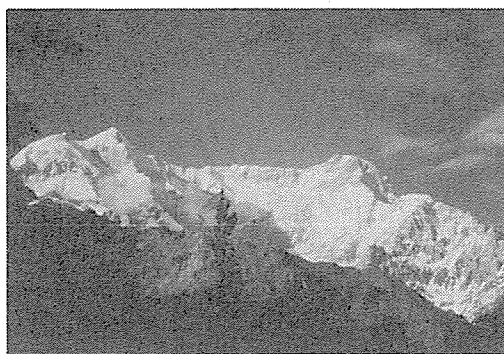
メジャーミールは典型的な職業軍人の少佐で、一般の兵士とは異なり幾分小柄ではあるが、威厳があり、交渉にも強く、たいそう頼もしい男だ。右前頭部に大きな陥没があり、何かたいした武勲でもと思いきや、プールに飛び込んで打ったあとというコミカルな一面も兼ねそなえている。一方のアユーブはデービスホテルでナジール（チョゴリアドベンチャーズ）から紹介されたフンザ出身のコック。ヒゲもじゃの顔はとも20代前半と見えないが、笑顔の素敵なおとなしい青年である。

クラクションをかき鳴らし、ブレーキなど無いかのようにぶっとぼすバスは、道にたたずむ

牛の尻をかすめ、対向車を紙一重で交わしながら突き進む。荒っぽい運転と窮屈な姿勢にうとうとすることもできず、夜明けを迎える頃にはインダスバレーロードに入っていた。数100mもあろうかという深い溪谷、その側壁を削って造られた道は急カーブも多く、谷底へ転落しないかハラハラのしどろしどろである。それでも遠く雪を頂いた山をかい間見では、カメラを取り出し写真を撮る。橋を警備する兵士は見えていないようで見ているものだ。タイミング良く通りかかったところで急停止。橋の写真と誤解したらしく、お国柄の違いに驚かされる。

昼を過ぎ、谷がひらけ、辺りが沙漠の風情を見せ始めるとギルギットは近い。そこよりさらに3時間、ピンディよりつごう19時間かかってフンザはアリアバッドのPTDCキャンプに到着したのは、既に3日の夕暮れであった。

一夜明けた4日。連日40度を越す猛暑に慣らされた体には、うって変わってすがすがしい朝だ。空は青く澄み渡り、ウルタルがその奇怪な姿を見せて屏風のように立ち塞がっている。この山も1週間後には広島山岳会の挑戦を受け



アリアバッドからのウルタルI(左)・II(右)

るのだ。同じ時期、それも隣り合う山でそれぞれが初登頂をねらうとあっては、我々も負けて

いられない。朝食後、アユーブを案内人にして野菜の買い出しに行き、残りはメジャーミールと共にポーターの雇用にあたる。レギュレーション通り、さしたるトラブルもなくアリアバッドの住人62人が決定。明日からキャラバン開始、待望の入山である。

シャングリラ

アリアバッドに到着したのは6月3日の夕方であった。ピンディでの暑さがウソの様に涼しい。おまけに湿度が低く又蚊や蠅も少ない。快適そのものである。

宿泊所はPTDCのテントである。テントといっても大きな家型テントでベッド2つに机、椅子まで備えつけてあり、キャンプ場の片隅にはシャワー、トイレも完備(ただし湯は出ない)、我々の感覚とはかなり異なったテント生活だ。そしてうれしいことにはキャンプ場のあちこちに植えられたアプリコットやリンゴの木が実をつけており、手づからもぎ取って食べれることであった。その上眺めもすばらしい。ウルタルI・II峰、ラカポシ、ディランへ続く無名峰などなど。晴れわたった空の青に映える彼女達の姿は見飽きることがない。

そこはまさしく桃源郷であった。快適な気温と湿度。少し暑くなればアプリコットの下に椅子を持ち出し、白嶺を眺め続ける。渴きを覚えた時は少し腕を伸ばしてアプリコットの実を拾えばよい。もうだいぶ長い間こんな時間の過し方を忘れてしまっていた。もしこの時日本の事を思い出していれば帰りたくなかっただろうがそんな事は頭の隅をかすりさえしなかった。

(水川)

キ ャ ラ バ ン



6月5日。ぞろぞろと集まったポーターに荷物を振り分ける。昨日持たせておいた番号札の順に重さを測り、1つ1つ確認をとった後与えていくのだ。カートンは大きさも形も様々、それでも皆器用に縄を巻きつけてかつぐ。さすがはプロだ。用意ができたところで出発。隊員が中に混って監視するのも束の間、5分程歩いて即休憩。さすがはプロだ。彼らは腰を掛ける石、広い空地など休める所では必ず一服していく。それを我々が先導しようとするのだがのれんに腕押し。自然隊員ばかりが前に出る格好となる。

一般道から氷河への入り口ハサナバッドの橋までたどり着くと、突然それは谷あい遥か彼方にこつ然と姿を現す。サンゲマルマールだ。頂上からギザギザのピークが3つ。マーブルの名をほうふつとさせる1峰、黒々とした岩の2峰、白い雪のドームの3峰と、まるで劔の源治郎尾根を数倍大きくした様な稜線が圧倒的な迫力で聳え立っている。写真で熟知している筈の山も、いざ目の前にすれば感慨新た。果して登れるのだろうかという不安と、これなら相手として不服はないという満足感の入り交った複雑な気持ちになるが、その山容が劔(日本で我々が最も愛し、頻りに訪れる山)に酷似していることで

親近感が湧き、これこそ我々の山だという思いが強まる。橋を渡って谷に入り、程なく歩くとその姿も見えなくなるが、皆依然として興奮さめやらず、「2峰が難関だ」だの「1峰の壁は大丈夫だろうか」などとルート談議に花が咲く。

沢筋に出れば彼らのティータイム。薪を拾って来てそこここでチャイを沸かす。我々も砂混じりのパンのご相伴に預るが、何となく心配で食が進まない。彼らは実に愛想が良く、チャイの時のみか行動中もポケットからアプリコット(干あんず)を取り出しては差し出してくれる。ところがこれが非常に美味で、疲れた体にはもってこい。そのせいかどうか休憩こそ多いものの歩くのは速く、午後2時には本日の天場モースに到着。それぞれのグループに分かれて寝床を決め、炊事に取りかかる一方、奥山、松尾の所に集って来てはどこそこが痛いと訴える。2人はドクターに早変わりして俄か患者の対応に大わらわ。さらに今朝支給したビニールシートを忘れて来ながら、降り出しそうな天気になって帰ってしまうグループもあり、どうなることかと心配するが、翌朝ケロツとして戻って来たのにはホッとするやらあきれるやら。

2日目からは氷河に入る。イメージしていた白くきれいなそれとは異なり、見たところ単なる土砂の河にがっかり。もっともキャラバンは氷河の上を歩かず、右岸につけられた道をたどる。ハサナバッド氷河とムチチュール氷河の出会いまでくるとシスパーレが見える。トサカの如き頂上からウルタルへと続く稜線は、さながら翼を広げた怪鳥の様だ。さらに歩を進めると今度はもう一方の雄、ハチンダールキッシュの登場である。天を突かんばかりの鋭いピークを持ったこの山も、2年前金沢大学隊によって初登頂されているが、一体どこを登ったのだろうかと思うような尖峰だ。これら2つの俊峰にはさまれるとさすがのサンゲマルマールも少々色あせるのはやむをえない。それは認めよう。しかし何より彼女は処女峰である。太古の昔より誰一人として触れたことのないその白いやわ肌は、黄金色に輝く頂にこそ我々は立ちたい。ルビーの産地シャントングシを過ぎ、やがて全景の見晴らしが効くヤーバサに到着。幕営してルートを検討する。



ポーターを診る奥山ドクター

かつてこの山にはカナダ隊と長崎北稜会、そしてバツラ偵察の為に下関山岳会がそれぞれ入山したが、中でも長崎北稜会は1981年、4人の隊員によって3峰直下の6210mまで

登っており、3峰の大雪壁を「すべり台」と名付けたのも彼らである。我々が遠征計画を立てこの山にターゲットを絞るにあたっては、ハチンダールの金沢大学隊及びこの長崎北稜会に依るところ大で、貴重な資料を参照させて頂いたばかりか有益なアドバイスまで頂戴した。それによると彼ら自身は南西稜末端の前衛峰（その形状からファンクと呼ぶ）を捲いて「すべり台」へと登ったのであるが、むしろ3峰南に落ち込んでいる氷河上にBCを設けて直接「すべり台」基部へ出るか、いっそそのまま1峰の壁を攀じた方が良さだろうということであった。実際ここヤーバサから眺めても然り。何とか氷河まで行けないかサーダーと相談するも、彼の返事は要領を得ず附近の状況がわからない。翌朝大石と野口を偵察に走らせ、可能ならBC建設までこぎつけることに決める。

3日目。氷河を渡って左岸に移る。ここはトチと呼ばれる放牧地だ。少し下った沢で例の如く一服していると、現われ出ましたのが山羊の大群。百頭以上はいたであろう。砂塵をあげて次から次へとやって来るのはいいが、水におびえて立ち止まり、辺りは山羊で一杯になる。この放牧についていたのはわずか3人きり。ポーターが無理矢理つかまえては対岸に放り投げ、山羊の移動を手伝う。一仕事終えてなかなか動き出そうとしないポーターにしびれを切らし、偵察が気がかりな我々は砂混りの埃っぽい道を一足先にバックロールへ。

そこでのトランシーバー交信によれば、BC建設は極めて困難。遥か上部まで水の便なく荷物を置いてさらに偵察隊を出すも答は同じ。その上サーダーとの話ではわからなかったのであ

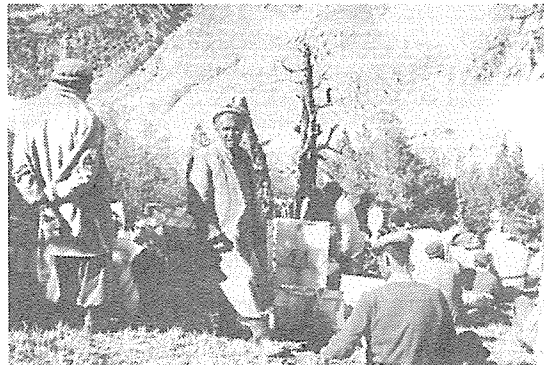
るが、ポーターには部族間の厳格な縄張りがあり、そこに入ると鉄砲で打たれても仕方がないと言っては頑として拒絶の態度。こうなれば完全にお手上げ。郷に入りては郷に従えとばかり、ポーターとサーダーがさかんに勧めるイルキッシュへ向う他ないようである。彼らは今晚、天場整地用のスコップを焚き火にくべてしまった。ほんまに大丈夫かいな。

ところがどっこい4日目は朝からどうも様子が違う。いつもだらだらしているポーターがやる気満々なのである。今日で最後、イルキッシュまでと決っているせいか我々を置き去りにして早々と出発。追いつくのに疲れる程猛烈なスピードでとぼして行く。最初からこの調子で歩いていれば裕に3日で来たであろう。うまくしてやられたものだ。といて我々も衡りの目盛りを誤摩化したり、苦情を言ってきたポーターにちゃんと荷物を増してあげたりと、結構(少しだけ)ずるいことをやっているのとお互い様といえなくもない。

緑豊かなガイマリンを過ぎ、登りにかかる頃になるとさすがに前半のオーバーペースが効いてきたのか、ぼちぼちへばりだす者が増えてくる。ふと見れば空荷で登っているポーターがあ

り、荷物はどうしたのかと思いきや、誰か元気な者が代りに持ってやって助けているようだ。仲間意識とでもいうのだろうか、こうした面での結束は非常に固い。概して若い者の方がだらしく、常にトップを歩いていた半ズボン姿の副サーダーは60才というのにトリプルまでしていたし、同年配と思われる爺さんも得意のフォークダンスを披露する余裕を見せていたのに対し、美少年とあだ名された10代後半位の青年は疲れ切った表情、これまたいかにも弱そうなアユーブの友達と共に空荷でトボトボと登って来る。

彼らの大半はブルシャフスキー及びウルドゥー語しか話せないが、「シャバ・シャバ(ファイト・ファイト)」と声を掛け合うだけで心がなごみ、意志が通じ合う。ストライキもなく、昼過ぎに無事イルキッシュ到着。広くはないが水路が有り、格好のハチンダールキッシュ展望台だ。BCに着けば写真を撮ってやる(彼らはポラロイド写真が大好きだ)と約束していたにもかかわらず、今日中にバッコルさらにはヤーバサまでも戻るつもりなのか、帰路2日分を含む残りの賃金を精算するやそそくさとして行った。手を振って別れの挨拶を交わす。



我が良きポーター

ポーター達は、とにかく歩かない。少し歩い
ては休む。全然進まないのはおかまいなしで、
2、3時間歩くと昼食となる。これがまた、焚
き木拾いから始めて、火をつけて、チャイを作
って、さらに一休みするというのだからべらぼ
うにのんびりとしている。

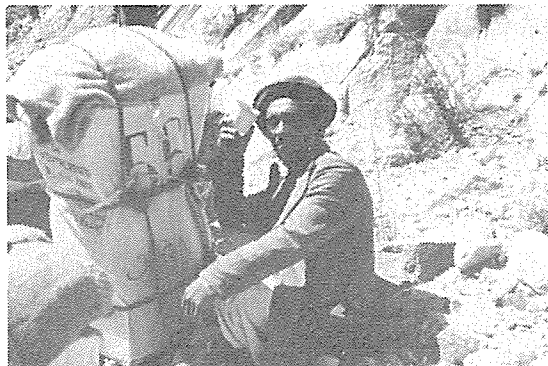
朝の出発時も我々隊員が出発しないと、ポー
ター達も腰を上げ様とはしない。我々は、荷物
の紛失などのない様に、各自隊列の中で散らば
ってポーターを見張る事にしていた。しかし、
キャラバンも2日目からは、ポーター達のスロ
ーペースには合わせていれず隊員が先行する様
になっていた。

6月7日は、ヤーバサからバツコールへ。こ
の日も、私以外の隊員は、ずっと前を歩いてい
る。ビデオ撮影でペースの上がらない私が、何
人ものポーターの中に1人とり残されてしまっ
た。しかし、何も怖がる事などなく、ポーター
達は、親切で気さくな奴ばかりであった。一緒
に歩いていると、私にはわからない現地語で話
しかけてくる。アリアバッドの現地語はブルシ
ャフスキー語でウルドゥー語とも違うので、チ
ンブンカンブンだが、身振り手振りで理解でき

るものである。

天気もいいし、景色もいいのだが、彼らとの
んびりしているとどんどん遅れるのでペースを
上げようとするのがこれが難しい。隊員の私が、
ゆっくり歩くので彼らも私に合わせてゆっくり
なのかとペースを上げると、私が先行してしま
う。どうも私に合っているのではないらしい。
しかし、私がビデオを撮るためにザックをおろ
すと、ついさっき休憩したところでも彼らは休
む。気にせず先に行ってくれてもいいのだが、
親切にも私を待ってるつもりなのだろうか。結
局、早く歩くのは嫌で、休めるのならいくらで
も休むという魂胆らしい。

そんな彼らが、最終日の朝はまだ日の出ぬう
ちからどンドン出発して行ったのには隊員一同
大笑いであった。とにかく早く仕事を終わって
家に帰ろうと思っているらしい。何と調子のい
い奴らかとあきれてしまうが、BCに着いて運
び上げられたカートンの山を見ると感謝感謝で
よく誰も逃げ出さないで働いてくれたと信頼感
さえ持つてしまう。金を受けとって山を降りて
いく彼らの姿も男らしい。「また、帰りはよろ
しく」と、いったん彼らに「コダハーフィズ(
さようなら)」 (大西)



イルキッシュ



6月9日。いよいよ本格的な登攀活動の開始である。通常の遠征隊であれば、長期に渡るキャラバンで最初の高所順応は自然に行われるものであるが、我々の場合、2200mのPTDCキャンプから4100mのBCまでわずか4日間で来ている。そこでまず為すべきことは確実な高度順化、即ち遠征を通しての体作りを行いつつ、ルート工作・荷上げに励むことである。そんなわけでこの2日間ははやる心を押さえ、半分休養を兼ねたルート偵察にあてられた。もっとも偵察といっても空荷のまま適当に散策する程度で、所々雪の残った斜面をキックステップで登って行く者もあれば、稜通しに行く者、大きくトラバースする者と、それぞれ思い思いの方向に足を運んでいった。結果、わずか3～4時間の偵察ではあったが、その気ままさが幸いして2つの大きな成果を得ることができた。

その1つ目は、BCを設営している現地点(イルキッシュ)が長崎北稜会のそれと一致しているのがわかったことである。これまでも周囲の景色や水路の位置などからそうではないかと考えられていたが、ポーターの呼ぶイルキッシュという地名(北稜会BCはツト)に騙され、もう一つ手前の稜線だろうと思っていたのであ

る。このことは、稜通しに300m程登った所にテントの整地跡と山口県山岳連盟の旗を発見したことで明らかになった。まさしくそれは下関山岳会のものであり、北稜会の報告とも一致する。BCが同じということは全く振り出しに戻ったわけで、これよりABCへは彼らのルートをとって行けば良い筈である。

そのルート通り、BCからずっとトラバースした所4500mにABC適地を発見したことが2つ目の成果であった。そこはファング右岸から氷河が途切れ、台地状になった傾斜の緩やかな稜の末端にあたるテラスで、テント数張可能、かつ両側面を雪のルンゼが走っている為水の便も良い。そして何よりも好都合なことは、眼前に3峰がそのキラキラ光る「すべり台」を向けて屹立していることであり、さらに南に目を転じれば、「白きたおやかな峰」ディランが紡垂形の美しい山容で、その横には本多勝一氏曰くところの「恋をするなら」ラカポシが裾野の広い堂々たる風格で聳えていることである。カラコルムならではの景観と常に挑戦的な姿で迫ってくる3峰を見れば、自然闘志も湧こうというものだ。翌日全員で訪れ、位置の確認とさらに上部の偵察(奥山・水川)を行い、11日

ザ・ベストテン

BC、ABCには、ラジカセがあり、ステイの日や荷上げを終わって帰ってくると皆よく聞いていた。人がいればいつもラジカセから音楽が流れ、まさに1台のラジカセが大活躍であった。しかし、1台しかないので、皆の好みによってラジカセの奪い合いという事も起こっていた。自然とリクエストの多いカセットがよくかかり、人気のないものはあまりかからなかった様である。

何と言っても一番よく聴かれていたのは松田聖子であろう。私を筆頭に明るいのが受けて、BC、ABCではいつも彼女の歌声が流れていた。私は、石川秀美のカセットも持っていったのだが、こちらの方は私以外にはさすがに不評であった。

上田正樹の「悲しい色やね」もよくかかった。奥山・野口両氏のお気に入り、ラジカセの頭

出しで4回も5回も連続して聞いているのには閉口した。榊原氏はEPO。日本に残して来た彼女を想い出すという事で1人秘かに聞いていた。毎晩、シュラフに入る前に写真で御対面しているのだから、別に忘れる事などないと思うのだが。

隊員が皆、アイドルや訳のわからない歌手を聴くのに大被害を受けていたのは、松尾隊長であったと思う。何しろ隊の平均年齢を1人で上げていた隊長のことなので、毎日流れる聖子の歌声にはまいっていた様だ。そんな中で隊長のお気に入り、サイモンとガーファンクル。隊長テントでは、よくその澄んだ歌声が流れていた。

とにかくなごやかなBC、ABCであったがラジカセの音がABCで鳴らなくなると、隊員は皆、C1以上。いよいよ遠征も佳境に入って来たという事になる。 (大西)

からの荷上げにそなえる。

一方、BCに帰れば帰ったで、様々な仕事が待っている。ハイレーションのパッキングや装備の整理、荷上げの為の梱包と、それぞれ分担



チャパティをつくる助さん・角さん

を持ってきばきと片づけていく。コックのアユーブは働き者で、毎日20ℓのポリタンクに一杯水を汲んで来てくれるので大いに助かる。彼はリエゾン専用のコックであるが、過去数回ハイポーターとして遠征隊に加わった経験もあり、実直そうな好青年である。お互い怪しげな英語を交わしながら、他の遠征隊の話をしたりチャパティの作り方を御教授願ったりした。

それによるとチャパティとは一般的な総称で大きく3種類に分けることができる。まず最もポピュラーな、アタと呼ばれる小麦粉を水でこねて平たく伸ばし、そのまま鉄板で焼いたものをチャパティ、チャパティの表面にギーをつけて焼いたものをロティ、さらにギーをアタで包

み込んで焼いたものをプラタといい、チャパティは味のないクレープ、プラタは甘みのない油菓子、ロティはその中間、さしずめできそこないのお好み焼といったところか。その日の夕食には形の崩れた3種類のチャパティが並んだが調味料を一切使っていないだけに素朴な味わい。色々なジャムをつけて食べると結構うまく、中でもプラタが好評であった。

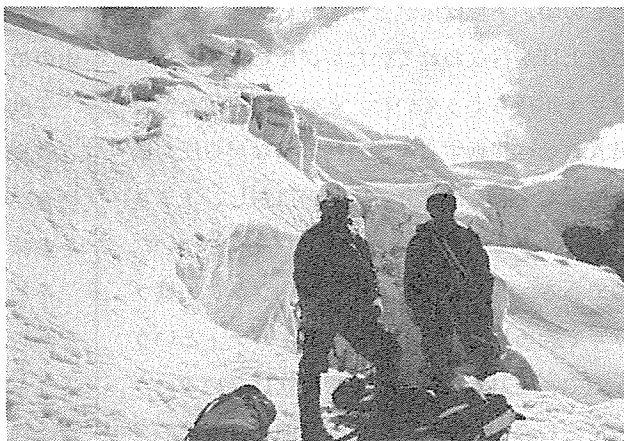


荷上げの一番(後方ディラン)

しかしながら、確かにチャパティは調理が簡単で、重量の割に満腹感が得られる利点があるが、その反面焼くのに時間がかかり、暇な時でないとなりにくい欠点もある。その上どうも口に合わないとのたまう者もいたり、結局チャパティを食べたのは数回きり。専ら現地の細長くパサパサした米を炊いてばかりいたのが実情である。ところがパキスタンにとっては立場が逆。我々の食事の方が口に合わないらしく、ホットケーキやプリンなどの嗜好品しか欲しがらない。人間のコミュニケーションは往々にして食事を伴いすることから始まるのであろう。アユーブのように山の経験のないメジャーマイルにはこれといって共通の話題もなく、わずかにティータイムに談笑を交わすのみで、すごすごと又一人寂しそうにテントへと戻っていくのであった。

さて、荷上げは一人25kg×4回のノルマで順調に行なわれた。BCからABCまで高度差400m、トラバース主体なので時間にしても3時間余りと楽な行程だ。雪が出てくるのはABC手前の狭い2つのルンゼのみ。たいがい放牧地を歩くのでどこにでもルートが取れる。時々牛と挨拶を交わしながら、各々自分の道を好き勝手に進んで行く。出発の時間や休憩はまちなま、中には昼寝している者もいたりするが、といって我々がバラバラの個人主義の集団であるというわけでは決してない。我々のメンバーには特にエキスパートはいないし、著しい力の差があるとも思えない。皆同じ大学山岳部でこつこつと泥臭い山行を続けてきた連中ばかりであり、同じ釜の飯を食い、互いの性質を熟知した仲間同志のチームワークこそ全てといってもよいパーティである。必要な時はおのずから一丸となれる自信があるからこそ、ささいなことでもいいことは極力放ったらかしにもなるものだ。それに自分の体調を自分で判断し、調整していくことは、高所順応に欠かせない重要なことである。ABCに荷を上げた後も、各自余った時間を使って自発的にロープやフィックスバー等の上部デポを行い、まずは上々のすべり出しと言える。

懸垂氷河



6月16日。ブルーインパルス3人、奥山・榊原・大西がABC入り、翌日からC1へのルート工作だ。我々のタクティクスは3～4人ずつ3つのチームがローテーションを組んで登攀活動を行う、即ちそれぞれのチームが4日周期で順繰りに、(1) 荷上げ、(2) 荷上げ+高所キャンプステイ、(3) ルート工作の後低所に下って、(4) レストという3日行動1日休みのパターンで、絶えず前方にルートを開拓しつつ、並行して物資の供給をはかるというものであった。体調の悪い者は適宜チーム間で交代が行われたものの、大筋として遠征期間中ずっとこのパターンで通し、これがくずれなかったことが登頂成功に到った大きな要因の一つであろう。その第一のチームがブルーインパルスというわけである。

チーム名は各々のメンバーがそれぞれのイメージで勝手に自称しているものであるが、最初につけられたこの名前に刺激されてか、第二のそれはレッドアローズとなって松尾・広田・大石・宮田で構成、残りの上月・野口・佐藤・水川はブルー、レッドに対抗してイエローサブマリンとなった。もっとも第三のそれは自称というより他称に近く、下痢で体調を崩し、幾分沈

没気味の4人をもじっての命名でもあった。

ABCからのルートはかねて偵察していた通り、ファング右岸の台地状斜面を登って支尾根のポコを2つ越えると懸垂氷河に至る。この100m程の氷壁を突破してしまえば後は簡単、その上の広いプラトーにC1を建設する予定であった。2つのポコまではデポで何度か足を運んだが、ここから先は未知の世界。登攀具を付け、気持ちを引き締めてブルーアイスに挑む。日本の冬山でこそダブルアックスの経験はあるものの、氷河のそれは又一味違う感触、ピッケルを握る手にも汗が滲むようだ。氷のかけらを飛び散らせながら、一步一步慎重に登っていく。20m程登った所で1ピッチ。スクリュウハーケンをねじ込んでビレーをとり、再び両手両足を使っている前進だ。トラバース・直登と中段のテラスまでルートを伸ばして本日は終了。翌日レッドアローズによって残り数10mのフィックスを加え、遂に「氷河のテラス」に出る。ヒドンクレバスに注意しつつ、緩い雪壁を300m程登ればプラトー到着。これでC1(5300m)までのルート工作は完了した。

この頃、下では依然としてBCからABCへの荷上げが行なわれていたが、そこに一つのトラブルが持ち上っていた。というのも我々が全員ABCへ移動する際、当然の事ながら圧力鍋も持って上がるつもりでいたのに対し、メジャーミールからそれでは困るとクレームがついたのである。彼の食事メニューは朝ブラタ、昼プラオ（焼めし）、夜カレーとチャパティというもので、圧力鍋がなければ飯が炊けないというのだ。このことについては出発前、コックのアユブに他に必要なものはないかと念を押して聞いた筈であるのに、今となっては知らぬ存ぜぬをきめてこんでいる。ピンディでの買い出しでは何ひとつ値切ることができない有様なのに、ホームグラウンドへ帰るや否やこの態度、ふてえ野郎だ。もっとも、容易に非を認めががるのは日本人だけらしく、非を認めること即、死につながったシルクロードは掠奪部族の末裔たる彼らにとってはこれが当然の対応なのであろう。それに冷静に考えてみると、彼に我々の行動計画を話した覚えはなく、彼とすれば2～3人常にBCに滞在し、指揮をとるものと思っていたのかもしれない。いずれにしてもリエゾンにヘソを曲げられてはかなわないので、アユブに4日間の猶予を与え、アリアバッドまで取りに返らせることにする。その間のメジャーミールの食事はあらかじめ用意させておくとは言うものの、一人きりでBCに放っておくこともできず、しぶしぶ数人が話し相手として残ることになった。どんどん伸びるルート工作の話の聞くにつけ、こんな所で足止めをくらうのは痛い。2日間はイエローサブマリンが、3日目には松尾がそれぞれBCにステイする。

山のめし

子供の時から親父の酒の肴を“美味しいもの”と教育された私は珍味などが好きである。ゲテ物食いではないが、機会があれば美味しいものを美味しく食べようと心がけているつもりだ。

そこでせっかく異国の辺鄙なところに来たのだから、できるだけいろいろなものを食べてみようと思っていた。コックのアユブに山の中で食い物はあるかと尋ねると、チョータリーという植物をとってきてくれた。赤い茎、赤い肉厚の葉の草で、20cmぐらいの高さだ。根に近いところの茎を料理に使う。1～2cmぐらいに切って5分間ぐらい煮ると、甘酸っぱいうすいピンクのスープができ上がる。砂糖を少し入れて暖かいうちに飲む。エキゾチックな味がしてなかなか美味しかった。高山植物のスープなんて飲める機会もそうないことだろうと、私は内心ほくそ笑んだ。

アタック前日、ABCで休養していると、アユブが自家製のチーズとシュワンチュリという野菜をもってきてくれた。チーズはヤク（ヨークと言っていた）の乳からとったものだ。クリームチーズのようで完全にかたまっていない。いかにもできかけて間もないといった感じだ。口あたりはもろもろとしてあまりよくないが、味は抜群だ。アユブは、玉ネギのみじん切りと混ぜて食べるとうまいんだと、我々に作ってくれた。シュワンチュリは、アブラナのような所謂菜っ葉だ。フレッシュなビタミン不足だった我々は、オニオンチーズをこれにくるんで、夢中になってパリパリとかじりついた。

（野口）

C 1 ~ C 2



6月19日。BCに下った松尾に代わる上月・大石・宮田の新レッドアローズが、ブルーインパルスともどもC1へ向う。朝早く出発。雪がくさりだすまでの2時間余りが勝負だ。ポコまでくれば距離的には半分以上であるが、気分的にはさあこれから、頑張りどころである。ポコでゼルプスト・ヘルメットを着け、懸垂氷河はフィックスを利用したユマール登攀となる。荷上げは一人10kgと軽いが、垂直の氷壁は大変なアルバイトだ。

この通過については、滑車を使って引っ張り上げる方法や、荷物を分けてダブルする方法など、どれが一番効率的な方法かABCで随分意見が分かれたところである。しかしいずれも机上の空論、滑車作戦は実際ザイルが全然流れずに失敗し、ダブルもフィックス通過の回転が悪く非能率的ということで退けられた。結局初めからそうしていれば良いものを、無駄に時間をつぶしたのみ。

そんな苦しいユマールリングも慣れればさしてつらくもない。氷河の壁を登り切ってホッと一息。後はだらだらした雪原ということになっているが、こちらの方がくせもの。一步一步ラッセルを行うごとに疲れがドッと湧き上がってくる。

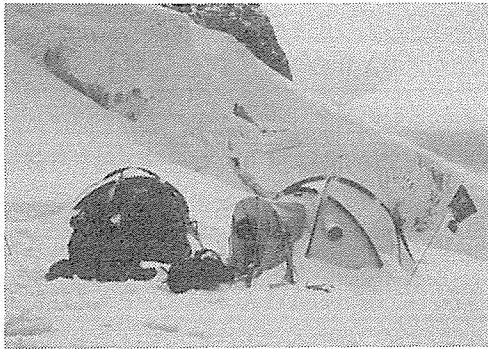
どうにか昼過ぎにC1到着。ブルーインパルスはすぐさまABCへ、本日ステイのレッドアローズは小休止してルート工作に出る。

C1から懸垂氷河の下りは全てアプザイレン。暖かくなってゆるんだ支点のピンをチェックしながら慎重に降りる。ファンクからの落石に注意しつつ、ポコからは楽しいシリセード。1時間足らずでABCへ帰れる。一方ルート工作はファンク右側壁をつめてダイレクトに稜線に出るルートを探るが、200mのフィックス途中で時間切れ、翌日に持ち越す。

同じ日。唯一の会社人メンバーである広田がBCへ下る。彼は会社の忙しいあい間を縫ってトレーニングに励み、1ヶ月足らずの休暇を取ってこの遠征に参加した。しかしそれもタイムリミット。翌日BCに上って来るマイルランナーと共に帰ることになった。残念だが仕方がない。無事登頂を誓って別れる。

20日はルート工作の続き。前日のフィックスを伸ばして稜線に出るも偵察ミス。稜線はすごいナイフリッジでバツラ側がすっぱりと切れ落ち、所々雪庇も張り出していて、これでは

危くてもうか荷上げもしてられない。ロープを回収して、広い雪原（下部雪原）上に新たなルートを開く。ここで恐ろしいのはクレバスだけだ。「すべり台」目指して一直線に進み、一担稜線に出て3峰直下の上部雪原まで。翌21日。交代したブルーインパルスは上部雪原を突っ切り、右よりの大きく開いたクレバスを乗越して、「すべり台」基部にある丘陵のプラトールに出る。高度にして5800m。辺りにはクレバスが縦横に走り、少し嫌な所であるが、一段下の雪原ではC1に近く、かといってさらに上部にはテラスがない上「すべり台」からの雪崩・落石も頻繁なことから、しぶしぶここをC2とするしかないようである。この間、イエローサブマリンはC1までの荷上げを行い、縁の下の力持ちに徹する。ご苦労様。



C 2

さて、今回の遠征における我々の武器といえ、余裕ある日程とマンパワーであった。しかしここにもう一つ秘密兵器があって、それは透湿防水性素材でできたテント、ウェアなどの最新装備である。いずれも企業の援助に依るものだが、軽くて、むれず、コンパクトという三拍子揃った新製品で、常日頃貧乏山行に甘んじている我々には見慣れないものばかり。「テントの内張がない」と問い合わせたところ、かの

川村晴一氏より「これまでのテントの概念は変えてもらわねば困る」と喻されたいわくつきのものまであって、どこかよそいきの感がしないでもない。しかし安全登山を行う上で、タクティクスの研究と装備の充実は不可欠であり、そのモニターも又使用する側の重要な任務ではないかと考える。

ここで再び、隊員が全て上部キャンプへ移動し、メジャーミールとアユーブの2人きりになったBCに目を転じると、アユーブが一時下り広田が帰るのを見て、メジャーミールはますます下界が恋しくなったらしい。ラマダン明けの祭りをピンディで家族と伴に楽しみたいとお願いしたのだ。初めての山で話す相手がアユーブ一人きり、しかも軍人・少佐としてのプライドの為か、気易く打ち融けられない。その上彼には生まれたばかりの子供（ちょうど出発の3～4日前で、心ばかりのお祝いをした）がいて、帰りたい気持ちはやまやま、その心情も理解できないことはない。数日間の約束で要求をのむが、そこは抜け目のない彼のこと、いつの間にか我々の監視と天気記録といった義務をアユーブに押しつけ、一担下って行ったきり2度とBCへは戻らず、ハサナバッドの兵舎で我々のご帰還をお待ち申していたのであった。職務怠慢もはなはだしいが、目の上のたんこぶがいなくなったのは好都合。我々には却ってラッキーであった。彼の狡猾さに感謝。

「すべり台」



一般に高所順応なるものが可能なのはたかだか5200m位までで、それ以上となると順化が劣化に追い着かず、長期間滞在しても徒らに体力を消耗するのみであるといわれる。ここではC2がちょうどそのターニングポイント。セオリー通りできるだけ滞在を減らし、C1から行ける所までフィックスを伸ばす方針を取る。C1からC2までは平坦な登り500mで、わずか3時間の楽な行程。すぐさまルート工作にあたれば2~3時間は動ける。ブルーインパルス、イエローサブマリン、レッドアローズが波状攻撃で第一関門「すべり台」に立ち向かう。

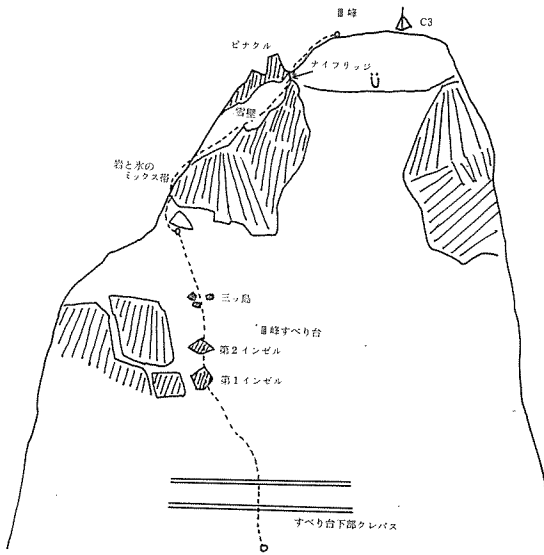
「すべり台」は平均斜度45°~50°、高度差700mの凸状大雪壁で、所々氷結しているのか陽光を浴びてキラキラと光っている。こうなるともうフィックスバーやデッドマンは役に立たない。アイスハーケン、アイスバイルの世界である。前者であれば大学の工作室でアルミを切り抜いて作った自家製のものを多数用意してきたが、後者となると市販品で高価ということもあり甚々少なく心許ない。支点をなるべく岩にとって節約に務めよう。

そこでルート工作。10m程もありそうな巨大な雪庇をかぶって3峰ピークから一気になぎ

落ちた「すべり台」でのそれは、絶えず雪崩の危険に晒され、決して気持ちのいいものではない。雪庇が崩壊すれば間違いなく一巻の終わり。不気味この上なく逃げ場とてないものの、こうしたものは多分に気分次第である。せめてものおなぐさみと、なるだけ左寄りのルートを採用ことにして横に走った大きなクレバスを2つ越し、急な斜面をお得意のダブルアックス。三角形に配置されたインゼル目指して左上するも、C1からのフィックスではここまでが限度。26日よりC2にステイしてルート工作を続ける。

C2からの眺望は素晴らしく、BC以来久しく会わなかったハチンダールキッシュや盟主バツラの大峭壁が見渡せ、対面のハサナバッドやナガールの村々の緑と絶妙のコントラストを描く。あらゆる物の値段が高度に比例するように、景観も又上へ行く程美しくなる。

インゼルからは雪壁、氷壁と直上し、上部岩壁に突き当たって一服。ここはC3までで唯一ビバーク可能な所、2~3人が坐れる庇つきの小テラスになっている。ここより北稜会のものと思われる残置フィックスをたどって岩壁基部をトラバース。側稜(C2から眺めて左のスカ



「すべり台」のルート図

イライン)に出て岩混じりの雪壁をつめた所にはピナクルが立ち塞がり、小ギャップをはさんで3峰と対峙している。北稜会はここで時間切れとなり涙をのんだ。我々の目標は最低でも3峰まで、即ち北稜会の到達点より少しでも上へ自分達のトレースを残すことであった。その第一目標を達成し、ここからは文字通り前人未踏本当の腕の見せどころであり、一段と気合いも入る。

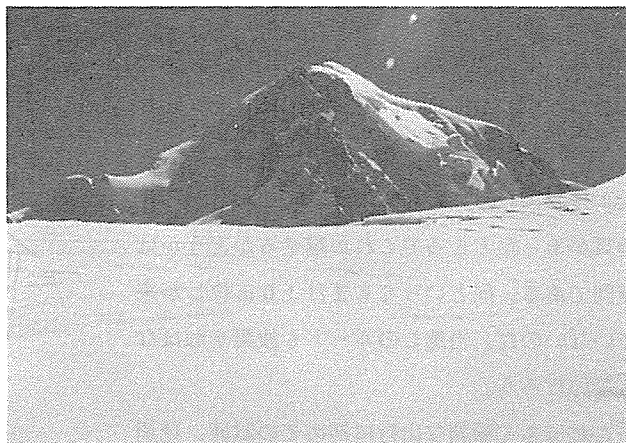
ピナクルを右肩から廻り込み「すべり台」の始点ともいべき狭い急峻なルンゼに入って直上。ギャップから高度感のあるとびきりのナイフリッジを登れば3峰ピークの大プラトーに躍り出る。パッと開けた視界には、ずっと姿を隠していた1峰とそこから派生した黄金色の西稜が彩やかに映え実に、実に美しい。反面招き猫の手のようなピークはほんのご愛敬。なかなかお茶目な処女である。30日。プラトー30分ばかりのラッセルで最高点6500mにC3を

建設。アタックキャンプもでき、ゴールはもう手の届く距離にある。第二関門の2峰に1週間もかかろうとは夢にも思わず、既に登頂したような気分になる。

「すべり台」から3峰ピークへはつごう7日を要したが、決して順調なルート工作ではなかった。遠征も1ヶ月近くなるとそろそろ疲れも見え、ストレスもたまってくる。そうした中で皆が特に頭を悩ましたのが食事であった。「欲しがりません勝つまでは」のスローガンのもとに、C1以上のハイレーションは朝ラーメン、夜乾燥米にカレーと干魚、そしていつもの行動食。乾燥米は新製品(今遠征はやたら新製品が多い)の赤飯と五目おこわで好評を博したものの、悲しいかな量が少ない。加えてカレーは高度のせいかうまくでず、蛋白源のドライソーセージも最初のうちはいいが、弱った胃腸に連日となるとその油っこさが鼻についてくる。その上高度障害か感染性のものか下痢を起こす者が頻出。これに慢性的空腹が重なって1人2人と戦線離脱してはABCへ下って行く。こうした反動でABCの食事はいつも過剰気味。よせばいいのにそれを無理にも食べるから下りるまで元気だった者が逆に腹痛を訴え出す始末ともなり、節操のなさにあきれ返る。

こうしたわけで各チームのメンバーも頻繁に交代し、結局ブルーインパルスは上月・榊原・大西、イエローサブマリンは奥山・野口・水川、レッドアローズは松尾・大石・佐藤・宮田の構成となり、このローテーションで2峰そして、本峰へと挑んで行く。

2 峰



7月2日。第一陣ブルーインパルスがC3入り。「すべり台」の荷上げは急登の連続でヘトヘト。ルート偵察に出るつもりも坐折。英気を養い、明日にかけよう。この高度では夜さすがに寝苦しいが一晩過ごすとも体も馴染む。翌3日は意気揚々の出発だ。

広い稜上に赤旗を打ちながらもくもくと進み快調なペースで2峰基部に到着。さてどうするか。2峰は100mばかりの林立する岩塔群からなり、両側はすっぱりと切れ落ちている。C3から見えるのはそのフンザ側の黒々とした斜面のみで、岩塔間の様子やバツラ側の状況は皆目わからない。案ずるより生むが易し。とりあえず稜通しのルートを探してみる。

まず左の雪壁から稜を越して氷のクローワー



2峰基部からのトラバース（失敗）

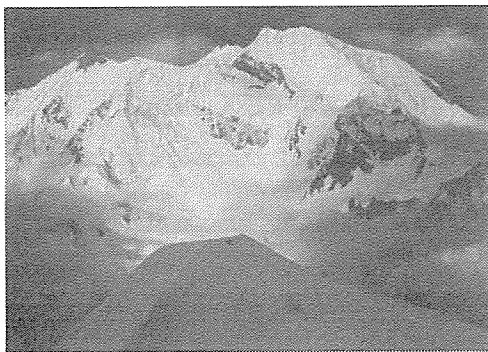
ルに登るが、ブルーアイスにアイゼンのツァッケも先がごくわずかしか入らない。氷と岩のコンタクトラインを伝って一番手前のピークに至り、ナイフリッジをこわごわトラバース。ようやく最先端に達して前を見てがっくり。そこは大きなギャップとなり、ご丁寧にも次の岩塔との間にさらに小岩塔まである。いずれも歯ブラシの様（のこぎりの刃の様でなく）に完全に孤立して突っ立ち、これを乗り切ろうものならアップザイレンと人工登攀の連続は必至で、我々の力ではちょっと無理であろう。第一陣あえなく敗退というわけだ。

その頃、第二陣のイエローサブマリンがC3に到着。本日フィックス完了、明日アタックの心積もりだっただけに、結果を聞いてやや落胆。「こりゃあかんで」と冗談とも本音ともつかぬ嘆息を洩らす。

4日。今度は2峰基部からのトラバースを試みる。フンザ側はとてもではないが、バツラ側なら少し雪もついており、可能性があるかもしれない。しかしそれとても岩稜の上にふわっとソフトクリーム状にのっているだけで、難しさはたいして違わない。恐る恐るキックステッ

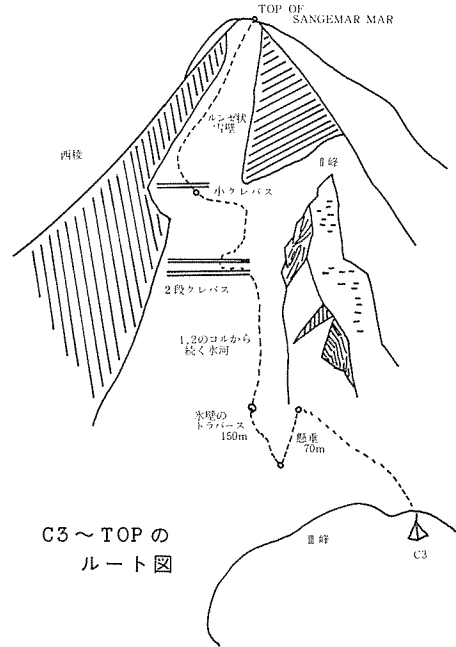
プでザイルを伸ばし岩塔を廻り込む。やがて雪も尽き岩壁となるが、リス一つないスラブとどっかかりがつかめない。悪いことにジャンピング・ボルトの類は下部キャンプに置いたまま、人工登攀に頼ることもできない。しかしたとえ器具があったところでこれが越せるかどうかは疑問である。何ととってもまだ10m位しか来ていないのだ。当然このルートも放棄せねばならないだろう。

ここにきて順調な山行に初めての試練。登頂断念かの暗い翳りがさすが、そうやすやすとひきさがるわけにはゆかない。もはや残された道はひとつ。押しでも駄目なら引いてみなとばかり、いっそ下れるだけ下ってトラバースし、西稜との間にある氷河（頂上雪田）に出てこれをつめるしかない。30m+40mアップザイレンして偵察。何とか行けそうである。厳しい登り返しに愚痴をこぼしながらも、一筋の光明を見出したことで気分は晴やかだ。第三陣レッドアローズにバトンタッチすべくC2へ下る。



2峰からのC3

そのレッドアローズがC3へ上ってきたのは6日。翌日ルート工作に出るもホワイトアウトの為途中で中止。降雪にモンスーン到来の近いことを知る。これまでの天候はいたって平穏で



そんな気配はみじんも感じられなかったが、ここ4、5日は昼近くなるとガスが湧き上がり、夜には少ないながらも積雪をみる。7月に入るまでは好天続き、沈殿した日は一日とて無かったものの、これからはそうもいくまい。お天気おじさんアユーブの言った通りだ。機を見て果敢にラッシュし、くれぐれもチャンスをのがさぬようにしなければならない。

8日。朝の安定しているうちだけでも2峰へ急ぐ。アップザイレンの後、不安定な確保でトラバースを開始。岩に氷がべたりと張りついたいやらしい斜面だ。アイスハンマーの効きも悪く、約20mフィックスを張って交代する。

9日。元に戻ってブルーインパルスが登場。ルート工作を続ける。見上げれば岩塔がおおいにふさるように聳え、絶えず無言のプレッシャーを感じる。2峰のトラバースは小さいリッジを3つばかり越えて最後少し懸垂気味に下れば

The Longest Day

まずⅡ峰基部からバツウラ側に70mの懸垂下降。そこは日も当たらず、吹込まれそうな感覚は陰湿で、気分が悪い。頂上まで標高差約500mなのに、この下降でさらに70mプラスになるのが、異様に気にかかるのであった。そこから、前日レッドアローズが行なったfixが約20m、岩と氷のミックスした傾斜の強い斜面に付けられている。まず、この20mのfix通過をするのだが、バイルを打ち込むと氷は割れるし、トラバースのfix通過は、ロープがあまり頼りにならず、どうも思いきった動作ができない。「これは、結構やばいな。」と思っていると、fixの末端に着いた。

左へのトラバースは、当然左手に持ったバイルが頼りなのだが、こいつが思う様に刺さってくれない。そう思うとアイゼンの効きも悪い様に思えてくる。fix末端からさして進んでいないのに、恐怖のあまりアイスハーケンを打ち込む。スクリーハーケンが割と効いて俄かに強気になって順調にトラバースし始めるが、今度は壁がリッジ状になっていやらしい。リッジを回り込む動作でどうしてもバイルのバランスが悪く、またもやアイスハーケン登場。こんどはそれでも思い切りがつかず、結局ザイルを張ってもらってザイルに体重をかけながら下降気味にトラバースするという作戦にでる。日本での岩トレでも、トップはダメでも、トップロープならということによくあるが、まさにこれはトップロープの気分で私には最適である。左斜め下に見える氷河を目指して、どんどん斜下降をする。

氷河上は、思ったより軟雪で腰ぐらいまでもぐってしまう。さっきまでのアイゼン前爪2本

の時は嘘のようで、やっと緊張感から解放される。ここまで1時間余りで、後は、Ⅰ峰Ⅱ峰間のコル目指してひたすら歩くだけの様に思えた。しかし、ここからが最も苦しかったのである。確かに墜落などという危険はないのだが、腰以上時には胸という深いラッセルに、まったく進まないのである。不得手なダブルアックスはいとしても、得意のはずのラッセルに苦しめられるという皮肉にあう。高度による酸素不足で息苦しいし、体に力が入らない。無我夢中で登った様に思っても5mも進んでいない。息も止まりそうになり、ヘルメットごと頭を雪の中に突っ込んで深呼吸をする。30秒位しないと到底息の乱れは治らず、2、3歩登ればすぐに息が上がってしまうのだから進む訳がない。

頭上に絶望的に続く斜面を見ていると気力もそぎ落とされる様であった。「雪崩は起こりませんか。」などと、下降終了点で確保をしている上月さんに弱音を吐くが、返事をする声もさっぱり動かない私にいらいらする気配がはっきりと感じられる。4時間近くもずっと確保しているのだから無理もない。

結局、200m全部は伸ばせず30m程残して、確保をする。しかし、上月さんはラッセルに苦しんでいるらしく一向に登ってこない。上月さんがあっさり登ってきたらどうしようと思っていた私は、内心ホッとして、居眠りをしながら2時間位確保点に座っていた。さらに、残りの30mをfixしおえると、もう4時前になっていた。この日、8時間のfix工作で200mしか伸ばすことができなかった。ラッセルに苦しんだ体は疲れきり、C3への帰路は非常に長く感じられた。 (大西)

終了。何とか氷河に出て一安心する暇もなく、一転して今度は胸までのラッセル、行けども行けども進まない。泣きたい思いをこらえ、2峰側壁にできた小クレバスのテラスまで登って荷物をデポ。急いで引き返すがフィックス整備に手間取り、C3へ帰り着いたのは午後7時をゆうに過ぎていた。



氷河（頂上雪田）に入る

ルート工作中我々はさかんにトランシーバー交信をとってお互いの位置の確認に務めている。ところが今日はハードワークがたたったのかどうしたものか、C3に帰るまで時計が止まっているのに気付かず、午後6時の交信をすっばかしてしまった。最終交信ただけにさあ大変、下では遭難の可能性を考え、早朝救援隊を送る態勢を取って就寝した後である。それでも一人トランシーバーを開いて待っていた松尾とつながり、大目玉をくらう。時間の経過を忘れてしまうなんて、これも高度障害の一種なのであろうか。

翌10日は疲労が激しく下ってレストを考えていたが、目覚めれば無常にもド快晴。この好天をのがす手はない。各營挽回のよい機会でもあり、意を決してルート工作に出る。昨日あれだけ苦しんだラッセルも強風にあおられてか嘘

のように固くしまり、難なくデポ地点まで到達。ここからは氷河を左上気味にクレバスを2つ越え、西稜に出てそれを登ればよいだろう。アンザイレンして1つ目のクレバスのルート工作を行うが、こいつはなかなか秀逸だ。まず右端のスノーブリッジを渡ってクレバス内に入り、青白い氷の廊下を深々と奥へ進む。高さは約30m、ハングしていても上に出られそうにないが、ふと見上げた5m程上にフレク状の狭い左上バンドが走っている。これだ。アイスハーケンを打ち込んで人工登攀。つららをたたき落としながら微妙なバランスでバンドを登る。最後は完全に体が外に出てしまうが、ダブルアックスで強引にずり上がればおしまい。見事クレバスを抜け出せました。次第に傾斜がおちてくると1峰と2峰のコルは間近。ここまでフィックスしておけば後ワンプッシュで行けるだろう。C3へ帰ればイエローサブマリンが待っている。ブルーインパルスももう一日ステイして明日は2チームでアタックだ。

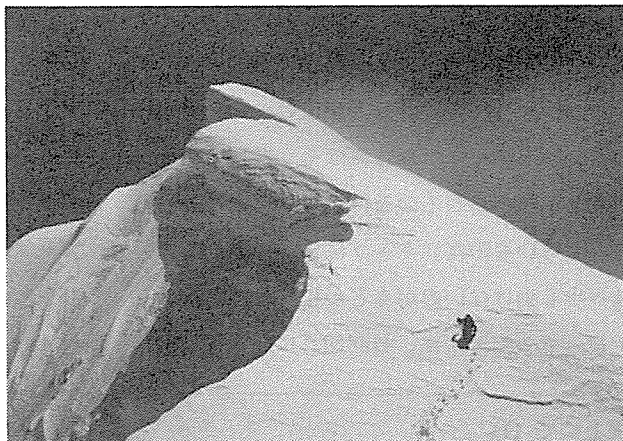
— 日記より —

C3に上がる。明日も天気はよさそう＝アタック。サンゲの処女も今夜限りとなりました。

アタック前の感想は？

今朝から言い様のない倦怠感におそわれてこまっている。アタック前と言っても今はただ空腹（これまた昨夜あたりからおそろしい食欲）をかかえて眠るのみ。そして、このC3から見えているあの白いピークへ一歩踏み出し続けたいという欲望（？）欲望と言うより願いをかなえにゆきます。—— 文脈がねじれたのもケンタイのせいです。 （水川）

ア タ ッ ク



7月11日。うっすらと白みかけた空に星が最後のまたたきを繰り返す頃、3峰ピークに並んだ2つのテント、その1つに灯りがともる。中では奥山・野口・水川が朝食のラーメンを作りつつ出発の準備に余念がない。上月・榊原・大西はもう1つのテント、まだシュラフの中でまろくなっている。アタックは昨日C3入りした元気な3人が先導、最後のルート工作にあたり、残りの3人はフィックスが張り終わるのを見計らってこれに合流、ともども頂上に立つという時間差攻撃だ。1時間ばかり遅れて後発隊の3人も起床。先発隊の3人は既にアイゼンを付けている。

いつになく無口でもくもくと用意する各人の胸にはさまざまな思いが去来しているのであろう。遠征を決意した当初、暗中模索のうちに話を聞きに行き、資料を集め、山を選んで計画を立ててみても、これで良いのか、本当に遠征に出れるのかと不安続きの日々であった。アプリケーションを出したところで事態は同じ。まだ来ぬ許可にイライラしながら年が明け、パキスタン観光省からの手紙を見て初めて「行けるんだ」と実感するや今度は一転して大忙がし。装備・食糧の寄附願いに会社を廻り、一方で遠

征資金の捻出にアルバイト・金策にと走る。自然科学も休みがち、出発間際は連日深夜まで梱包作業に励んだものであった。しかしその影では人知れず捨ててきたもの、犠牲にしてきたものも少なくないに違いない。そうした全てのことが今報われるのだ。否、報われるというのは的確でない。煩雑な手続きも登山のうちであり遠征は登頂そのものよりも、むしろそこに至る様々な困難を克服していくプロセスにこそ意義がある。ここでは登頂はあくまで結果であり、我々は一つのキリをつけようとしているに過ぎない。

午前4時5分。先発隊の3人がC3を出る。本峰は黒いシルエット。空気は冷たくピンと張りつめている。消え残るトレースを踏んで2峰基部へ。さらに2回のアプザイレンからトラバースに移る。インシャアラ。ピンよ抜けるなど祈りつつフィックスをつかんでの手すりトラバースだ。氷河のラッセルもそこそこに一つ目のクレバスに到着。これを越してフィックス終了点までは快調なペースで進む。2つ目のクレバスは小さく容易。ここより左上して西稜に取りつくつもりであったが、直上して頂上雪田をつめる方が速い。キックステップからダブルアックスへと傾斜が増

し、雪質も堅雪から氷に変わる。フィックスを張りながらの前進となるやたちまちスピードダウン。やがて後発隊の3人が追いついて一緒になる。陽もあたりだし寒気はそう厳しくないがルート工作が終わるのを待ってじっとしているのはつらいものだ。トップにまかせきりで自分は一步も動けないのがもどかしく、折から湧き上がってきたガスに、時間切れにならないかな

どと余計なことばかり頭に浮かぶ。それでもフィックスは着実に伸び、岩のインゼルから一部ザラメ状になって足を踏み入れる度に崩壊していく破砕帯のような箇所を過ぎれば西稜のジャンクションピーク。もはやザイルは要らない。ピークは目の前、3つ目のポコだ。水川と榊原が入れ代わりたち代わりラッセルして行く。上月・野口・大西が遅れて続き、最後尾を奥山が

頂上にて (1)

これが頂上？白くのっぺりしたその場所は何れでも一応ゆるやかながらもまわりより高くもり上っている。だが、もし誰かが僕の耳元で「ここは剣の頂だよ。」とさきやけば容易に信じることができただろう。いや、「映画のセット」と言われてもそう思い込んだにちがいない。濃厚なガスで完全にホワイトアウトしてしまいサンゲとしての個性をきわだたせているものは何も目に入らないのだ。

C2からトランシーバーで感想を求めてきている。感想……むずかしい質問だ。感慨はない。山での感慨なぞはめったにわかぬし、わいても頂上にたどりついてわくものじゃない。大体は下山した時や、天候が急好転した時に感動はやってくる。ましてやこんなにガスってしまっは。そこで感謝を述べることにした。この体を下れた親に。そして力になって下れた友人達に。

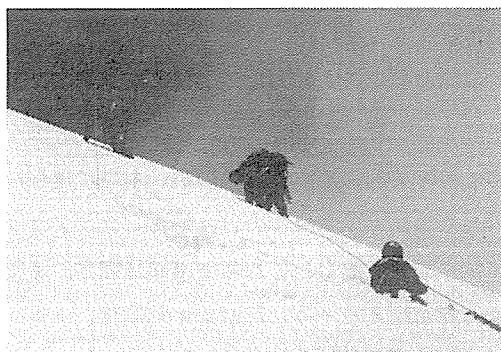
写真を撮る。まず一人ずつ。そして何人かかたまつて。どの顔も笑っている。僕も笑っている。そうだ、感謝しなければならぬ人々はまだまだたくさんいた。日本でこの隊を支えて下れた多くの人々に。そして何より、今僕の目の前にある微笑の持ち主達に。脳裏を今までの道程が

かすめてゆく。その微笑を苦痛の表情にかえてあの雪壁や岩壁、ハンギンググレーシャーにルートを拓き、この日のためにそこを重い荷をしょって往き来した男達。

そして、やはり僕はサンゲの頂に立っているのだと確信できる。この男達の微笑が、そして消し去ることのできないこの瞬間までの時間がその証しなのだ。

もう各自そぞろに下山を始めている。今だに感慨はわからない。しかし心配はいらない。どうせABCのお花畑を目にする頃には心がうずきだすはずだ。そしてアプリコットの木の下に椅子を持ち出して、遠く銀嶺を楽しむ頃には、次なる山に思いをめぐらせているはずだから。

(水川)



慎重にピークを探す

締める。3つ目のポコに達してアンザイレン。雪底を踏み抜かぬようにピークを探す。午後1時20分。もうこれ以上高い所はない。登り切ったのだ。すぐさまC2のレッドアローズとトランシーバー交信。各自喜びの声を伝えてはテープに録音。残念ながら視界は効かずパノラマも望めないが、レモンティーで祝って記念撮影。皆押さえていても自然笑みがこぼれる。30分ばかり頂上の空気を満喫して下りにかかるが、何か名残り惜しく足も進まない。記念の石を拾い、2次アタックにそなえてフィックスをチェックしながらゆっくりと下る。日も傾きだんだん冷気が忍びよるにつけようやくピッチも上がり、C3帰幕は午後7時。今夜は最高の夜だ。

翌日は朝寝。ぐっすり休養をとってレッドアローズと交代。「すべり台」でぶつかり健闘を祈って別れる。イエローサブマリンとブルーインパルスはC2のテント1つを撤収してC1へ。

7月13日。午前5時。2次アタック出発。メンバーは松尾・大石・佐藤・宮田の4人だ。フィックスは頂上直下までベタ張り、安全かつ時間的にも格段に速い。しかし自らの手でルートを開き、1次アタックで登頂したいのは誰とても同じ思いであろう。それも誰が1次でなければならないというわけではなく、単なるローテーションの巡り合わせとなればなおさらである。不運というしかないが、そのことを口に出して言う者はいない。むしろ素直に祝福し、健闘を祈り合える。そんな仲間を誇りに、又有難く思う。

午前11時。2次隊も遂に頂上到着。世の中結構平等にできている。残りものには福がある

頂上にて (2)

第二次登頂を果たした。別にどうということはないけれど自分には大きな意義がある。とにかく登った。これだけでよい。風はあったが天気はよかった。バツラ、ハチンダールキッシュ、ラカボシ、ナンガパルバット、ディラン、ウルタール、シスパーレすべて見えた。嬉しかった。ひと月かけてやっと頂上に立つということなど、今までになかっただけに本当に嬉しかった。石も拾った。写真も撮った。するべきことはすべてした。あとは下りるだけ。何かほっとした気分、早く日本に帰ろう。(佐藤)



2次アタックも成功

のたとえ通り、今日は昼になってもいっこうにガスが湧かず、空は一片の雲とてない上天気だ。ナンガパルバット他カラコルムの様々な高峰が見渡せる。パノラマを写真に撮り、1次アタックと同様にトランシーバーで感想を録音。聞いているのはC1の6人。全員が登頂できたことが何よりも嬉しい。後は慎重に下るだけだ。

撤 収



7月14日。下山態勢に入る。レッドアローズがC3、イエローサブマリンがC2をそれぞれ撤収。ブルーインパルスもテント1つを持ってBCまで下り、後ABCで約1ヶ月振りに全員が集結する予定である。ところが登頂成功に気が緩んだのだろう。あろうことかC1のテントを1つ焼失してしまった。装備・登山具に影響なく下山には差しかええないが、これが登頂前だったらとゾットする。大チョンボ、岳人失格だ。もう一度気を引き締め直して撤収を開始する。

まずC2では装備・インスタント食品を持ち帰ることにしたが、やたら重いO₂パックは涙をのんで放棄した。しかしせっかくつらい目をして運び上げたものを一度も使用しないのはもったいない。医学的見地からどれ程の差があるか興味深いと、試みにドクター奥山がマスクをつけて下ってみればその速いの何の、もともとタフで慣らす彼とはいえ、やはり効き目は絶大であった。

一方C1～ABC間は氷河の崩壊激しくクレバスが大きく開いて危険。アプザイレンは支点のピンを全て打ち直して慎重に下る。さらに氷河舌端のかつてシリセードを楽しんだ斜面の雪

も完全に融け、今やフィックスパーがむなしくころがるガラガラの岩場と化して歩きづらいことこの上ない。

ABCに下ればすっかりリエゾン代理となったアユーブのメッセージが桑の実・パン・ダヒーに添えて置かれていた。味なことをやりよるわい。彼にはトランシーバーで成功を伝えており、お祝いのつもりらしい。彼はメジャーミール去りし後、数回ABCに差し入れに現われた以外は一人BCに籠って我々の荷物番をしている偉い奴だ。もっともコックの仕事をしていないので当たり前といえば当たり前でもある。突然下りて行ってびっくりさせてやろうと足取り軽くBCへ向ったものの、そこで驚かされたのは我々の方であった。何と彼は一人ではなかった。と、ここで彼が美女を引っ張り込んでいたと想像してはいけない。事実は全く逆で、彼の父親（嘘か真か今年80才にもなるという）が息子の様子を見に来ていたのである。抱き合っ

て何やら祝福してくれているようだが、ブルシヤフスキー語なのでさっぱりわからない。ダルカレーとチャイの歓待を受け、ABCへ戻る。

その夜は酒宴が開かれ皆ほろ酔い気分。メイランナーはちゃんと成功を伝えているか、ウ

ルタールは、又デービスホテルで一緒だった他の隊はどうなっているのだろうかなどと、我々自身の話よりも専ら他人事に興味が集中する。

翌日C1のテントを回収、翌々日ABCを撤収してBCへ下る。ゴミは全て消却。不用品はアユーブに売る。1000mも余ったフィックスドロップ、因縁の圧力鍋、ポリタンク、ビニールシート、そして目玉のラジカセと彼の働きに報いて大バーゲン。こんなものまでと思う品でも彼らにとっては貴重なのであろう。ABCまで上って洗いざらい持って帰って来る。人情と輸送費の問題で何も与えないことも全て持ち帰ることもできないけれど、これが彼らの伝統的な生活習慣を崩し、新たな経済侵略の一端になりはしまいかと危惧の念を抱かずにはられない。

さて、アユーブに頼んだ帰りのポーターがBCに到着するのは3日後。その間我々は全く手持ち無沙汰である。お目付け役のメジャーミールがないのを幸い、次期遠征の偵察目的から周辺の山々に散策隊を出す。北面隊の大石・榊原はムチチュール氷河を遡ってイチンダールキ

ッシュからバツウラのBCへ、東面隊の上月・野口は来た道に戻ってハサナバッド氷河に入りウルタール、シスパーレを見て4日もしくは5日後にアリアバッドで落ち合うことにする。それぞれ17日に出発。残ったメンバーは梱包を早々に済ませ、後はBCでのんびりと昼寝をしたりワンディハイクを楽しみながら、41日間に渡る遠征の幕を閉じていった。

待ちに待った20日。遂にポーターが上がって来る。契約の後、荷物を分配するや早々にBCを後にする。ポーターの数を多めに頼み過ぎた為、隊員の荷物はほとんど無い。アユーブを先頭にポーターとは別行動、霧雨煙る中を一目散に下り、2日かかりの行程をその日のうちにアリアバッドへ。大石・榊原は既に到着済み。上月・野口も翌日、偶然出遇った対岸に行くポーターを追い越して昼前に帰って来た。これで全員無事下山。

季節柄、楽しみにしていたフンザウォーターが飲めないのは残念だが、果物はちょうど今が盛り。出発時青かったアプリコットも燈々色に熟れ、PTDCキャンプではりんごともども食べ放題。東の間の夏を謳歌していた。

(上月)



行 動 記 録

- 5月18日 先発隊(上月・野口)成田発
- 25日 本隊(松尾・他5名)成田発
- 6月 1日 後発隊(広田・奥山・大石)成田発
- 2日 ブリーフィング、夜バスにてピンディー発
- 3日 アリアバッド着
- 5日 キャラバン開始
- 7日 → モース → ヤーバサ → バッコール
- 8日 → イルキッシュ、BC建設

	BC (4100)	ABC (4500)	C1 (5300)	C2 (5800)	C3 (6500)	SUMMIT (7050)
6/9	←←←←←	←←←←←	奥・榊・西 上・野・佐・水 松・広・石・宮			ルート 偵察
10	←←←←←		⓪佐			
11	←←←←←	←←←←←	⓪広			ABC 建設
12	⓪	←←←←←	⓪佐 ⓪広			
13	⓪	←←←←←	⓪広			
14	⓪	←←←←←				
15	←←←←←	←←←←←	⓪広			ABC入り
16	←←←←←	←←←←←	西⓪ 奥・榊			
17	←←←←←	←←←←←	奥・榊⓪ 西			C1までの fix完了
18	←←←←←	←←←←←	⓪広・石・宮			C1建設
	←←←←←		松			

19	松 ← 広	← ← ← ←	奥・榊・西 野・佐・水 上・石・宮			C1入り
20	水(休)	(休) ← ←	野・佐 上・石・宮			広田下山
21		(休) (休) ←	← ←	松・奥・榊・西		C2までの fix完了
22	佐(休) 宮(休)	← ← ←	野・水 上・石			C2建設
23		← ← ←				
24	松 宮(休)	(休) ← ←	奥・榊・西 上・石			
25	松・宮(休)	(休) ←	奥・榊・西 (休)			
26	松 宮(休)	← ←	野・佐・水 ← ←			C2入り
27	松・宮(休)	← ← ←	← ← ←			
28	松・宮	← ←	佐 (休)上・石	野・水		
29		奥・榊 宮(休) 上	← ← ← ← ←	西 野・佐・水 松・石		C3までの fix完了
30		奥・榊(休) 野(休) 松(休)	← ← ← ←	西 上・佐・水・宮 石		C3建設
7/1		奥(休) 野(休) 松(休)	← ← ←	榊・西 上・水 石・佐・宮		
2	松・石 佐・宮	← ←	奥・野 (休)水	上・榊・西		C3入り
3		← ←		奥・野・水		
4		←	(休)			

5		←←←←	→→→→		
6	⓪ ⓪			→→→→	
7		→→→→	←←←←		
8			⓪	→→→→	
9		←←←←		榊⓪ ← 上・西	
10	←←←←	⓪石・佐		←←←←	
11	松・宮			←←←←	第一次 アタック
12		←←←←	→→→→		
13			⓪ ⓪	←←←←	第二次 アタック
14		←←←←	→→→→		C3・C2 撤収
15	←←←←	奥・野 松・石・佐	上・西・水・宮		C1 撤収
16	←←←←				A B C 撤収

(注) —●— 黒丸は荷上げを表わす。

7月17日 偵察隊発 { ムチチュール氷河方面(大石・榊原)
ハサナバッド氷河方面(上月・野口)

20日 B C 撤収、その日のうちにアリアバッド着

21日 ポーター・偵察隊アリアバッド着、全員下山

タクティクスについて

タクティクスについては既に行動概要その他でも触れているが、ここでもう一度まとめてみたいと思う。しかしその前に遠征の対象としてこの山を選んだ理由並びに目標を述べておかなければならない。

まず我々は学生主体で未経験者ばかりの隊である。初めての遠征であれば予期せぬトラブルもあろうし、状況を正確に把握することは困難だ。そこで一番にあげられたのが、難しいバリエーションルートをねらうといったテクニカルな面での充実より、少々物足りなくはあっても確実に登ることを優先する、その代りに対象は7000m級の未踏峰に限るということであった。さらに資金面の問題として我々の集金能力を考えると、アプローチが短く、少ない費用で行けることも必要条件となってくる。こんな都合のいい山が果してヒマラヤに残っているだろうか。

好運にもバツラ山群は長年一種独立王国を築いていたフンザの後方に位置する為解禁されたのが遅く、比較的入り易い地域にありながら、依然としてサンゲマルマルやウルタールⅠ・Ⅱなどの未踏峰を有し、加えて金沢大学や長崎北稜会、朝霧山岳会とここ数年内に遠征隊を派遣した山岳会も多く、情報収集が容易であろう。そんなわけでバツラ山群にターゲットを絞って計画を進めるうち、資料も集まり、サンゲマルマルなら登れるのではないかという確信を持つに至った。アプリケーションこそ希望の順にサンゲマルマル、ウルタールⅠ・Ⅱ、シスパーレと並べたものの、登るならサンゲという

雰囲気支配的で、実際この判断は正しかったと思う。

以上の経過が示す様に、我々は是非登りたい山があって遠征に出たのではなく、まずヒマラヤ・カラコルムに行ってみたい、で対象をどうするかという選択の後サンゲを目指したのであり、そこでは山は一つの手段、登山という遊戯を行う単なるフィールドにしか過ぎなかった。即ちそれは重箱の隅をほじくる様なパイオニアワーク（初登頂）にもはや意義がありえない今、登山を一つのスポーツ、個人の問題として考え直すことであり、各人がそれぞれの自由意志で参加しそれぞれに共通の登頂という夢を追う。従って我々の目標は当然登ること。それも安全かつ出来るだけ多くの人間（理想的には全員）が頂上に立つことであり、今後より大きな飛躍へ向けてのワンステップとして、海外登山の経験を積むということであった。

そこでタクティクスということになるが、この目標を果たすべく我々が採用したのはオーソドックスなポロー（極地法）であった。ポローとアルパインスタイルの相違は、形式的に前者がルート工作、荷上げと尺取虫の様に前進キャンプを建設して頂上を攻略するのに対し、後者は長期の高所滞在による体力消耗を防ぐ為荷上げの労を省きほぼ直線的に頂上を往復するというもので、短期速攻登山とも呼ばれるが、本質的な意味あいにおいては、ポローが退路の確保と物量に基く波状攻撃で登頂の確実性を高める反面、ピラミッドの頂点に立つ人間が非

常に限定されてしまうという欠点を持つのに
対し、アルパインスタイルはそれを技術力でカ
バーしてなるだけ多くの人間を頂上に向かわせよ
うとするものであるといえる。従って初登を目
指して大部隊を送った過去の遠征隊では専らポ
ーラーが採用されたのに比べ、昨今少人数で既
登ルートをやる場合にはアルパインスタイルが
多用されているようだ。

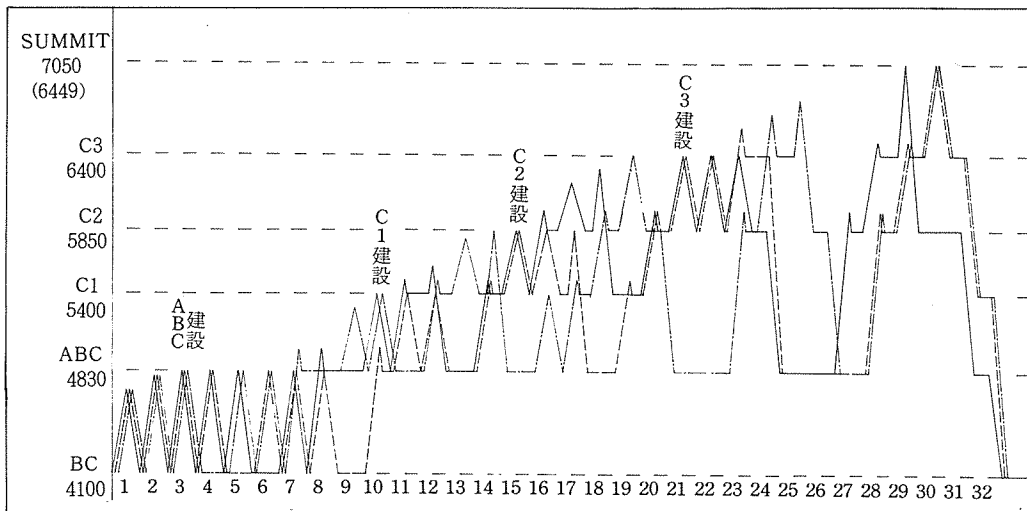
我々の場合は初登で大量（全員）登頂が目標
だから中間的な位置にあるといえるが、正直な
ところ技術的には二流三流の山屋の集まりであ
る。まずもって登れなければ大量も何もあつた
ものではない。当然ポーラーということになっ
てくるが、実際はそう案ずる程のこともなさそ
うである。8000mの巨峰や7000m級で
も難峰といわれる山なら制限も厳しいだろうが
7000mあるかなしかで比較的容易と考えら
れるサンゲであればピラミッドの頂点をならし
て台地にしたところで体積（荷上げの量及び日
数）はそう大した変化がない。よって全員登頂
も十分可能であり、逆にこの目的に見合う対象

として選ばれたのがサンゲであることは既に述
べた通りである。そうして出来上がったタクテ
ィクスプランが表1であった。

通常高度障害については個人差が大きく理論
的な裏付けはないが、経験的に4000～5000
m、6000～7000m、そして8000mに
壁があるといわれている。仮に4000mと6000
mと考えれば、それぞれがBC及びC3に相当
し、何よりもまずBCでの高所順応をスムーズ
に行うことが重要となる。キャラバンが短いこ
ともあって、ここでの滞在には無駄とも思える
一週間をあてた。中には先の行き詰まりを懸念
して元気な隊員はどんどん上のルート工作にま
わすべきだとの意見もあったが、初めが肝心。
結局ハイキャンプでの高所順応に対する担保の
つもりで、全員が荷上げに従事することになっ
た。

一方C3での順応についてはこれはもはや不
可能である。有名なマカルーでの実験（5800
mに5ヶ月滞在）が示すように、長期もしくは

表1 行動予定表



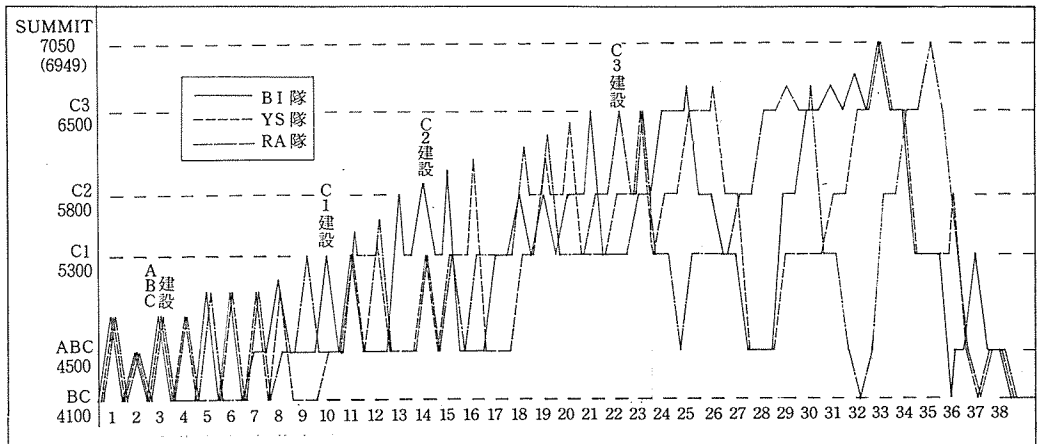
繰り返し滞在したところであり効果なく、完全に順応できる限界はたかだか5200mまでとされている。従ってC3といわずC2の段階から最善の策はできるだけ滞在を減らすことであった。

次に行動パターンとしては3~4人ずつ3班に分け、それぞれが3日行動1日休みのサイクルで順次スライドしながら交互にルートを開いていくシステムを採った。サイクルが短いのはハイキャンプステイに課した2つの制約、即ち必ずより以上の高度を獲得していること及びファーストステイは一泊のみということから、ローテーションの都合上必然的に決ったことであり、こうしたシステムは単に疲労の蓄積を防ぐ為ばかりでなく、全員をまんべんなく前線に出し、ルート工作の機会均等をはかる意味もあった。もし登頂に失敗した場合、否成功した場合ですら一番問題になるのは、実際自分は何をしたのかということであり、荷上げばかりとかルート工作ばかりという偏りがあったとすれば、

下積みまわされた者に納得しがたい思いが残るであろう。卓越した技術、経験の持ち主がいれば別だが、どんぐりの背比べ的弱小遠征隊においてはそうもいかない。むしろこの欠点を利点に変える方法が短サイクルの班別システムであったといえる。もっともこれは隊員間の力が均衡していた我々のような場合にのみあてはまることであって、一般的には必ずしも良いシステムであるとは限らない。

ここで登山期間としては5月26日からの90日間を申請したが、実質登攀に要するそれは行動表で32日程だから、気候の最も安定する(モンスーン到来前の)6月から7月いっぱいをめどに入山を考えた。しかし実際にタクティクス通り事が運ぶ筈はなく、班相互の連繋やローテーションが狂ったり、高度障害で倒れる者が出てくるのは必至であろう。それらは適宜その場その場で対処していくしか手がないが、とりあえずこうしたトラブル用の予備として現地食8日分、さらにルート開拓用の予備としてハイ

表2 実際の行動表



レーション10日分を加え、結局登山日数は50日間をあてた。

さて今や遠征も無事10人(登攀隊員全員)の登頂をもって終わったわけであるが、最後に成功の原因となりを考えてみよう。

高所順応については医療報告の方を参照していただくとして、タクティクスの行動面にのみ絞ればそれは表2のような結果になった。ここで各班のメンバーは多少入れ代わっていることを断っておくが、これと表1との比較でまず目につくことは、ABCの高度が低い、日数が6日延びている、アタック直前のABC集結がないことなどであろう。ABCの高度についてはその当時丁度雪線が4500mあたりで他に適地がなかった為であり、又日数及びABC集結についてはC3からのルート工作に手間取り(C3建設の時点では1日の遅れしかない)、余裕がなくなりかけていた為であって、このことはとりも直さず2峰が想像以上に難関であったことを示している。即ち未知の領域に対する認識が甘かったともいえるが、それは何分仕方ないことであろう。もともと前人未踏なところへ行こうというのであるから完全に予測することはどだい無理な話。むしろその為にこそ予備があり、それが6日で収まったのだからそれで良しとすべきである。その他のルートについては長崎北稜会の報告そのまま別に大きな問題もなく(表3)、各隊員の行動状況にしても適度なばらつきがみられ、当初計画した通りとなった(表4)。

ところでタクティクスの正否を分けるのはプランと実際がどれだけズレているかではなく、そこでどう対処していくかというフレキシビリ

ティーの問題である。そうした意味でポラーの展開の仕方や短サイクルの班別システム、高所順応の為のハイキャンプステイ制約など具体的な処方箋を決めておいたことは非常に有益で各人が自らの役割分担をしっかりと把握しつつメンバー交代をスムーズに行いえたのも、ひとえにこうしたタクティクスのシンプルさの故であろう。もちろんそこには隊員どうしのチームワークの良さというファクターもあるが、こうしたタクティクスのあり方に対する理解が浸透していなければこううまくはいかなかったと思われる。

さらにタクティクスとの関連では是非触れておかなければならないことに徹底したフィックス工作があげられる。7000mそこそこの山に3000m。ABCが4500mだから、懸垂氷河から上のルートほとんどに張り巡らした勘定で、荷上げの楽にとユマールの手すり代わりに用いた部分も多かったが、何よりフィックスがあれば安心である。一方では連鎖遭難を怖れてアンザイレンしなかったり、フィックス工作の時間的ロスを嫌って張らないといったことも行われているようであるが、我々はそれ程自らの技術に信頼を置いていない。クレバスに落ちこちることもあれば、思わぬ所で滑落するかも知れず、実際スリップしてフィックスのお世話になった者も数人いる。安全性を第一に考えた場合、フィックスは必要不可欠であり、到達高度即ちフィックス終了点の高度でもあった我々にとって、頂上直下数10mにまで伸ばされた時点をもって、今回の全員登頂が達成されたとみるができるだろう。

(上月)

表3 計画と実際行動の比較

	計 画		実 際 の 行 動			
	高度	高度差 (日数)	高度	高度差 (日数)	テント地	ル ー ト 状 況
BC	4100	730 (3日)	4100	400 (3日)	イルキッシュ (放牧地)	トラバースから 狭いルンゼを2つ越える
ABC	4830	570 (7日)	4500	800 (7日)	ファンク基部 支稜上のテラス	
C1	5400		5300		500 (4日)	下部雪原 一段下のプラトー
C2	5850	550 (6日)	5800	700 (8日)	「すべり台」基部 丘陵のテラス	下部雪原から稜線(ナイフ リッジ)に出て上部雪原
C3	6400	650 (8日)	6500	550 (11日)	3峰ピーク 雪のプラトー	「すべり台」の雪壁から岩場 を登って側稜(急峻なナイフ)
SUMMIT	7050				7050	雪のドーム

表4 行動状況

	松	奥	上	大	野	榊	佐	大	水	宮	広
	尾	山	月	石	口	原	藤	西	川	田	田
行動日数	29	26	28	28	25	27	24	29	25	25	5
{ 荷上げ	17	18	16	18	18	17	17	17	18	15	2
{ ルート工作	7	8	7	8	4	7	3	7	4	6	0

注1：期間は6/9(BC)から7/13(第2次アタック)までの35日間。

但し、広田は6/19までの11日間。

注2：荷上げ⊕ルート工作の日は双方に含めている。

注3：荷上げは完遂したもののみ。途中までのものやデポは含まない。

気 象 報 告

I 概要

天候には恵まれた感じがした。ただ好天というだけでなく、天候の変化の度合いが小さく周期性がはっきりしており、日本の山程予想がむずかしくなかったためである。又、「恵まれた」というのも日本の山の天候に悩まされてきたせいでカラコルム山系では恒常的なことであるから普通の天候とした方が正しいのかもしれない。しかし我隊にはカラコルムは無論、海外の山に接した経験を持つ者はおらず、単純ともいえる日々の天気変化に新鮮ささえ感じ、何か幸運に恵まれた気がした。

II 天気の変化

入山してからの天気を表1に示す。この記録は行動中のものである。又高度による違いは、悪天の時下は雨で上は雪といった程度で大きくくいちがうことはなかった。

まず入山して6月末までの天気は4～5日を周期とし、崩れ方はひどくなく行動に支障はなかった。6月下旬からこの周期が一週間前後になっているがこれは単に延びたのではない。一日の内午前中は安定し午後から崩れるというパターンになってきたのである。7月上旬までの悪天の日でも、午後の方がより一層ひどかった。又その後の好天の日もやはり午後からガスが出るという毎日で、記録が行動中のみであったため表1の様になったのである。これ以前にも一日の内で天気が変わることがあったが大きく変化することは少なく毎日そういった変化が見られたわけではなかった。それが7月に入ってから

は毎日その日の内に天気が変化してしまった。当然悪天の状態が多くなるわけだが、まったく不規則に起こるのではなく、午前中に行動を終えることによって、実際不快な目に会うことは少なかった。

日	6/7	8	9	10	11	12	13	14	15
天気	☁	☁	☁ ↓ ☁	☁ ↓ ☁	☁	☁	☁	☁	☁
16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
☁	☁	☁ ↓ ☁	☁ ↓ ☁	☁	☁ ↓ ☁	☁ ↓ ☁	☁ ↓ ☁	☁	☁
26	27	28	29	30	7/1	2	3	4	5
☁	☁ ↓ ☁	☁ ↓ ☁	☁	☁	☁	☁	☁	☁ ↓ ☁	☁ ↓ ☁
6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
☁	☁	☁	☁	☁	☁ ↓ ☁	☁	☁	☁	☁
16	17	18	19	20					
☁ ↓ ☁	☁	☁ ↓ ☁	☁	☁ ↓ ☁					

III 風と天気

天気の予測にあたって風向が有力な手段であった。時や場所によらず

“南風は悪天をもたらす”

このことだけを肝に命じておればよかった。そしてこれは、7月に入って、一日で天気が変化してしまう様になってから特によく当たった。

そこで、IIで述べた変化に合わせて行動の開始を早くし、行動の終了の目安としてこの風向の変化が役立った。

IV 考察

II IIIで述べた観測結果はモンスーンにその原因を帰着できる。

モンスーンは大気の大循環（地球規模での大気の動き）によってよく説明される。東半球の

7月における平均気圧を見てみるとインド洋の南半球側に1025 mbの高圧部、インド半島上に1000 mbの低圧部があるのがわかる。この気圧分布は陸と海の比熱のちがい、太陽熱の到達距離（海ではかなり深くまで太陽熱が到達する。）のちがい、海水の水平方向への移動などによって起こる。つまり陸の方が、熱しやすくさめやすい上に太陽熱を表面でのみ受け、移動によって平均化されない故に上昇気流が起きやすい所になるのである。

この気圧分布によって平均風はインド洋からインド半島へ向け吹く。これがモンスーンである。

特徴は非常に水を多く含み、（海洋を渡るため）高山にぶつかると非常に多量の雨を降らせる点にある。実際ヒマラヤ＝カラコルム山脈はこの高山にあたり、インドのチャラプンジでは6月と7月で5 mに及ぶ降雨量を記録する。

以上のことからまずⅢの観測について説明できる。南風が実はモンスーンであったわけだ。そうしてみると、同じカラコルム山脈にあってより北にある方が悪天となる時期が遅くなるはずである。事実、C1以上から南方を臨むと曇が拡がっている事が多かったし、こちらは高曇りでもすぐ南側のラカポシ、ディランといった山々がすっぽりガスに包まれていた事もあった。

次にⅡについて、まず7月に入ってから悪天の状態が多い事に気がつく。そして一日の変化についても、午前中冷え切った頃に高圧部となり、午後地表の気温が上がるにつれ低圧部となってくる。そしてモンスーンにより、湿度が高くなっているためこのわずかな変化が天気を左右したのである。

V 気温・雪

気温は予想程下がらずC3で早朝零下20°Cを記録したにとどまった。感覚的にも寒さを感じる事は少なく、むしろ行動中は太陽の直射で暑さを感じる事が多かった。しかしこれは当然晴天無風の時で（そしてこの様な時が多かったわけだが）少し曇や風が出ると寒くなる。この辺日本の春山と似た感じで容易に脱着できる衣類が欲しい所である。

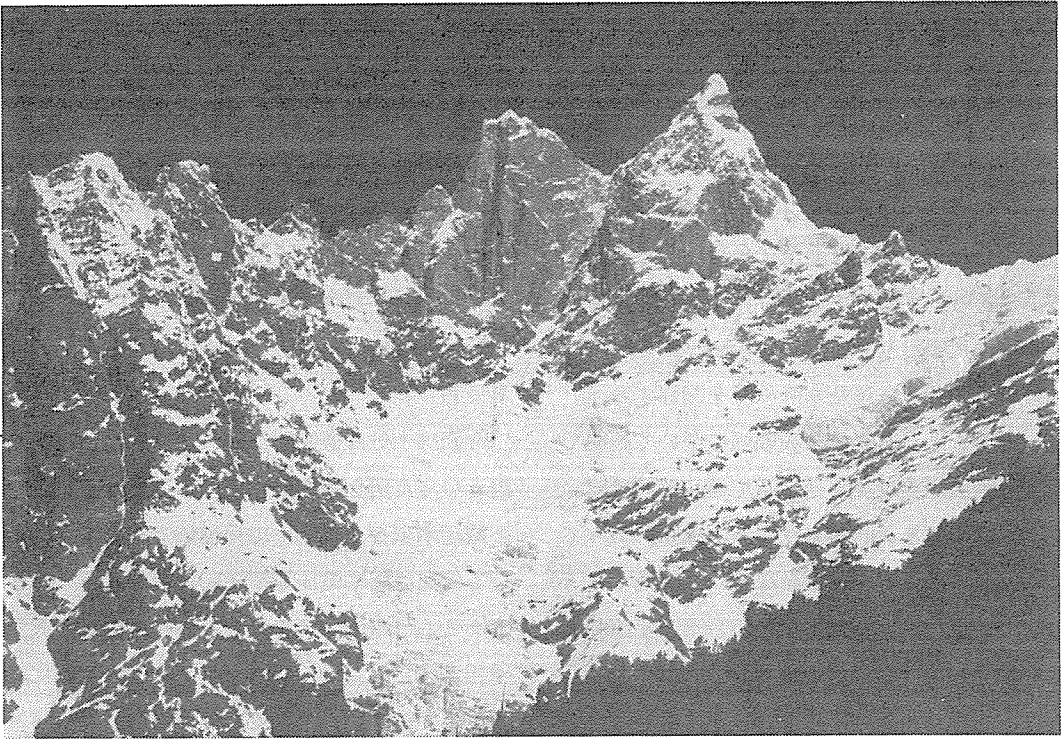
雪はそれ程降雪がなく、又C3以上では乾雪で問題はなかった。しかしC1付近では日中溶けてひどい湿雪となりそれが早朝凍結する。その為アタック前後の頃はザラ目雪となっていた。早朝行動すればやはり問題はないが、どうしても日中C1に下りてくる事があり、この時、透湿防水素材が非常に有効であった。

VI 反省

今回は十分な観測が行われなかった。気温といつた所を定性的にみたのみである。もっと観測事項をふやし（山岳地域で興味ある例として気温減率や気圧減率）、定量的に行うべきである。日本の山での場合の様に天気図や天気予報といった有効な手段が得られないだけに必要なことと思われる。その為には軽量コンパクトな、そして専門でない人にも扱える観測器具を入手すること、そして隊員の多くにできるだけ観測に参加してもらうことである。

更に観測を、大気の成分分析や太陽光スペクトル、雪や氷の結晶構造といった所にまで広げ地上の場合と比較すれば学問的にも興味のある、そして価値の高いもののできるであろう。

（水川）



BCからのハチンダールキッシュ

担 当 報 告

涉 外
装 備
食 糧
梱 包 • 輸 送
医 療
会 計

渉 外

野 口 明

序： パキスタンは交渉の国だ。入国してすぐつまり空港の税関を出るやいなや交渉が始まる。「30ルピー」「ノーノー60ルピー」タクシーの運賃のたたき売りだ。口頭での交渉は気長に根気よくやらねばならない。うまくいくときもあればそうでないときもある。インシャーラ（神の意志のままに）である。パキスタン政府の観光省でもこんな様な調子かと必配した。しかしながら文書による手続は、思いのほか確実で、スムーズにいった。前もって日本から送った書類、手紙等もちゃんと了解されており、Deputy Chief の Munulldin 氏に会見したとき確認をとったら、「わかっとるわい」と不愉快な顔をされる始末だった。渉外係の報告は、日本での活動と現地でのそれとに分けられる。

日本で： 日本での準備は1983年6月から始まった。まず必要な書類（表1）を大阪府山岳連盟を通して日本山岳協会へ提出し、日山協の推せん状を得た。それを、登山申請書（英文）とともにパキスタン大使館へ送付した。このとき登山料の支払いもすませた。許可は'84年1月におりた。

パキスタンでは普通ビザは要らないが、登山隊の場合必要である。ビザの取得も終え、いよいよ本格的な準備がおくればせながら始った。

許可のおりたあと日程の都合上7月20日よりリーダーが松尾から上月に変更する旨を直接パキスタン観光省に通達した。また、連絡将校

（リエゾンオフィサー、L. O.）と接触する日も5月28日と指定した

L. O. とのジョイントは、早すぎても遅すぎても問題がある。ラワルピンディで、L. O. に会った日から、彼の食費、宿泊費を我々が払わねばならないからである。日本より観光省に送った書類は、英文計画書、リーダーの途中変更届（松尾→上月）、手紙一通となった。

一方、遠征隊の資金および物品援助の要請は'84年2月より、出発直前まで行なわれた。そのために必要な書類（表2）を作成した。会社より援助をうける場合の手順は、まず電話をし趣意書と援助の願書を送付あるいは、直接持参した。物品、金品を受領書とひきかえに受け取った。

現地で： 現地での手続き（表3）は通関の仕事から始まる。先発隊で5月18日に日本を出発した上月と野口は、翌日、import permissionの許可を取りに観光省へ行った。提出書類は、import undertaking, packing listである。その足で空港へ行ったが荷はついておらず、次の日に通関業者を通じて隊荷を受取り、Mrs. Davies ホテルへ運んだ。通関業者は、税関のオフィスにウロウロしていて、向こうからやってくるようだ。税関のチェックはいいかげんで、税関吏に乾電池を数本取られただけで済んだ。賄賂の請求を必配していたが、ホッとした。隊荷のプラカートンは、少しあけられていたのもあったが、中身はすべて無事だった。

5月23日、ナジール・サビル氏（パキスタン人でブロードピーク、K2に登った英雄）よりL. O. のコックを紹介された。アリアバッド出身で、山の経験もあるらしい。英語が話せ

るので大助りだ。気の弱いよく言えば謙虚な人だが、何んでもOKと言うので本当にOKかどうか確認をとるのに時間がかかる。

24日には、L. O. が挨拶に来た。あまり軍人らしくない人で、頑固だが悪人ではなさそうだ。おだてにのるタイプのように思えた。25日、本隊と合流し翌々日に外人登録事務所へ行った。人数が多いのでまる一日かかると言われ次の日に取りに行った。提出書類はcertificate of registration, index card foreigner, パスポートである。29日に日本大使館へ「遭難時のヘリコプター要請のための請け負い書」(undertaking) のサインをもらいに行った。松尾とL. O. でブリーフィングをすませ、買出し、換金、梱包も終え出発準備は整った。

カラコルムハイウェーは、'82年より road permission の必要がなくなっていたが、チェックポイントで、英文計画書と、隊員全員の名簿の提出を求められた。我々は、バスをチャーターしたが、よく探すとかかなり安い会社があるようだ。L. O. やナジール氏にもそのアレンジメントを協力してもらった。6月2日の夜10時、熱風の吹きすさぶ中バスは走った。バスの振動はすさまじく、ゴォーという轟音を信号も明りもない真黒な道の中に響かせていた。断崖を削ってつくったインダスバレーロードのシビアなカーブを切りぬけ、翌日夕方5時にアリアバッドに着いた。

次の日ポーターを統率するサーダーが現れ、ポーターの雇用について話し合う。日本から我々が来る事は皆知っているようだった。夕方には、ポーターが現れ、前金として100RSを渡した。「ポーターのための請け負い書」に名前を書いてもらい、サイン又は拇印を押させた。

L. O. が大変に協力的でこの作業は、サーダーとL. O. にほとんどまかせた。この時ポーターたちには、番号札を配りキャラバンはその番号と合ったカートンを運ぶことになる。サーダーの話によれば、今年はナガールのポーターが他の隊へ行っているので問題がなくラッキーだそう。ナガールの人達はポータートラブルをおこすことで有名だが、自分たちがやとわれなくても付近の村でポーターの雇用があると、アジテーションなどして邪魔をしに来るそうだ。

さて、いよいよキャラバンが始ったが、B. C. をどこに置いたらよいかという事が問題となった。長崎北稜会よりいただいた資料から様々な検討をしたが、サンゲⅢ峰の直下のグリーンの所に一担決めた。そこまで偵察隊を二、三出すが、B. C. にはあまりよくない。さらに、村の間の領地問題でそこへは行けない者がいるという事をサーダーは訴えた。結局、キャラバンの日数をもう一日増やし、イルキッシュまで行くという約束にした。後にわかった事だがイルキッシュとは、長崎北稜会のB. C. ツトと同じ場所であった。村によって放牧地の名が違わらしく、まんまと一日分キャラバンを伸ばされてしまった。

ポーターへの支給品は、ビニール雨具、タバコ、ビニールシートだが、大した不平も出ず、ストライキも大したことはなかった。賃金については、レギュレーション通りに支払ったが、ポーター側に交渉の意図がなかったことから、もう少し値切れたかもしれない。キャラバンの最終日はバテたポーターが続出し、最後の急登を登りきれない者がいたが、元気のいいポーターがダブル、トリプルをして事なきをえた。ポーター同志が派閥はあるものの皆だいたい仲

がよいのが幸いたようだ。B. C. で賃金支払の後、皆走るように帰って行った。B. C.に残ったのは、L. O. とコックと我々だけとなった。

かくして登山は始った。我々全員がABCに移った後L. O. はコックをB. C. に残して帰ってしまった。下山も近い頃となるとハサナバッドの軍の兵舎に待機していた。我々にとっては、L. O. と登山期間中接さずにいられたのはラッキーだった。ヘソを曲げられて遠征が失敗した例も聞いていたからだ。しかしながら我々の隊についてL. O. は、頑固だがお調子屋で、おだてると非常に協力的だった。

L. O. 、コック、ポーター、サーダーと大したトラブルもなく遠征を終えることができ、非常に幸運だったと思う。彼らは、我々にとって、日本の田舎風の人情溢れる“いい人”に思えた。下山後、L. O. とディブリーフィングを済ませ、日本大使館にも挨拶をした。帰りの隊荷の通関は、行きと同じ業者に連絡し業者にすべて依頼した。

大阪大学カラコルム登山隊物品援助のお願い
〃 募金のお願い
〃 援助金の御礼
〃 装備食料寄附の御礼
受領書、装備食料寄附の御礼

表 2

書 名	提 出 先
お願い	外務省情報文化局 文化事業部長
海外登山に関する御依頼の件、及び念書	外務省 情報文化局長
名儀後援御依頼の件	大阪府山岳連盟会長
ヒマラヤ登山隊推薦状 下附願	〃
海外登山隊派遣審査経緯書	日本山岳協会会長
誓約書	〃
傷害保険契約念書	〃
隊員の健康診断に関する念書	〃
大阪大学山岳会カラコルム登山隊趣意書	〃

表 1

Import undertaking.
Packing list
Certificate of registration
Index card for foreigners.
Undertaking for porters.
Undertaking. (日本大使館)
Powers of attorney.
List of OUKE party's members. (K.K. ハイウェーの検門に提出)
Form on mountaineering.
The plan of OUKE 1984.

表 3

装 備

榊 原 淳

初めての海外遠征で、ゼロから準備を始めたのであるが、特に大きな失敗もなく一応は成功したものと考えている。

準備段階で特に困ったことは、ロープ、燃料、登攀具などの量を決定することであった。結局現地で不足が絶対に出ないように、かなり多めに持ち込んだ。結果的には余るものが多かったが、幸いにも不足した装備はほとんどなかった。

以下各装備について概略を記す。

登攀用具

登攀用具を決定する際に、できるだけ安全ということから、少しでも危険な所にはロープを固定するというを基本方針とした。そのためフィックス＝ロープは7000m級の山としてはかなり多い5000mを用意した。結果的には3000m使用したにとどまった。

使用したロープの種類は、8mmのダン＝ライン及びチツソ＝ラインである。これらは、ユマーリングや岩にすれても毛羽立つが、よく注意して痛みがひどくなったら交換してさえいれば十分に安全であると思われる。メイン＝ザイルには、9mm×50mを用意した。しかし、特に危険な所を除いて使用せず、一卷き200mのフィックス用のロープで直接ルート工作を行うことが多かった。

支点には、ルートがほとんど氷雪壁であったため、スノーバー、デッドマン、アイス＝ハーケンを多用した。特にデッドマンは、雪が腐っ

た状態の所が多かったので、非常に有効であった。また、アイス＝ハーケン（スクリュウ、パイプ）は事前に予想していたより氷の部分が多かったので、多少不足気味であった。

アイスハンマーは予算の都合上全員には支給できなかったが、やはり他の物を削ってでも全員に支給するべきであった。

幕 営 具

BC～C3に至るまで全てドーム型のテントを使用した。BC用には大きなテントを用いたかったのであるが、サイト地が斜面を切り開いた所なので、ドーム型テントを使用せざるを得なかった。しかし、もう少し天井の高いテントを使用するべきであった。C1～C3の各キャンプの収容人数は6人とし、3～4人用のテントを2個づつ設けた。C1、C2には、透湿性素材のテントを使用し、降雪時でも非常に快適であった。

ツェルトは、3人用を6個用意し、本来の目的以外にも荷物を被せるなど、いろいろと役立った。

ペグは、長さが25cmのものを用意したが各サイト地の雪はそれ程堅くなく、あまり効かなかった。ペグの場合、強度はそれ程必要ではないが、慎重をきすならもっと長いものも用意するべきであろう。

炊事用具

BC及びABCでは石油コンロを用い、C1～C3ではEPIを用いた。石油コンロは全て新製品を用意したのであるが、原地の灯油が悪いせいか調子の悪いものもあり、かなり苦労させられた。EPIは言うまでもなく非常に便利

なものであるが、ヘッドのカートリッジへの締め付けの確認だけは怠らないようにしなければならない。また、E P I にはコッヘルなどを載せるため、どうしても水が垂れてくる。その対策としてプラスチック製の皿をE P I の下に敷いたが、非常に有効であった。ただし、なるべく寒さに強い材質を選ぶ必要がある。

B C 及びA B Cで紅茶を入れるのに用いたボール型の茶こしは、多人数の場合、手間がかからず非常に便利であった。

計測器，電気製品

高度計は、B C 又はA B Cに7000m用を最上部キャンプに9000m用を置いて気圧変化による高度のばらつきを少なくなるように努めた。

各キャンプには、小型の短波ラジオを置いた。日本語放送はB B C (30分/1日)が入るのみであったが、他の外国語放送でも充分気を紛わせたと思える。B C にはステレオのラジオカセットを置いた。これはすべての装備の中でもっとも使用頻度が高かったようである。

電池は大量に余らせてしまった。これはアルカリ電池が予想以上に長持ちしたことと、カラコルムが夏で、日が長く、ヘッドランプをあまり使用しなかったことが原因である。

太陽電池は手に入れるのが出発間際であったためアタッチメントなどの準備が間に合わず本来の力を発揮させることができなかった。

撮影機材

インスタントカメラは、ルート偵察に大変役立った。また、現地の人達には人気が高く、ポーター達にもめごとが起こった時に写真を配っ

て、それを治めることもあった。

カメラは一眼レフが3台、35mmカメラが2台と多すぎたような感もあるが、この程度であった方が全員平等に写真にうつると思われる。

ビデオカメラはかなり軽いものを用意したがそれでも5kgあり、アタックに持って行く体力は誰にも残っていなかった。結局C3までしか上がらなかったわけであるが、音声も入っており、遠征終了後に見てみると大変楽しいものである。

8mmカメラは、非常に軽いもので、ルート工作やアタック時に自由自在に活用できた。

照明，燃料

灯油、E P I カートリッジ、ろうそくはかなり多めに用意したので、大量に余ってしまった。特にろうそくは、3/4以上も余ってしまった。これは電池と同様、季節のことを考慮に入れてなかったためである。

支給品

リエゾンオフィサーに対してはレギュレーションに挙げられている物の他にも、相手が要求しそうなものを用意した。とにかく、リエゾンの気嫌をそこねては絶対にいけない。衣類のサイズはなるべく大きいものを用意した方がよい。また、支給品はすべて新品で、色は派手な物が好まれるようである。

コックに対しては、レギュレーションにはないが生活用具を一式揃えた。

ポーターに対しては、運動靴を除いてレギュレーション通り支給した。

撮影機材

品名	規格	数
インスタントカメラ	本体	1
フィルム	10枚入り	30
一眼レフレンズ	本体、標準ズーム付き 210-80mmズーム 500mm ×2テレコンバーク 28mm	5 1 1 1 1
35mmカメラ	オート=フォーカス	2
レフコンバークカメラ用電池	各種	各2
極光フィルター	52mm	1
レリーズ		1
プロアー		1
クリーニング		4
ペーパー		1
クリナー		1
フィルター	UV	各1
3脚		1
8mmカメラ	小型	1
35mmフィルム	ネオカラー, ASA100, 36 EX " , ASA400, 24 EX リバーサル, ASA100, 36 EX	60 20 120
8mmフィルム	ASA 40 ASA 160	14 5
ビデオカメラ		1
デッキ		1
テープ	2時間 / 1本	15
コード	2時間 / 1本	15
NDフィルター		1

照明、燃料

品名	規格	数
ローソク	太(現地購入)	70
強力ライト	単1電池×6, 予備電球×3	1
灯油		45ℓ

予備個人装備

品名	規格	数
アイゼン		1
スハツ		3
シュラフ=カバー		3
ダウン=ジャケット		3
ダウン=キャップ		3
ヤッケ		2
ザック		2
エア=マット		2
ナイフ		2
スプーン		8
アイゼン=バンド		11
ヘッドランプ		3
サングラス		8
ユマール		1
スコット		1
エイト探		1
ハンガリアン		1

コック支給品

品名	規格	数
ライター		2
テント	2人用ドーム型	1
フライハン	小(現地購入)	1
なべ	小(現地購入)	1
やかん	小(現地購入)	1
カフ	(現地購入)	1
スプーン		2
食器	プラスチック	1
ホリ=タンク	5ℓ 水用, 灯油用 20ℓ, 水用(現地購入)	2 1
フィルター=ファネル		1
メク	チューブ入り	2
石油コンロ	オフマックス	1

品名	規格	数
EPIカートリッジ	特別仕様	100
メク	チューブ入り, 50g 筒形, 20ヶ入り	15 15

梱包用具

品名	規格	数
カム=テープ	布	10
ビニールひも		5
番付札		64
ビニールシート	5×6.7m	1
コンバイン袋	ファスナー付き	10
ビニール袋	大	50
プラスチック=バンド	100m	2
ストッパー	100個入り	2

文具

品名	規格	数
大学ノート	B 5	12
ボールペン	黒, 赤	8
サインペン	水性, 黒赤, 青, 緑 油性, 黒	15 4
カラーインキ	太, 黒 細, 黒, 赤	9 7
ホッチキス		1
針		3
電卓		2
セロテープ		3
カッター	大, 替え刃付き 小, 替え刃付き	1 1
はさみ		1

文具

品名	規格	数
定規	20cm	1
シャープ=ペンシル	40本入り	5
瞬間接着剤		2
スティックのり		3
封筒	Air Mail用	30
便せん	Air Mail用	3
切手	3ルビー(現地購入) 1ルビー(現地購入)	100 100
消しゴム		5
ハキスタン国旗	(現地購入)	2
日本国旗		8
山岳会旗		8

医療品

品名	規格	数
酸素発生装置		1
カートリッジ	30分 / 1本	10
マスク		1
消毒用綿	30cmφ(現地購入)	1
医療パック	薬 etc.....	16

雑品

品名	規格	数
フィルター=ファネル		4
石けん		5
洗濯石けん	(現地購入)	5
ポンプ	水用, 灯油用	4
ローソク	水用, 灯油用	3

品名	規格	数
爪切り		4
耳かき		4
オフマックス	ハッキン, ノズル etc...	3組
修理具		
リヘア=テープ		12
ビニール=テープ		12
ブラシ	Camp 1 ~ Camp 3	6
輪ゴム		100
ドライバー=セット		5
フライヤー		5
木ネジ		16
針金	10m	4
細引き	10m, 5mmφ	4
ソーイング=セット		4
布	テント地 30×30cm	4
小物袋	大, 中, 小	15
エアマット	修理具	4
ビニール袋	大, 黒(水作り用) 大, 透明 小	20 360 1000
トイレット=ペーパー	(現地購入)	50
半やすり		1
のこぎり	(現地購入)	1
念のこ	替え刃付き	1

個人装備

品名	規格	数
二重靴	プラスチック	1
アイゼン	固定式バンド付き	1
ゼルプスト		1
ヘルメット		1
ハンマー	アイス又はロック	1
ユマール		1
シュリング		6
カラビナ	安全環付きを含む	6
膝ひも	厚着用	1
テープ	空中ユマール=リング用	1
下降器		2
アブミ		1
ビッケル		1
ハーケン		3
フィフィ		1

衣類

品名	規格	数
シャツ	ウール	1
ニッカ=ズボン	ウール	1
下着	ウール, 上・下	1
タイツ	ウール	1
靴下	長, 短, ウール	4
手袋	ウール	4

品名	規格	数
ヤッケ	上, 下 上, 下, 綿入り	1 1
オーバー=ミトン	シングル 綿入り	2 2
スハツ		1
高所靴		1
セーター	ウール	1
高所ジャケット	ダウン	1
雨具	上, 下	1

寝具

品名	規格	数
シュラフ		1
シュラフ=カバー		1
エア=マット		1
テント=シューズ		1

食器類

品名	規格	数
スコット		1
スプーン		1
ナイフ		1
テルモス	0.5ℓ	1
ポリタンク	2ℓ	1

食糧

上月 登喜男

食糧計画について

食糧計画はタクティクスと密接に関係しており、お互い勝手に作ったり変更したりすることはできない。そこでまず行ったのが、ミニマム法によるルート工作から登頂へと至る必要最少限の日数と各キャンプ滞在延べ人数の算出、及びそれに基づくおおまかな食糧割り当てであった。実際の登山はタクティクス通りいくことが極めて稀で、むしろありえないと考えた方がよい。そこで重要なことは、こうした変化に柔軟に対応できるよう、あまり細かくやり過ぎない（却って身動きがとれなくなる恐れがある）ことであろう。といてずさんでいいというわけではなく、何がしかのパターンを作るなりして計画に融通性を持たせるべきではある。今回の基本方針としてはハイレーションと現地食に大別し、前者はC1以上のハイキャンプ用で日本の冬山程度のもを、後者はB・C・ABC用で夏山程度のもを考え、それぞれキャンプ間の人数調整に対応し易いよう同じものにした。

次にメニューをどうするかということになるが、理想的には(1)軽くて(2)調理が簡単、(3)栄養豊富（高カロリー）で(4)おいしく(5)飽きがこないものということにでもなろうか。しかしこれらを全て満たすのはなかなか難しい注文であり、加えて緊縮財政の我が食糧部としては食品会社の援助が頼り、そう無理をいえない実情もあって、理想ばかり追い求めるわけにはいかなかった。結局寄附して戴いたものをもとにメニュー

を立て直し、出来上ったのが表1である。基本メニューとはいえ種類が少ないのは上のような事情による。1人1日分の分量は現地食で1100g、ハイレーションで800gであった。

食糧輸送と現地買い出しについて

ところで食糧を日本で用意して輸送するか、それとも現地で購入するかは全てお金の問題である。食品会社から寄附して頂いたものも空輸すればそれなりの値がつく。これとパキスタンの物価との兼ね合いで安い方を取るのであるが同じ又は少々高い位ではなるだけ日本製を持って行くことにした。安くても食べなければ意味がない。その点パキスタン製の品質は未知数で不安が残るが、日本製なら安心だし何より我々の口に馴染んでいる。そんなわけで結構多量に空輸することになったが、食糧は装備に比べてプライオリティが低く、無ければむこうで買えばいいという腹もあって、一部を機内持込みの手荷物とした。重量制限がないのを幸い、万一問題になった場合は置いていくつもりで、密度の高い物ばかりをザック一杯につめ込んで乗り込み、70kg（約8万円）は浮かせることができた。

さてパキスタン到着後の仕事といえば買い出しであるが、これは思いがけず簡単にいった。宿泊していたデービスホテルのフロントが用意してやるというのである。値段はバザールのそれとほぼ同じか、むしろ40度を超す灼熱の中を歩き廻ることを思えば安いくらいで、心配していた米やアタの品質もホテルのものなら大丈夫であろう。さらに運がいいことには、同じホテルのポーランド隊の余っている食糧を安く譲ってもらえることもでき、これとフロントに頼ん

だ分ではほとんどの物が買いそろえられた。あと残りの小物をバザールで、野菜・アプリコットをフンザで購入し結局食糧総量は空輸分300kgと合わせ、つごう550kgとなった。表2に国内及び現地調達分の食品リストを示す。

結果と反省

まず現地食については、主食として細長くやや臭みのある現地米とチャパティ（アタ）他日本からの麺類を用い、野菜はじゃがいもと玉ねぎ、それにアユーブが持ってきたレタスが少々ぐらいで人参やキャベツの類はなく、肉についても日本からのドライソーセージやコンビーフ及びポーランド産のポーク缶詰ばかりで、チキン・玉子は高価で手に入らず、マトンはガリガリでポーターにこそ一頭買い与えたものの我々は食わずじまいであった。

そうした現地食における反省点としてはまず第一にチャパティの失敗があげられる。ローキャンプでは多くの隊がカレー&チャパティのメニューを採用しているようだが、如何せん作るのに時間がかかり面倒である。少人数ならともかく11人分ともなるとたいへんで、BCに停滞して暇を持て余しているという場合には打ってつけだが、今回のように全員が毎日行動する場合にははっきりいって不向きであろう。第二に非常用として病人食を用意していなかったのも手落ちであった。下痢で体調を崩すもの多いにもかかわらず、そうした人に合う食事（消化の良いものや流動食）がなかったのは申し訳ないことであった。その他メニューが少なくバラエティーに乏しいのは覚悟の上だが、同じ素材でもよりおいしく食べる工夫はすべきであって、豪華なものでなくとも皆の食欲をそそるよ

うなものが必ずある筈である。梅干入り手巻きおにぎりやわさび茶漬けが好評を博したようにもっと日本風のあっさりした味付けを考えるべきであった。

一方ハイレーションについては、主食は乾燥米と麺類、それに乾燥玉ねぎ・乾燥人参・マッシュポテトとドライソーセージを加えた日本からの輸送品のみでメニューを作り、全て2人分を1パックとして人数割りの簡便化をはかった。ところがこれが大失敗。高所の影響かひとまとめにした野菜（調理が簡単な様に工夫したつもりだった）のでき具合がまちまちでうまくいかず、いっそできあいのレトルトかフリーズドライ食品を用いるべきであったかもしれない。しかし捨てる神あれば拾う神あり。そんな窮状を救ったのが日清の乾燥米である。赤飯と五目おこわの2種類があり、山専用でない一般向けだけあって非常に美味。みそ汁と干魚を加えた和定食3点セットはなかなか好評で今後お薦め品の一つであろう。

その他飲み物や停滞食についてはさまざまなものを豊富に用意したが、中でもスティックタイプのコーヒー・ココアは便利で、医薬用ビタミンCを入れた特製レモンティーやドリップ式のレギュラーコーヒーの味は又格別。砂糖の量は1人1日70gで適量であったし、行動食についても結構充実していたようで、パキスタン製のビスケット・チョコレートともうまく、ヨーカンやアプリコットが人気の的。行動中怠りがちな水分補給の一助にとつけたスポーツドリンクの小パックもまずまずの成功であった。

以上まとめると、前半無定見に食べ過ぎて後半ややひもじくなったものの、量的な面においてはほぼ適量であったとみなしてよい反面、質

的な面、とりわけ遠征食糧の条件(4)(5)に掲げたおいしくて飽きがこないものという点では、まだまだ努力する必要があったと思われる。それでも遠征を通してこれといったトラブルが起き

なかったのは喜ばしい限り。比較的順調に登れたせいもあろうが、これもひとえに隊員各人の半ばあきらめにも似たストイシズムの賜と感謝している次第である。

表1 基本メニュー

現地食(BC・ABC)

朝食 1 釜めし汁 みそ汁 海苔物 漬物	朝食 2 ラーメン* ドライソーセージ	行動食 ビスケット チョコレート キャラメル ドライフルーツ スポーツドリンク
夕食 1 チャパティ** カレー** みそ汁 漬物 缶詰	夕食 2 米 マーボー豆腐 スープ 漬物 春雨サラダ	夕食 3 ちらし寿司 高野豆腐 切干大根 お吸物 漬物

ハイレーション(C1~C3)

朝食 ラーメン* ドライソーセージ	行動食 ビスケット ドライソーセージ キャラメル ドライフルーツ スポーツドリンク	夕食 乾カ カ み 漬 干 米** 汁 魚
-------------------------	--	---

* うどん、焼そば ** シチュー、肉じゃが

*** その他 停滞食として ホットケーキ、プリン、ぜんざい等
多数有り(但しBC・ABC・C1のみ)

表2 食品リスト

国内調達分

ラーメン	218袋	マッシュポテト	15箱	麦茶	1袋
うどん	97袋	乾燥玉ねぎ	3kg	玄米茶	1袋
焼そば	70袋	ジフィーズ人参	20箱	ポカリスエット(大)	24袋
釜めしの素	55袋	高野豆腐	5箱	アルファオメガ	2缶
日清米(赤飯)	59袋	切干大根	5袋	ゲータレード(小)	424包
〃(五目おこわ)	58袋	春雨	2袋	ビスケット	166箱
カレー	35箱	みりん干	80尾	カロリーメイト	58箱
ビーフシチュー	16箱	さくら干	80尾	ヨーカン(小)	49個
クリームシチュー	24箱	しそ梅肉	7袋	キャラメル	212箱
マーボー豆腐の素	22袋	漬物	44袋	ホットケーキ	16箱
本豆腐	18箱	昆布つくだ煮	6袋	お好み焼	8箱
寿司太郎	10袋	ふじっ子	10袋	プリン	25箱
ドライソーセージ(大)	67本	純とろ	17袋	ゼリー	25箱
〃(小)	25本	味付海苔	80袋	もろ	27個
ベビーサラミ	49袋	ふりかけ	24袋	ゆであずき	3缶
ジーンズカルパス	98本	お茶漬の素	40袋	そうめん	1kg
ビーフジャーキー	14袋	みそ汁	240袋	しょう油(500ml)	2本
コンビーフ(820g)	10缶	お吸物	110袋	本だし	2箱
焼肉缶詰(大)	20缶	カップスープ	345袋	中華の素	2袋
ツナ缶詰(大)	10缶	レギュラーコーヒー	2缶	おろし生にんにく	8本
まぐろステーキ	2缶	スティック〃	500本	おろし生しょうが	2本
きんま蒲焼	6缶	ミルクココア	19箱	マヨネーズ	2本
		スティック〃	80本	塩	1kg
		ティーバッグ	232包	コシヨー	1kg

現地調達分

米	60kg	ビスケット	140箱	ポーリッシュレトルト	21個
アタ	30kg	チョコレート	280個	ボーク缶詰	7缶
ギ	7.5kg	ドライレーズン	2kg	シヤケ缶詰	3缶
じゃがいも	15kg	アプリコット	4kg	紅茶	2kg
玉ねぎ	10kg	ジャム	4瓶	ミルク	10kg
コーンフレーク	5kg	カレースパイス	1箱	砂	42kg

梱包・輸送

佐藤健哉

梱包する際に、まず始めに悩まされたのが、装備、食糧を梱包する場所だったが、これは山田山岳部長のおかげで計算センターの広い一室を借りることができ、非常に便利に梱包することができた。

使用したカートンボックスは、日石合樹製品社のプラパールという製品で株式会社トーモクから購入した。大きさは大と小の2種類。大が485×295×886で小が470×283×270となっており、大1個の中に小3個がちょうど入るようになっている。しかし、このプラスチックカートンが高価なもので、大が1個1200円、小が400円もするので、大60個、小60個を買い、足りない分の小カートンは段ボール箱を使用することにした。価格は無料ということで、このことは本当に感謝している。

カートンはBC, ABC, C1, C2, C3と各キャンプ別に梱包した。これは、たとえばC3が建設されるまではC3用のカートンを開けなくてすむようにするためである。また、ポーターがそのまま背負えるように1カートンの重さを25kgにした。キャンプ別に分け、しかも1カートン25kgにするということではいぶ悩まされた。また、空輸分は1kgにつき1062円ということで非常に高く、個人装備の登山靴、ヤッケ、ダウンジャケットなどを身につけて飛行機に乗り込むことにしたが、これは他の乗客から白い目で見られた。しかし、

1kg = 1062円だから、この分だけでもかなり安くなった。

また、日本から輸送する装備、食糧だけでなく、現地で購入する分をポーターに担いでもらうため、空の Kartonボックスとファスナー付のコンバイン袋も送った。このコンバイン袋は米、砂糖、アタなどを入れるのに非常に便利であった。旗ざお、ストックなどはカートンに入らないため、これらをまとめて段ボールで巻いて梱包した。細かいものは各テント別、用途別にポリエチレンの容器に入れた。これらの容器は岩崎工業からいろいろな種類のをいただき、これも非常に感謝している。

日本からの空輸分は合計で約830kgとなり内分けは下表の通りである。

日本からの空輸分装備・食糧		
品名	カートン数	重量(kg)
支給品装備	3	75
装備テント用装備	6	150
エッセンテント用装備	1	25
隊員テント用装備	2	50
先端キャンプ用装備	1	25
C1用装備	3	75
C2用装備	3	75
C3用装備	1	25
各パーティ用装備	1	25
梱包用品	2	50
食糧	8	225
その他	1	25
合計		825

これらの輸送は三井航空サービスに依頼した。これらの荷物をパキスタンで受け取り、ラワルピンディで我々が宿泊したミセスデービスホテル

ルに保管した。

ラワルピンディで購入した装備、食糧はホテルで梱包した。空輸分と合わせて、総カートン・コンバイン袋数は62個、総重量は約1500kgとなった。ラワルピンディからアリアバッドのPTDCまでの輸送はバスを1台チャーターした。荷物はバスの屋根に積むわけだが、全部は積めず車内にも多くのカートンを入れなければならない、隊員たちは非常に窮屈な思いをした。PTDCからBCまではポーターを使って運んだ。総ポーター数は62人だった。

キャラバン中のポーターの歩く速度は遅く、15分ぐらい歩いては10分休むというペースで、こんなに遅くて着くのだろうかと思うが、さすがに地元の人たちでちゃんと予定されていたサイト地に着くのである。キャラバン中、旗ざお、ストックを持っていたポーターから苦情がでたため、これらは隊員が分けて持った。

帰りのキャラバンも行きと同様だが、食糧がなくなり、フィックスロープなどの装備などもなくなったためかなり軽くなった。総重量約500kg、ポーター数は20人だった。PTDCで個人装備などをパッキングしなおし、再びバスをチャーターしミセスデサービスホテルへ帰る。

ここで、イスラマバード・インターナショナル・エアポートというエージェントに日本への空輸を委託する。帰りの空輸の料金は1kgにつき約43ルピーだった。エージェントの話によると4日ぐらいで東京に着くということだったので、東京で待っていたが、いっこうに荷物が着かない。空港に問い合わせるがいつになるかはわからないということなので、大阪に帰ることにした。結局、荷物が成田に到着したのは1週間後だった。荷物の通関と大阪への輸送を

空港グラウンドサービスというエージェントに依頼した。荷物は全部、大阪へ送られてきて仕事は終わった。

最後に、梱包・輸送についての注意事項は次の事である。パッキングリストはあまり細かく品目を書かなくてもよいようである。細かい物は、TOOLBOX、COOKINGSETなどとし、ひとまとめに小さなカートンにまとめた。大きな声では言えないが、EPIガスはパッキングリストに書いてはいけない。今回は、カートリッジはCANNEDFOOD、EPI本体はCANOPENERとした。これらは外から透けて見えないよう段ボール箱に入れた。また、パキスタンの税関で荷物を開けられて上の方の小カートンを調べられるので、いちばん下の段にEPIの箱を入れた。荷物を日本に送り返してくる場合、アナカンパニードバゲッジであるが個人装備を送り返すときには、個人が一人一人別送品申告書を必ず書いておくこと。共同装備は代表者が申告書を書く。こうしておかないと後で面倒なことになる。

医 療

奥 山 宏 臣

1. 予防接種

パキスタンに入学するには特別な予防接種を必要としない。しかし我々は登山活動に支障のないように、有効と思われる予防接種は、全員が受けることにした。

<コレラ>全員が受けた。現在アジアに流行しているのは激症型のアジア型ではなく、軽症型のエルトル型なので致命症となることは少ないが、やはりパキスタンで流行した場合には日本に帰国する際トラブルのもとになるので受けていった方が安心であろう。幸いコレラ様の症状を見ることはなかった。

<破傷風>パキスタンで特に流行しているということはないがほとんどの隊員が受けた。

<A型肝炎>ガンマグロブリン製剤は高価な上に、効果も安定しないため結局1人しかうつものはいなかった。肝炎は罹患すると有効な治療手段もないため受けることが望ましいと思われる。幸い肝炎に罹患した者は一人もいなかった。

2. 病気色々

○ピンディにて

<下痢>

原因不明である。発熱を伴うこともあるがほとんどは慢性的なものになってしまう。抗生物質が有効なわけでもない。下痢になることは充分予想できたので登山前はなるべく生水は飲まずに、ボイルドウォーターかビン入りの炭酸飲料を飲用した。にもかかわらず最終的にはほぼ

全員が下痢に悩まされた。慢性的下痢では熱が出ることもなく体がややだるい程度で登山活動にもそれほど支障はなかった。

<発熱>

38～40°Cの熱が1～2日続くといったパターンで次々と隊員が倒れていった。もちろん下痢も伴うが、多くは解熱剤と抗生物質で平熱にもどった。感染性のものかとも考えられるが恐らくその原因は日中の50°C近くにもなる気温のせいではないかと思っている。

○登山活動中

<下痢>

登山に入ってもやはり下痢はNo.1の病気であった。ほとんどは慢性的なものでピンディからの持ち越し組が多かった。慢性的なものは食欲が落ちるわけでもなく登山活動にもそれほど支障をきたすことはなかったが、ガスの排出できないことと下着がすぐ汚れてしまうことには全く閉口した。

やっかいなのは突然腹痛と共におそってくる下痢である。ひどい時には吹雪の中を一晚に5～6回も寝袋をはい出さなければならなかった。原因はほとんど過食によるもので、こういう時は体同様胃腸も弱っていることを考えて腹八分目にすることが最良の予防法であろう。たいていは1日～2日で治まるが一例だけ一週間ほど続いて肝を冷したことがあった。

<発熱>

ピンディとはちがって高熱が出ることは、ほとんどなくせいぜい38°C前後に留ることが多い。

<腹痛>

腹痛は単独でおこることはなく下痢の前駆症

状として軽い発熱、はき気を伴って現れることが多い。鎮痙剤の他に胃腸薬消化剤等も使うことが多い。

<感冒>

感冒といっても典型的なものではなく、頭痛・咳といった高度障害の一端として発症することが多い。睡眠薬の代用としても感冒薬は使うことが多かった。

<歯痛>

(松尾敬志)

登山期間に歯痛の訴えのあった者は1名のみであった。自発痛・咬合痛を主訴としており、冷温刺激には反応せず打診に強く反応すること。また患歯は以前根管処置を受けていることより急性の根尖性歯周炎または根尖膿瘍が疑われた。登山中であり根管処置等の抜本的治療が不可能であるため、鎮痛剤および抗生物質を投与した。数日して臨床症状は改善し、その後再発は認められなかった。

歯痛の原因として、高所登山による体力の劣化に伴い細菌感染に対する抵抗力が减弱したことが挙げられる。すなわち患歯の根尖部に生息していた細菌が、抵抗力の减弱により増殖して急性発作を起こしたものと考えられる。また一般に良く言及されるが、高度に伴う気圧の低下が歯痛の原因に挙げられる。しかし他の隊員にも根尖病巣を有しているものがあるが、何等の症状が認められなかったことより、気圧の低下は歯痛の誘因になり得ても、主たる原因では無いと考えられる。

歯に起因する痛みは、登山中においては、対症療法以外には手の施しようがなく、入山前の完全な治療以外には予防法は無い。従って登山計画の時点で一度歯科を訪れ、出発前に治療を済ませることが必須である。各自責任を持って

対処すべきと考える。

3. 薬品リスト

○よく使用した薬

<抗生物質>

これは主にペンディで使うことが多い。ペンディでは前述のように原因不明の高熱下痢に陥ることが多く、解熱剤と併用により使用した。

<解熱鎮痛剤>

ペンディ、登山中共によく使った。ペンディでは解熱剤として、登山中は主に頭痛歯痛を抑えるため実によく使った。

<感冒薬>

睡眠薬代わりに特に人気のあった薬の一つ。なくてもいいがあった方が精神的な支えとなる。

<消化酵素剤>

ペンディ、登山期間中ともによく使用した。吐気、胃もたれ、胸やけ、下痢にと大活躍。

とくに登山期間中は胃腸にもダメージがかなりやすいので予防的にも使う。

<ビタミンC顆粒>

紅茶に入れるとレモンティーになる。ミルクティーを飲みあきた我々にとって実に新鮮な味を提供してくれた。トータルで1kgは量的にも十分であった。

<ワセリン>

山では口唇のひび割れがひどい。中には血を流しながら食事していた者もいる。口唇の乾燥を防ぐことはぜひとも必要だ。

<日焼け止め>

忘れてはならないものの1つ。1日1回といわず小まめにぬることが必要。

4. 高度障害

結果として高度障害に悩まされることは、あまりなかった。全員が7000m近くまで登れたということはやはり順応がうまくいったということであろうか。

高度障害の症状として、頭痛、不眠、はき気、全身けん怠感等の症状は見られたものの、たいはいは一時的なもので、それが登山活動の支障となることはほとんどなかった。

○高度について

高度障害はよく4000mと6000mで生ずると言われるが、我々も大きく分けてBC(4100m)とC3(6500m)の2つのキャンプで明瞭な症状が現れた。BCではわずか4日のキャラバンで2000mより4000mまで登るので皆多かれ少かれ頭痛等の症状を認めたようだ。頭痛のため4~5日動けないケースも一例あった。

次にC3(6500m)であるが、これは上って数時間体の疲労が吹き出すようで何もする気がしなくなる。しかしこれも翌朝にはわずかに頭痛を認める程度でさらに新しい高度を獲得することができた。

○高所順応について

高所順応に関しては、我々は一つの原則をもって対処した。それは「初めて獲得した高度では睡眠をとらないこと」である。我々はハイポーターを雇わなかった都合上、BC以上の荷上げはすべて自分たちの手により行った。そのため必然的に各キャンプ間の往復の繰り返しが多くなり、これが順応に良い結果をもたらしたと思われる。又各人4日に1日の休暇日を設け疲労の蓄積を極力防ぐことに努めた。もちろん日程的に余裕のある場合のみこのような原則が

守られるのであって、日数に余裕がなければ、順応の方もかなりの個人差が表れてくると思われる。

ただ今回の遠征により得られた結論は、7000m程度の高度であれば、時間をかけて各キャンプ間を数多く往復することにより、それほどの個人差もなく、良好な高所順応が得られるということである。

医療用の酸素も持参したが使うことはなかった。

5. ポーターの病気について

主な愁折は、頭痛、腹痛、歯痛、外傷、くつずれ、咳、胸痛、動悸等である。

<頭痛>

最も多い愁訴の1つ。キャラバン1日目より常に多く高度障害とも考えられない。熱もなく原因不明である。

<腹痛>

これも多かったが、症状もいま一つ明らかでなく実際に消化器系の痛みかどうか不明。毎日いつてくるが、それほどひどいとも思われなかった。

<歯痛>

数は少なかったが、ひどいものが多かった。外からさわっても腫脹顕著なものが1名、全部で3名であったが、歯痛はアリアバッドでもけっこう多いようであった。

以上特に何らかの処置を必要とするような症状は見られなかったが、とにかくキャラバン中は毎日薬を要求してくる。一々提供してはきりがないが、やはり遠征隊は、ポーター用の薬として、鎮痛剤、鎮痙剤、消化剤感冒剤等、多量に用意してゆくべきであろう。

雑 感

○ Aliabad 村にいたドクターによる病気、Best 3.

1 位はやはり消化器系の疾患。山のふもとといえども水は泥が混っていて、澄んだ水はほとんど得られない。もちろん上水、下水の区別もなく、水がこの村の問題点であろう。

2 位は結核。日本でも依然なくなりそうでない病気であるが、ここ Aliabad ではかなり多いようだ。もちろん抗結核剤等も十分に

はなく、今度行かれる隊があればぜひ持っていただきたいと思います。

3 位は脳梗塞。やはりここ Aliabad でも塩分の取り過ぎは問題のようで高血圧患者も多いとのこと。心筋梗塞はまだまだ脳梗塞よりも少ないようで、欧米化してきた日本とは異なる点である。

他に悪性腫瘍としては意外にも皮膚癌が多いとのこと、これはアジアよりもむしろ欧米のパターンに近い。紫外線が強いせいであろうか。

医 療 リ ス ト

種 別	名 称	数 量		
内服薬	アモシリンカプセル	250mg×300 T	ペニシリン系	
	アクロマイジンV	250mg×500 T	テトラサイクリン系	
	ナパノール	100 T	解熱鎮痛剤	
	ベンザエースD錠	40錠×12	感冒薬	
	リン酸コデイン100倍散	500 g	鎮咳剤	
	フオリスタル	100 T	抗ヒスタミン剤	
	ホリトーゼ	500 T	消化剤	
	レシタン	300 T	鎮痛剤	
	クケゲ漢方便秘薬	50 T×2		
	武田胃腸薬	120 T×3		
	ハイシー顆粒クケゲ	1 kg	ビタミン剤	
	カピラン	1000 T	末梢拡張剤	
	テレコール	5mg×100 T	うっ血性心不全	
	外 用	ワセリン	25g×30ケ	
		ステロイド軟膏	5g×30	レダコート
		レダマイシン軟膏	10g×20	抗生物質
		クエスト99	90ml×30	消毒液
		ビドーSG	5ml×5	抗炎症目薬
ビドー40		15ml×20	〃	
サルベリン点眼用		5g×10	抗生物質目薬(ペニシリン系)	
ヒルドイド軟膏		30		
サンスクリーン		30	日焼け止め	
強力ボラギノール		30×2	痔用坐薬	
人工涙液マイティア		450ml×2		
ヒビテン		200ml×1		
エタノール		200ml×1		
湿布薬		1パック		
注射 点滴		パンスポリン静注用	1g×10	抗生物質
		レバタン	5 A	麻薬性鎮痛
		マルトース	500ml×5	
		生食	250ml×1	注射用
	プロカイン	0.5% 100ml×1	局所麻酔薬	
	注射器	12		
点滴セット		7		
		7		
診察用	血圧計	1		

種 別	名 称	数 量		
診察用	体温計	10		
	耳鏡	1		
	聴診器	1		
外傷用	滅菌ガーゼ			
	脱脂綿			
	包帯	100		
	ばんそうこう	50		
	バンドエイド	300枚		
	三角巾	50枚		
	眼帯	3		
	ピンセット	5		
	はさみ	5		
	外 科	持針器	1	
		外科はさみ	尖2, 丸2	
		ピンセット	有 2, 無 1	
コッヘル		5		
長コッヘル		2		
把刃		2		
メス替刃		尖刃12, 腹刃12		
縫合針		3号丸 20 5号角 20		
ネラトンカテーテル		7号 1, 8号 1		
ドレーン用ゴム		50cm 1		
気管カニューレ		10号 1		
クラームルシーネ		10×100cm 1 8×60cm 1 4.5×42cm 1		
指シーネ	3			
MUSCH	2			
LISTA	2			
AIRWAY	1			
ルンバール針	1			
手洗ブラシ	1			
ゴム手袋	3			

会 計

大 石 真 也

まず以前に比べ、ポーター賃金の値上がり等パキスタン国内のインフレーションで大幅な支出の増大が予想されるが、日本国内は不況で寄附の増収は見込みがないため、出費の節約が第一条件となった。装備は、現役活動に支障が出ない必要最小限を除き、全て現在ある装備を利用すること。日本から持ち出す食料、装備は、可能な限り関係企業に物品援助を賜わり、安全を守る物以外、贅沢品は削り、食料もできるかぎり現地で調達し、質を求めず輸送費をかけない様、軽くすること等が求められた。

一方資金集めについては、OB会に寄付を依頼し、実行委員会を設けて会社関係の大口の寄付の依頼にあたった。我々も阪大OBの多い在阪企業に電話をし、会って頂きお願いしたが、不況や、阪大50周年に寄附をした事を理由に断われたこともあった。また会社によっては寄附ではなく小言を頂戴するところもあり、学生の甘さを痛感する毎日だった。結局、寄附の内訳として、実行委員会を通して頂いた会社関係と、OB会寄附が大半を占めた。

こうした寄附集めと同時に準備のための出費も重み、山岳会口座は心細い毎日であった。各担当者には、「金が足りん。もっと抑えろ。」を繰り返すのみ。しかしながら、各担当者は、装備、食糧、医療等を物品援助で相当まかなうことができ、大助かりであった。これに反し、印刷費や事務費・通信費等を含めた雑費は、予算の段階では全く見当がつかず、適当にとったが

実際には交通費、郵便、電話代が意外にかかり大幅な赤字となった。

'84年5月、いよいよ出発となると、問題になるのが国外への持ち出し額である。予算を立てた後で最新の物価情報が入り、すでに予算オーバーは予想されたが、その後も値上がりした可能性も高く、また、現地で資金が不足した場合、日本からの送金手数料も馬鹿にならないため、予算に余裕をもって出国することにした。ところが現地での装備、食料の購入についてはそれほど予定をオーバーせず安堵。また、治安も良く、現金を持ち歩く事にも不安は感じなかった。しかし、銀行には、銃を持った警備員がおり、安心感と恐怖感が入り乱れた複雑な気持ちであった。

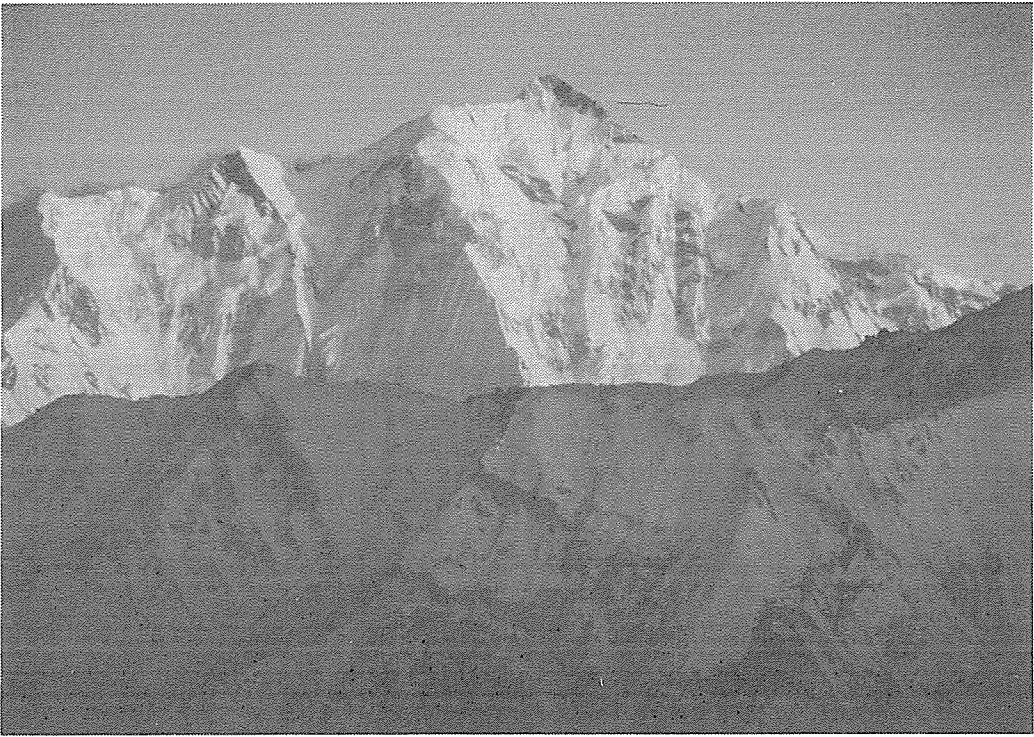
出発前よりトラブルが予想されていた人件費の問題は、ストライキこそ起こされなかったものの、ポーターの牛歩戦術によるキャラバンの日数超過で予想通り大幅の赤字となった。他の隊員たちはポーターたちと仲よくやっていたが私だけは、ポーターの顔を見ると金を要求しているように見え、気を許すことができず、キャラバンが終るとホッとしたものだった。

1. 収入

隊員個人負担	5,500,000
山岳会会員(97名)	1,390,220
企業	440,000
医薬品協会	1,500,000
合計	8,830,220

2. 支出

国内費		国外費	
渡航	2,398,000	滞在	79,578
輸送	1,080,131	輸送	411,997
装備	884,146	装備	49,698
食料	30,085	食料	76,005
梱包	90,600	人件	1,062,090
保険	53,460	登山料	149,080
医療	1,500	通信	27,720
雑費	1,449,018	雑費	292,112
報告書印刷	695,000		
小計	6,681,940	小計	2,148,280
合計		合計	8,830,220



C1からのラカボシ

雑

感

ピンディあれこれ

山の思い出

遠征を振り返って

ピンディあれこれ

先発隊の一週間

先発隊として5月18日に入国した私と上月は飛行機に乗った事も初めてという実に頼りない先発隊員であった。サービスが最悪と噂されたPIAはどっこいサービス満点で、座席裏の袋に入っているパンフレットに載っているミスPIAなる人が、なんと現物のスチュアーデスをしているではないか。我々は感激のあまり幾度もコーヒー、紅茶をおかわりし、はやくも腹がタプタプになっていた。こういう幸運にめぐり合えたのも実は中国からVIPが乗ったからなのだった。香水セットのお土産付で、幸先のよいairtripを楽しんだ私達は、ほぼ定刻どうりムツとするイスラマバッド空港に無事降り立った。

空港では、彫りの深い、真黒な顔をした有象無象にあつというまに囲まれてしまった。全員同じ服—カミーズという白いダブダブの服—を着て、しきりにタクシーに乗せようとせまってくるのだ。あまりの喧噪と混沌と体臭に押しされぎみの我々は、法外なタクシー料金を吹っ掛けてくる人々にNo——っ！とどら声を張り上げていたが、それも疲れてくるころ、パキスタンの英雄K2登頂者ナジール・サビル氏に助けられ、やっと登山隊がよく利用するといわれる、Mrs. Davies ホテルに連れていってもらった。hottestの時期にあたるパキスタンは、真夜中というのに非常に蒸し暑く、早くもセブンアップを数杯ガブ飲みした。というのも生水は飲んではいけないと聞いていたからである。我々胃弱な隊員達は終始このセブンアップを飲みつづ

けていた。

翌朝、「あのさぁー、あのさぁー」を連発しながら親しげに近づいてくるエドウィンという近所に住む御用聞きにつきそわれ、隊荷受取りのためのimport permissionを観光省へとりに行った。オフィスでは、カミーズを着たパキスタン人がゆっくりゆっくりお茶を飲みながらハンコをついてくれた。この国では役人もバナナ売りも屋台の風船屋も、皆カミーズを着ている。暑さをしのぐことを第一に考えた便利な服だ。この服を着ていると道ばたでもしゃがみながら大キジをそ知らぬ顔でできるという大メリットがある。ちなみにパキスタン人は小キジも同じ格好である。さて、許可証を得て空港へ行

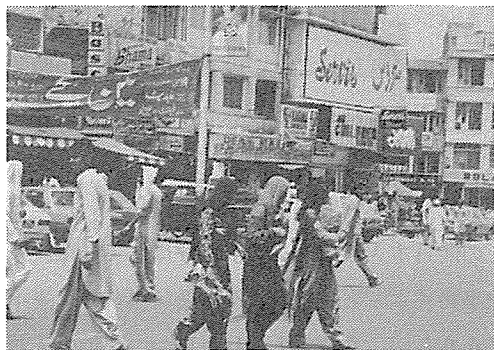


ピンディ

ったものの隊荷はまだ着いておらず、がっかりして帰途についた。エドウィンがつかまえたタクシーに乗ったが、これが大きなミスとなりすったもんだのあげく150ルピーも取られ、私達はもう二度とタクシーに乗るまいと誓い合った。夕方にはバザールを探検してみようということになり人々のひしめき合う町へくりだした。パキスタン人は、皆同じ顔をして、同じ服を着、

何も持たずにぞろぞろ、ぞろぞろと歩きまわっていた。一人一人に「あなたは何処へ何をしに行くのですか」と聞きたい衝動に思わず駆られてしまった。

翌日は、いよいよ空港で隊荷受取りだ。「スズキ」という乗り合い軽トラックホロ付バスにビリビリと揺られて行った。二人分の運賃をまとめて払おうとすると車掌がスルドイ目付きで睨み付け、まわりの乗客をも巻き込んで壮絶な議論となった。私達は深く反省しつつ大声で覚えたてのウルドゥー語を叫びながら空港に向った。空港では隊荷も着いておりいよいよ通関検査だ。いかにも親のコネだけで税関吏になれましたという感じのボンボンの兄さんが検査にかかった。我々は、十個ぐらゐのカートンボックスを開けさせられて、一つ一つ「これは何をやるものだ」などつまらぬ質問を受けた。税関吏の背後では私達が雇った通関業者が、さかんにクルクルパーの真似をしておもしろがっている。彼は「この税関吏はバカなので適当に相手をして下さい。もう少しの辛抱です」と言わんばかりだった。私達は、何かイチャモンをつけられるのでは……と冷や汗を流しながらパッキングの開け閉めにいそしんだ。幸い乾電池を数個賄賂として取られただけで済んだ。通関業者は、午後四時に隊荷をとどけると約束し、私達は、ふうっとため息をついてホテルに戻った。途中空港のそばに女学校があり、通学の女の子が集団で歩いているのを車窓から目撃した。パキスタン＝男ばかりの国と思っていたが、こんなところに美女が埋れていたのかと、重要文化財の遺跡群を発見したような感激を覚えた。回教国の常として女性は人目の多い所にはめったに顔を出さない。バザールなどでたまに見かける事



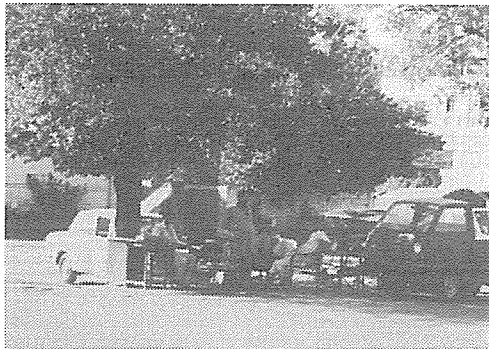
革新的女性(?)

はあってもたいていチャドル(黒い薄い布)で顔をおおっているのだ。しかしながら、観光国となりつつあるパキスタンではそういった古い慣習もしだいに薄れてゆくようだ。町では若者がロックミュージックを好み、日本製のウォークマンを半径5mぐらゐの人が聞こえるぐらゐガンガン鳴らしている光景もあった。また幾度かファッショナブルな、顔を顕わにした若い女性を見たこともあった。当地の「ナウイギャル」であろうか。それはさておき、インド、アール系アール系の女性は我々日本人の価値観からすると、彫りが深く、お目々ぱっちりでスラッとしているのでたいへんな美人ばかりだ。物乞いをしてせまってくる乞食でさえ美人の面影があるのでギクッとなってしまうのだ。物の本にはよくそういうことが書かれているが、やはり百聞は一見に如かずで我々は新らたな異民族との出会いを楽しんだ。

話をもとにもどそう。隊荷の到着は四時と約束したのだが、時刻を過ぎて来ず、私達はイライラするとともに、すべて盗まれたのではという不安に戦っていた。アシュラフアマンというパキスタンの登山家に励まされつつ、Mrs. Daviesホテルの中庭をコツコツと行ったり来たりするうち、六時にやっと隊荷は到着した。上

月とバンザイ三唱をして先発隊の重大任務を終え、感慨にふけた。この国にはこの国の時間感覚があるのだと後からわかったが、この時はまだそれに慣れていなかったのだ。このタイムスケールに充分順化して帰国した私は、しばらくの間日本人達に「グズ」と呼ばれていた。一仕事終えホッとしたのでその晩は屋台のヤキトリを食らい、食堂でテレビを見つつ現地の人達と親善懇談をした。パキスタン人は親日家が多く、我々は道すがら何人もの人に声をかけられた。中には握手だけして去ってゆく人もいた。

5月21日は、第二の仕事、大使館の訪問だ。タクシーには乗らぬと誓い合っていたため乗り合いバスだけで行くことにした。イスラマバッドに着いたものの不正確な地図だけを頼りに、日本大使館にたどり着くのは至難の技だった。碁盤の目のようにきれいに区画された町を、50℃近い炎天下の中、私達は歩き続けた。現地



倦怠な昼下がり

の人でさえ木蔭で休む午後二時頃—most hottest time と名付けたくなるような時刻に、二時間も彷徨いつづけてようやく大使館にたどりついた。すっかり暑さにまいったので、暗黙のうちには“タクシーの禁”を破ることに對して異議は却下されていた。しかしながらあえて禁を破ったもののタクシー料金はたったの5ルピーで

私達はボーッとした頭でホッとした。人生楽ありゃ苦もあるさで、ピンディに戻った我々は、冷房のきいたPTDC（パキスタン観光協会）へ行って、美女とおしゃべりを楽しんだ。この国で女性と話ができるのはあとにも先にもこの時とばかり、ついつい情熱的に弁をふるって興奮してしまった。

先発隊としての仕事もほとんど終えたので酒類購買許可証（パキスタンは回教国のため禁酒国なのです。）なるものを手に入れたり、暗闇の中、怪しげなろうそくの炎が揺れるホテルの一室で「ナジールサビル氏の早稲田大学合同隊K2登頂武雄伝」を拝聴したりして時を過した。

私達が現地になじみはじめた頃、ナジール氏よりコックのアユーブを紹介された。またリエゾンオフィサー（L. O.）の訪問をうけた。L. O. は、割とプライドが高く（少佐なので実質的にかなりエライのだ）、些細な事で傷つけてはいかんと心づかいが大変だった。しかしながら極めて友好的であり Resistration 証明書の取得など快よく協力してもらいすべて順調だった。私達の腹具合を除いて。

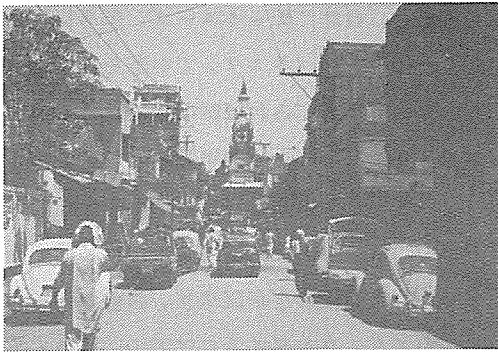
そして本隊がやって来た。カミーズを着て出迎えた我々に同朋達はなかなか気づかず、現地にとけこんだ事を密かにうれしく思った。買出し、コック及びL. O. の支給品交渉、バスのチャーターなど、皆あわただしく、交代で下痢と発熱に悩まされつつ一週間が過ぎた。残りのメンバーもそろい、ついに我々は涼やかな桃源郷フンザへ向けて、糞暑いラワルピンディに別れを告げたのだった。（野口）

ノスタルジック・シティー

空港に降り立ったのは夜。灯りが乏しく、街

の情景など見るすべがない。異様にふくらんだ期待と不安の入り交った朝は、鳥のさえずりとアラーの祈りで迎えられた。そして僕はペンディの虜になった。

ペンディ。その響きがいい。首都のイスラマバードも広々として緑の豊富な美しい町ではある。しかしそれだけ。どこか造られた都市の匂いがして人間臭さがなく味気ない。それにひきかえペンディはゴミゴミして少し汚いものの、旧都の名残り、バザールの雑然とした喧噪にも



ユトリロ風路地裏

活気が溢れ親しみが湧く。そして何よりも街の雰囲気が好きだ。それはまるで昭和30年代の日本を思わせる情趣を持ち、幼き頃の思い出としてある我が地方都市の焼き写しであった。

昼間こそ人通りも少なく、バザールは開店休業の状態であるが、日も傾き、涼しくなるに従い人混みも増え、メロン・西瓜・マンゴーの果物やダヒー・ラッシー・アイスクリームなどの露店商、映画館前で焼くシシカバーブ・シャミカバーブの匂い、ホットドックスタンド、風船売りやカセット、プロマイド売りetc.と夏の夜店を想わせる賑いに、ただ見て歩いているだけで心が踊り、ウキウキしてくる。おまけにレストランで出てくるジュースは今や日本であまり見かけなくなった7 up・ミリンダ・ラムネの類

だし、走っている車もどこか旧式で、ともすれば少年時代にタイムスリップしてしまった様な錯覚すらおぼえる。こうなると毎晩30分程の停電も妙に懐かしく、「そういや昔はこんなことよくあった」などと感慨にふけり、却って楽しくさえ思えてくるから不思議だ。

確かにパキстанは異文化の国である。しかしそれはインドの様に我々の感性の対極に位置するものではなく、むしろそこに感じられるのは古き良き時代への郷愁である。我々日本人をエコノミックアニマルと呼んだ国だけあって、人々の生活はいたってスローテンポ。回教的ケ・セラ・セラなるインシャラーの旗の下、のんびりやろうやといった風潮がうかがわれる。もっともそれは通り過ぎていく旅行者の目で見ただけであって、現実に彼らが考え思っているのとは全く別物であることも十分承知している。しかしそれだからこそ尚、梅田のセコセコとした雑踏に息苦しさを覚え、カラコルムの山奥くんだりまでやって来た一介の旅行者だからこそ尚思うのである。「ここには我々が捨ててきた何かが残っている」と。

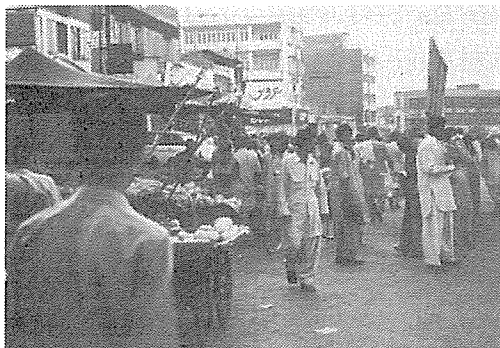
ペンディはそんな気持ちを起こさせるセピア色の街、ノスタルジック・シティーである。

(上月)

デービスホテルにて

Hotelの近くの少女を見て思う。10歳ぐらいだろうか。顔立ちはかわいい。足が細い。本当に細い。日本の女性に対して細いと言うのは次元が違うぐらい細い。栄養が少ないからだと思う。やはりパキстанは貧しい国に違いない。彼女たちはこれからどのように生きていくのか。裕福であることが幸福だとは思わないが

最低限の生活以下では決して幸福ではないと思うのは単に日本人の感覚ではないだろう。人類全体が最低限以上の生活をするができるようにするにはというのは殺す側の論理だろうか。そうでないとしても、とても考えられないしそうしようなんて大部分の人間は思っていないだろう。殺される側にいる人たちは裕福な国の援助などいらないものなのか。今考えられることは、自分と自分のごく身近にいる人たちの幸せだけである。この考えが殺す側と殺される側とに結局は分けているにちがいない。夕食を食べにチャイニーズレストランへ行った。料理はそのへんの店で食べるよりも量は少なく、値段は倍ほど高い。つまり高級な店で、こんなところに来るパキスタン人は裕福な人々にちがいないだろうし、見るからに裕福そうな人たち。パキスタンにもかなり貧富の差がありそうだ。こんなことを言っている自分は決して殺される側にいるのではなく殺す側にいる。(佐藤)



バザールに賑わう人々

ハンバーガーと食器

ラワルピンディでの食事は、朝食のみホテルで摂り、他は外で食べた。無論、経済的理由以外の何ものでもないが、街中を食事ついでに散策する楽しみがあった。入山前の準備、下山後

の事後処理と結構忙しく、「観光」この二文字に集約される世界に浸れるのはまさしくこの食事時だったのである。

店もいろいろ変化をもたせ、パキスタン料理の店、一流ホテルのレストラン、そして中華料理店などなど。特に最後の中華料理にはよくお世話になった。食が体に合わないためか、皆よく下痢をしたのだが、そんな時には消化のよいものをとということで、この店のヌードルを食べた。もちろん下痢は幾度となく波状攻撃を加えてくるから、自然“チャイニーズ”にあしげく通うことになる。パキスタンで中華をよく食ったというのも考えてみれば妙な話ではあるが。

さて、そんな中でよく利用した店にハンバーガー＝ショップがある。Bankroadに面した二軒で、一つはSuperrestaurantという名前。もう一つの方は看板の字が読めず、店のおやっさんに尋ねてもニタニタするだけでついに教えてもらえなかった。まあ店の名も知らずに入る方が悪いのかも知れないが。(今はとりあえず店員のユニホームの色にちなんでムラサキと呼んでおく。)

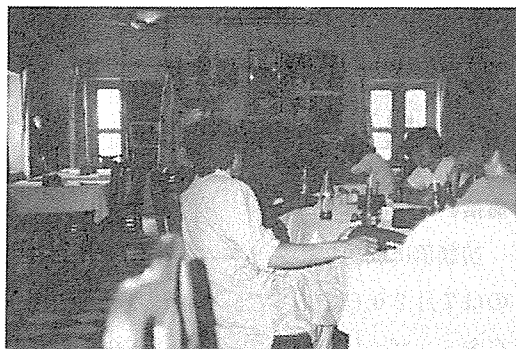
この二軒、どちらを選ぶかがむずかしい。入山前、スーパーはエアコン入り、ムラサキはエアコンなしだがドリンクサービスがあった。下山後再び行ってみると、ムラサキは改装してエアコンが入っていたものの値上げをしてやっぱり甲乙つけがたいままであった。メニューもカレー、チャパティ、ハンバーガーといったところで、どちらも似たりよったりである。そして店の感じまで……。ハンバーガーを売るあたりパキスタンの数少ないアメリカ感覚をニオわせるところなのだが、それはDom Dom、マクドナルド、ロッセリアといった、我々が日本でなじ

んでいる店とは路線を異にする店である。大体の空気を列挙すると ……。

1) 店員は全て[↑]○である。パキстанはイスラム教国であるから、これはいたしかたない。ミニスカートなんぞもっての外、客用営業スマイルさえ彼等のコンセプトにはない。厳しい職人の顔がそこにはあるのだ?!

2) 「マックフライが美味しく出来上っております。」とか「フィレサンドもいかがですか。」などウルサク注問を聞かれない。そのかわり黙っていると今度はいつまでも無視されつづけその場から浮いてしまうという悲劇をまねく。

3) 出されるハンバーガーの形態に関して。ハンバーガーは何故かあらかじめ二つに切つてある。そして皿にのって出てくるのだが、この皿にこれまた何故かサラダとフレンチポテトがのっかっているのだ。そしてトマトケチャップが一本ピンごとデンとテーブルにおかれる。値段が12Rsと少々高め秘密はこんな所にあったのだ。



デービスホテルの食堂

最後に何よりもブツたまげたのがナイフとフォークがついてくる事だった。ハンバーガーは手でつかんで食べるという概念しか持ち合わせていなかった私は、そいつを振り回してアラーの神に祈りを捧げるのかとビビってしまった。

所変われば品変わる、ではないが食の様式もそれが輸入されたものであってもいろいろ違うものだと感心させられた。その国らしさというものだろうか。ただこの場合、パキстанではなく英領パキстанの名残りとしての「らしさ」ではあったが

追記： お持ち帰りもできます。（水川）

ICE CREAM

当然の様にパキстанにもアイスクリームなる食いのものが存在し、販売されている。

食い物屋へ入ると、“ENGLISH”を扱っている店なら大体置いてあるようだ。

又、街頭にもソフトクリームをあのハンドルが三つついた機械（心当りのない方は、すぐ近くのドーナツ屋かハンバーガーショップあるいはアイスクリーム屋さんに行ってみればわかります。）からグジョグジョ絞り出して売っている。

はっきり言って食い物屋のメニューにのっているアイスクリームはまずい。砂糖で味付けした湯ばを食っている様だ。それに比べ街頭のソフトクリームの何と美味しいことか。値段もこちらの方が安く、今にパキстанではアイスクリームは全て街頭で売られるトグロを巻いたやつのみになると断言したくなる程この差は大きい。

これは私一人の意見ではなく、隊員全員の一致するところで、中には一日5個も食い翌日下痢をしたというS氏の様な人もいた。

とにかく酷暑のもとでは、この街頭ソフトクリームに助けられた。アイスクリーム屋さん有難う!? （水川）

A Feeling Of A Racer

パキスタンの交通状態は悪い。特に道路は無秩序の中にかすかな秩序の灯がともっている様な状態である。まず車体整備がなっていないため、方向指示もくそもなく、おまけに定員制限がないのか日本では5人しか乗れないはずのダットサンに7人も8人も乗り込んでいる。

そして何よりもコワイのはとにかくとばすことである。街中では混雑のためさほどでもないが、それでも少しでも車が減ると可能な限りアクセルを踏み込む。この恐怖を一番思い知ったのはアリアバットに向うバスの中であった。



街中を行くドライバー

ラワールピンディからアリアバットまではインダスバレーロードという道でつながっており我々はバスを一台チャーターし荷物と子どもアリアバットに向うことになった。やってきたバスは少々飾り過ぎのギンギラギンバス。荷物はルーフと後部座席につみ込み、いざ出発。これが夜だった為はじめはどんな所を走っているのかよくわからなかった(パキスタンの夜は本当に暗い。)我々のおかれている状態を知ったのは夜も明けてからだった。

インダスバレー・ロードは結構広い道巾をもってはいるが、なにしろ谷沿いに切り開かれた道。あやまって谷へ落ちれば命はなかる。と

ころが真暗闇の中、ガード・レールもなく、崖も切りっぱなしで、いつ石が落ちてきても不思議はない。

そこをバスの運転手は(髪をきれいに分け、レイバン風サングラスを愛用のカッコイイおにいさんだった。)問答無用にブツとばす。バスのタイヤはすり減り、荷物のために重心は高くなっているが、そんなことにはおかまいなし。道がまっすぐならまだしも、谷の形状に沿ってクネクネ曲っている。

前に他の車が現われた時が一番ヤバイ。彼はプロの運転手である。向うが乗用車、それも新型の日本車で、こっちが荷物満積のオンボロバスであることなど屁とも思っていない。彼の眼中にあるのは、ただ前の車を抜く事だけであり他の事は頭にないのである。絶頂に達するとカーブの度に身を内に外にまげ(コラッ!!オートバイじゃねェゾ!!)クラクションを鳴らしまくる。まさしく命がけ、汚れた英雄、これをレーサーと言わずに何と言おう。

それでもアリアバットに無事着いたのは、やはり彼は仕事師だった……ということだろうか?
(水川)

命拾い

初登頂に成功し、アリアバットに下りてきたのは7月20日であった。宿泊予定地のPTDCキャンプへ行く前に、一足先に下山した我等の“めじゃーみーる”に会うべく兵舎に立ち寄った。そこで数人のメジャーの友人である将校達とお茶を飲んだ。

その将校の一人にインダスバレーロードの建設の任に当たったという大尉がいた。自然話はインダスバレーロードのことになり、我々はピン

ディ〜アリアバットのあの一種快感を混じえた恐怖を思い起こし、

「この道路は危険だ。まだ不整備なのにバスの運転手は無茶苦茶とばす。」

といった意味の事を婉曲に申し上げた。するとかの将校平然と

「そんなことはない。この道は安全だ。制限速度もないんだ。だから90 km でとばしてもらってもいいんだ。」

とおおせになる。

私達はパキスタンの軍人はしばしば嘘つきであることを発見した。

日本人観光客を乗せたバスがインダスバレーロードから谷底へ転落したのは、それから一ヶ月程後のことであった。

追記：1985年末から1986年初めの間に又もインダスバレー転落事故があったそうだ。思わずうなづいてしまう私であった。

(水川)

インド・パキスタンのこと

パキスタンのバスは実に派手である。車体のありとあらゆる所に装飾がされてある。銀色のプレートがつけられたり、ウルドゥー文字をデザインした模様も描かれている。このウルドゥー模様などは、アグラのタージマハルの純白の壁に描かれているのと同じなのだから由緒正しいのかもしれない。

インド旅行を終えてパキスタンに再入国すると印パ両国は確かに違っている。パキスタンのバスはとにかく派手だが、インドのバスは地味そのもの。インドではインド国産の自動車以外見る事はないが、パキスタンは日本車だらけで

ある。乗り合いタクシーとして大活躍のスズキの軽トラック(パキスタン人は「SUZUKI」と言ってタクシーの意味で使っている)を始めとして、トヨタのカローラなどが警笛をブーブー鳴らしながら走っている。

インド旅行では20日間フルに動きまわり、いろいろな場所へ行き、またいろいろな人々と出会った。パキスタンでは実に長い間滞在したが、それはほとんど遠征のために費やされた。いろいろな場所へ行った訳ではなく、行ったのはピンディ、フンザ、カラチだけである。この様に私自身の印パ両国に対する接し方も違い、また旅行した時期も違うので、私の見た両国は一概には比べられないかもしれないが、見たまま感じたままを書きつらねていきたい。

パキスタンと言えば私は「暑い」という事を連想してしまう。連日45℃を越える猛暑には目がまわりそうになったものだ。その暑さは暴力と言ってもいい様なものだったし、超乾燥のため体中の水分が蒸発し、水をガブ飲みして腹をこわしたりした。ところが、インドではそんな



インド門(ボンベイ)

な暑さは体験しなかった。逆にジャイプルやダウラタバードでは涼しくて心地よいぐらいであった。しかし、これは両国の差違ではない様だ。パキスタンも7月末には雨が降り、大分暑さも

ましであったし、インドも6月始め頃の乾期の終わりにはすごい暑さらしい。インドについて書いた本が、どれもその暑さに言及していることから見て、インドの方の暑さも相当なものらしい。私は両国の気候の差を強く感じたが、実際はそうでもない様である。それどころか両国の差は、北インドと南インドとの差より小さいかもしれない。

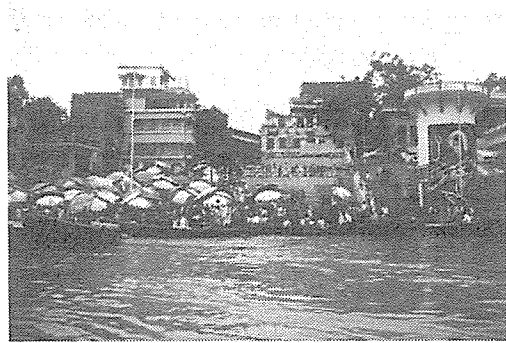
やはり、一番の差違と言え「宗教」ということになると思う。また、私の感じた差の多くは宗教によるところが多いかもしれない。

ピンディの暑さは前述した通りであるが、朝それも日の出ぐらいの時刻はまだましで眠れないままに早朝散歩した事があった。そんな時、聞こえてきたのがコーランの歌声であった。夜明けの町に朗々とコーランの歌声が流れ、私も心が安まる様な気持ちになった。イスラム教では1日5回の礼拝が義務づけられており、私はスプフと呼ばれる夜明けの礼拝でのコーランの声を聞いたわけである。我々のコックをしてくれたアユーブの話ではイスラム教徒の中にも熱心な人もいれば、あまり熱心でない人もいるらしいが、パキスタンの町中でイスラム色を感じるのはたやすい。

イスラム教はアラーの他には神はいないとする唯一神教であるが、イスラム教徒はアラーをどの様に感じているのだろうか。カラチのあるモスクを見に行った時に、あるパキスタン人に質問した。彼は親切にモスクでの礼儀を教えてくれた後、私の「アラーをあなたは感じる事ができますか」という質問に彼は「礼拝の度に私の前に現われます」と迷わず答えた。私の様な無信仰な者にとっては信じられない事であったが、事実彼は神の存在を信じて疑わない様であ

った。

インドでは宗教がヒンドゥー教に変わるが、信者の熱心さは同じであろう。ヒンドゥーの聖地バラナシを訪れ、聖なる川ガンジスで沐浴している人々は、実に幸せそうで、本当に来世の幸運が巡礼によって得られると信じている様である。ヒンドゥー教によるカースト制という身分制度は、インドの近代化に制止をかけていることはもちろんだし、インド人の人間解放にも害を与え、私などは理解しがたいのだが、バラ



バラナシのガート(沐浴場)

ナシで巡礼をするインド人たちを見ていると長い長い歴史の流れは容易には修正できないことを痛感させられる。

ヒンドゥー教は多神教で、イスラム教とは対立するが寺院の様子もまったく違っている。イスラム教は偶像崇拜を禁止しているため、モスク内には何もなく殺風景だが、ヒンドゥー寺院は実に装飾が華やかである。カジュラホーのヒンドゥー寺院はエロチックな彫像で有名だが、カジュラホーに限らなくとも、ヒンドゥー寺院では様々な彫像を見る事ができて楽しかった。

宗教の違いによって女性の感じも違ってくる様だ。イスラム教徒の女性は夫以外顔を見せないと云われるが、私もパキスタンではほとんど女性を見かける事はなかった。アユーブの奥さ

んの顔も見れなかったし、デービスホテルも女の使用人など一人もいなかった。ただ革新的な女性が、時々バザールを歩いているのを見かけるだけである。インドでは、女性も様々な仕事をしており、家計の中心なので、市場などで日本と変わりなく接しうるのだが、パキスタン人女性の奥ゆかしさを少しは見慣らって欲しいぐらいである。イギリスの影響が少しあるのかもしれないが、いろいろな面で女性が尊重されているらしい。私は列車の中で2人のインド人女性と隣り合わせたが、どちらの場合にもその横柄さには閉口した。列車が混んできても平気な顔で寝ているし、私が席をつめようとする逆逆と怒られてしまう。サトナーからジャルガオンへの列車はキューキュー詰めで私はインド人達の足と足の間に腰をおろしていたのだが、その時でも女性だけはしっかり横になっているしもっとひどいことには、私はその女性の連れている赤ん坊に小便をかけられるという始末であった。しかし、インド人の場合も、パキスタン人の場合も、顔立ちは同じでどちらも非常に美しい。インド女性などあれでもう少しつましやかならなと思う。

ムガル帝国以来1つの国であったこの両国は宗教上の理由だけで分離独立という事になってしまった。イギリス統治時代の影響が重要な意味をもつ分離独立のため、この両国は1つの国であった頃の有機的なつながりを絶たれ、ともに現在では苦悩している。インド、パキスタンの識字率はそれぞれ36%、24%で、教育もままならぬ状態である。インドのバクシーシ(喜捨)をねだる子供たちの哀しい目は忘れられないし、デービスホテルの裏に住むラビアやナスリンの家には異臭がたち込め、とても我々の



デリー

住める様なものではなかった。最近、南アジア6ヶ国の首脳会談が行なわれ、やっとインド周辺にも平和が定着しつつある様で内心ほっとしている。そんな簡単に近代化が成功するとは思えないが、せめて両国が平和を願い、もっと友好的な外交関係を持てる様になってほしいと思う。

(大西)

山の思い出

病気について

登山中の病気はしんどいものだった。僕の場合、C1が完成した頃から1週間、ABCで寝込むこととなった。まず腹痛に始まり、続いて下痢と食欲不振。食べなければと思っても胃の方がうけつけてくれないし、無理して食べると体の調子がさらに悪くなる。そして不定期便は1日最低5～6回はあるのだから体力が衰えていくのも当然だった。高所の影響と疲れの蓄積が原因となり、まず胃腸がくたばったのではと思っている。

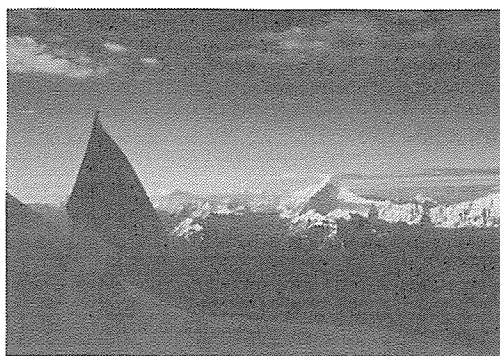
こんな状態が数日続き、回復の兆しも見当たらないとなると、気ばかりがあせってくるものだ。核心部の3峰のスベリ台では、フィックスロープが着々と伸びていく。そして他の隊員は徐々に高度に順応しているにちがいない。ところがこちらは快晴の下、1日の大半をテントの中で寝て過ごすだけなのである。出発前にたてたタクティクスにおいては、まずキャンプ間を何度も重荷をかついで往復し体をその高度に順応させ、そのちより上部のキャンプへ移動できるとされていた。ABCで寝ていることは、そのタクティクスからはずれていくことを意味する。

病気の時は、病気を治してしまうことが先決である。回復力を信じ、おとなしくしているしかない。ところが動かないというのは実に不安なこと、今後の登山活動に好ましく影響を与えるのでは……つまり登頂できないのではとつい心配になってしまう。

実は1週間全部寝ていたのかというそうで

はなく、行動した日が1日だけあった。少し食欲が戻ってきていて、なんとか動ける状態だったのである。そこで無理して歩荷に参加したのだが(結局、しんどくて途中で引返した)今から思うとその日がまんして寝ているべきだった。その日の夕方から病気は悪化し、再び寝込むこととなったのである。

とにかく初めての海外遠征ということもあり全体的に余裕がなかった。1人だけおいてきぼりにされ、登頂できないなんて確かに嫌である。この遠征に参加した以上、絶対に登頂したいんだという気持を皆持っていることだろう。それ



C2からのディラン

はそれでいい。しかし状況によっては登頂をあきらめるだけの強さも必要ではあるまいか。登山で無理することは禁物であるし、海外遠征の目的は登頂だけではないと思う。あまりにも登頂に固執することで、登山活動全体を楽しむことのできる心の余裕をなくしてしまうことにもなる。

病気になって6日目だったと思う、さすがにそれだけ寝るとようやく気ばかりあせっても無駄だということが理解できてきた。なるように

しかならんでもないか、すべては神の意のままに動いているのである。そう思うだけでいい気分が楽になった。そしてその信心のおかげか、翌日には食欲も戻り始め、翌々日にはC1へと向うことができたのである。（宮田）

駈け引き

山屋はとかくエゴイスティックなものである。チームワークを建前としているものの、日頃のトレーニングや本番の山行では互いにだまし合い、ばかし合いの連続で、「今日はどうも調子が悪い」「俺が一番にバテそうだ」などのたまいつつ、裏ではきっちりターゲットを絞り、相手の様子をうかがいながら内心まだまだ大丈夫とほくそ笑む。駈け引きの飛び交うし烈な世界であるが、こうした生き残りゲーム的な面も又一つの山の楽しさであり、その為に確執、キ裂が生じるという程の悲愴感はない。遠征隊においてもことは同じであろう。誰もがサミッターになりたいし、ルートワークもしたい。しかし敢えてそれを口に出すことがはばかれるとなればさてどうするか。そこで振り返ってみるとなるほどありましたありました。規定の荷上げを終えた後さらに上部へのデポを行ったり、人より以上の荷をかついだりというのは高度順化と計画進行が主目的であることに間違いはないが潜在的に「俺はこれだけ元気がある。従ってアタックも十分できますよ」という一種のデモンストレーションでもあったのではないだろうか。当時はあまり意識しなかったけれども、今考えるとどうもその気がなかつとはいききれない。少くとも私はそうであった。このこととともにC3からのルートワークでも一つの思い出がある。それまで私は他のチームを渡り歩いていたの

で、榊原・大西と組むのは初めてであった。1クール目2峰直登のルートワークを行うが失敗、2クール目に再度ルートワークがまわってきた。初日は大西と2人きりで微妙なトラバース・絶悪のラッセルと予想外に進まず、私はずっとセカンドでルート整備。翌日は復活した榊原を加えて3人での行動となるが、フィックス終了点で息を整えながら、追いついてきた榊原の目をチラと盗み見る。もう100mも張れば明日アタックできるだろう。これが最後のルートワークになるやもしれぬ。本当のところ私は是非それをやりたかった。しかし3人でパーティを組んで以来榊原にはまだその機会がなく、やりたいのはやまやまだろうし、私の方は失敗とはいえ1クール目に1度行っている。チームのリーダー（先輩）の立場としても彼にやらせるべきなのだろうが、これで最後というのがどうにもひっかかった。そこで駈け引き。「ルートワークやりたい？」これは「いや別に」という返事を引



頂上からのJ.P., 2峰, 3峰

き出す為の誘導尋問であり、躊躇（当然最初は遠慮するものとふんだ）する間隙を縫って「じゃ俺がやるわ」とさっさと決めてしまうつもりでいた。ところが敵もさるもの、顔を見合わせた一瞬の沈黙の後きっぱりと「やります」。ちくしょーと心の中でつぶやきつつもザイルを渡

し確保の態勢に入る。見たところクレバスのルート工作はそう難しそうに思えない。こうなれば早めに切って次のピッチを俺がやろうと勝手に思い込むが、クレバスに入った榊原はなかなか出てこない。イライラが昂まり、ようやく乗っ越しに成功した榊原に「何やとるんや」と手前勝手な非難、ヘトヘトの彼も喧嘩ごしで応ずる。結局ルート工作はそこまで、我々は動かさず彼一人フィックスを張って戻ってきた。

さてアタックは先発隊のルート工作が終わるのをみはからって出発。因縁のクレバス帯に到着して驚いた。見事なルートファインディングで、これなら時間もかかろうというものである。もし自分がいっていたらどうしたろうと考えると、思わず「うーん」とうなってしまう。とどのつまり、彼との駆け引きは負けるが勝ちであったようだ。 (上月)

ピンクの花 —— ある光景 ——

人間は生きている間に一体どの位の数の風景に出会うのだろうか。そんなもの誰も数えたことはないだろうし、風景なんて目を開けていれば自然と流れてゆくもので、写真や映画のカットの様に勘定できるものじゃない。だが人の記憶に残る風景というのは数え上げることができる。今これを読んでいるあなたも少し目を閉じてみれば、瞼の裏に発色の悪いスライドや出来の悪い8mmの様いろいろな場面が浮んでくるはずだ。そしてもし、あなたが山に登ったことがあるなら、その時の思い出が意外と多く登場してくることに気付くだろう。それ程山の風景は人の心に印象深い訳だが。しかしそれらは必ずしも銀嶺や紅葉、黒い岩肌といった「美しい」ものばかりでない。これ見よがしに積み上げられ

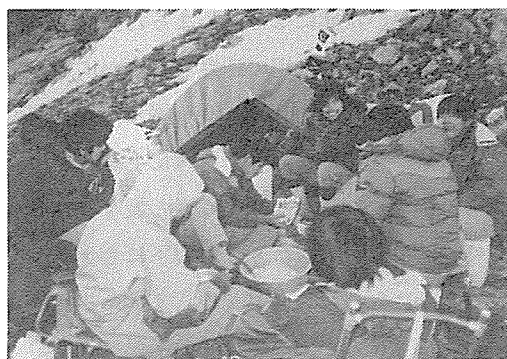
た空缶の山、もう何年もそこにあるのに一向に土に馴染もうとしないプラスチックの弁当箱、昔は一体何の一部だったのか？我々の想像力を刺激して下れる布切れなどなど。

さて、カラコルムくんだりまで意気揚々出掛けた我々も薄っぺらな心にそれなりにそれなりの風景を刻んできたわけだが — そんな風景の中からABCのある場面について。

パキスタンやインドと言うと大体の人がベスト10内に病気を連想する。そして事実非常に病気が多い。何故か？これには即答できない。余りに多くの、そう、歴史だとか地理だとか、病理学だの生理学だの、もろもろの見地からの要因がホコリの玉の如くからみつき結び合っているからだ。ただそこを旅する人間について言えることが一つある。「免疫」だ。現地の人と同じものを飲み食いする。現地の人は何でもないので異邦人達はたちまちバタバタと倒れてゆくのでありました。一得に「免疫」のイタズラだ。

知っている人は知っているのだが、インドやパキスタンでは一般にウォッシュレットである。だが「お尻だって洗って欲しい！」と言っても機械がやってくれる日本とは違って自らの指力で行わなければならない。後に気付くのだが、これが非常に快い。実にスッキリするのだ。日本に帰ってしばらくは、紙で拭くあの不潔感に悩まされたものだ。さてパキスタンにやってきた当初はこの感覚がまったく逆さまであった。指で拭くことこそ不潔で紙を用いることこそまさしく正義であるかの如く信じ込まされていた我々日本男子一同は、このパキスタンやインドの蛮習（と当時は信じていた。）に戦々恐々、

心秘かに脅えていたのであった。「もし紙が切れたら……。」そう思うだけで私の胸は高鳴り額を一粟の汗が流れ落ちるのであった。幸いなことに、都市ではトイレットペーパーを売っており、ホテルももとは英国人の持ちものということもあって、山に入るまでは紙を愛用することができた。問題は山に入ってからどうするか？だ。



飽食のABC

パキスタンのトイレットペーパーは一般にピンクだ。そして包み紙には漢字なんぞが書いてある。おそらく中国からの輸入品なのだろう。国際貿易の活発化は真に良いことだと感心しながら拭いてみる。使いごこちもなかなかよい。私はどちらかと言えばトイレットペーパーにはうるさい方だがパキスタンペーパーはその私を満足させるものであった。なまじ日本の粗悪品なぞ用いていると大切な所をいためてしまう。ただ心配なのはあの色で、まさか発癌性物質なぞ用いてないだろうななどと考えてしまうのは取り越し苦労というものだろう。

さて、先程の問題解決に打つ手は一つしかない。仮に指拭き術をマスターしようとも雪の所ではどうしようもない。まさか雪で拭くわけにもいくまい。「尻が凍傷になっちゃったぜ。」などと土産話にもならない。とにかくパキスタ

ン中を駆けまわってもトイレットペーパーを必要量かき集め、持って行くしかない。(実際には一軒のストアで充分まかなえたのだが。)

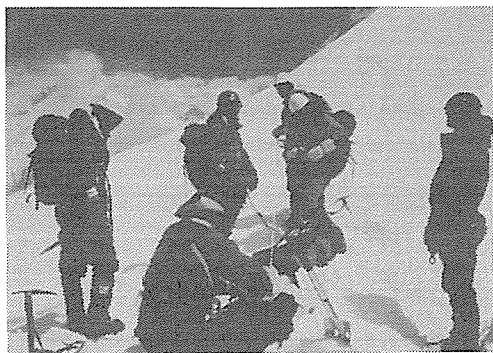
我々のほとんどが山に入る前に病気をした。症状はどれも熱を出して下痢をするというもので、多分細菌性下痢というやつだろうとドクターは診断した。中には年中下痢をしていて、この診断が当たるかどうか疑問をかけられる奴もいたが。病気は苦しいが、かえて気は楽だ。というのもこれで「免疫」というやつが出来れば山の中で病気をせずに済むだろうという目算があったからだ。全員頂上に立つ気でいるわけで、山での病気は個人的にも、隊全体としてもマイナスとなる。しかしこれでOK！俺達は絶体病気はしないぜ。なんしろこっちには「免疫」様がついてらあ。——これ程甘い計算も又めづらしい。——

各キャンプ内で一番生活時間が長いのはABCだった。こういう時間問題となるのが水と排泄場所だ。幸い両者が離れていたために今回相方が干渉しあうことはなかった。水は少しキャンプからトラバースした水路に求め、排泄の方は直下でやることにした。直下といってもABCはテラス上にあり、普通にしていれば視角外になる。又キャンプにもどる時もタラタラ坂を登り返す外に岩を登って上がることもでき、スッキリ一番帰りにはボルダリングを!!としゃれることもできた。又、広さも充分で少なくとも最初の内はどこでもできた。この広さが重大であった。というのも皆もう「免疫」ができていて病気でやられるとすれば高所障害か風邪位だろうと高をくくっていた上、山屋には「山に入ると病は治る。」という一種信仰の様な思い込み

があって、下痢なんぞ……と軽く考えていたからだ。つまり問題になる程排泄物で悩まされはしないだろうと。

だがこの期待は初めから裏切られることになった。最初にABCに泊まったパーティがいきなり嘔吐に襲われたのだ。そしてABCに上がる(又はもどってくる)パーティが次々と病気になってゆく。症状も嘔吐の他、やはり下痢が多く、発熱もよく伴った。一体何が原因なのか?初めは食べすぎだとばかり思っていた。上部キャンプの食事は味は良いが量的に今一つで、ABCでの休養時に、緊張緩和も手伝ってか無茶苦茶食欲がわいてくる。これで下痢や嘔吐の説明はつくが、では発熱の方は?そこで再び細菌性下痢の登場。しかしもう免疫が……。細菌だって種類じゃあるまいし。いやいやこれはきっと精神的ストレスが作用してウンヌン。

数々の憶測の飛び交う中、これといった原因も見出せない始末。いわばABCシンドロームとでも呼ぶべき禍中に我々は投げ込まれたのであった。原因がはっきりしないというのは気持ちの悪いものだ。死んだり重体に陥ったりということがないのでまだまだが、それでもいつのせいで日程がつんでくると少しづつ焦りが出てくる。パニックとまでは言わないが、明日



2次アタックに向かう(C2にて)

はABCかと思うとうれしい様な怖い様な。トイレトペーパー片手にいそいそとテラスを下りてゆく者を見ない日はない程だった。

そこで場所の広さが重大になってくる。もしあれだけの広さがなく、あっちこっち勝手にやるようになっていたら……今頃我々はピンクの海に窒息死しているかもしれない。実際終盤頃には手狭になってきて、過去の遺物を顔前にせずにはできない状態になってしまった。我々のペースは自然の浄化作用の速度をはるかにしのぐものだったのだ。当初は、やり終わった後、例のボルダリングを楽しんでテラスに上がる余裕もあったが、この頃にはそそくさと坂を登り返してゆく様になった。ボルダーの下にもナニが目立つようになったからだ。そして、ある日テラスにふき上げる一陣の風。その上昇気流によってピンクの紙がヒラヒラと……。

あわやという所で我々は危険を回避することができた。登頂に成功したのである。C3から順に撤収。ABCでの最後の夜、盛大に打ち上げをやる。当然食い過ぎて次々とテラスを下りてゆく。しかしこれでここともお別れ、ここでやるのも最後かと思えば軽い気持ちにもなれる。

翌日、テントをたたみ、ザックに荷をつめ、BCへと下ってゆく。振り返ると例の場所が見える。ピンクの花が咲いている様だ。古いものはもう脱色し、白くなって岩にへばりついている。妙に印象的な光景だ。これはいわば今までの我々の活動の足跡なのだ。少々きたなくはあるが、しかしそれはそこに明らかな人間の営みがあったことを証拠づけてくれている。いつかこの証拠も雨に流され地に吸われ姿を消してしまうのだが……。

ところで山の側から見たらどうだろう。我々

には一種アイデンティティの表象であり歩みの証しであり——少なくとも無関心でいられる対象であるが、山にとってはただの排泄物、迷惑千万なはずでは？

今ヒマラヤ登山にもゴミ処理問題が大きく扱われる時期にきた様だ。使い捨てられたボンベ、空き缶、ビニール袋……。本来山登りはそれ自身まったく自分勝手な行為だ。誰が得する訳でもなく幸せになれる訳でもない。ややもすれば他人に迷惑さえおよぼす。それを繕わんと薬を配ったり、写真を撮ってやったり、煙草を渡したり、いろいろ画策し気を遣ってみるが、やはりどこかで害を及ぼしているもので、その一つ



恍惚の松尾

がこのゴミ問題だ。これからの登山は今までの様に登りっぱなしというわけにはいかななくなるはずだ。ゴミに対する工夫がなされなければいつか夢の島ならぬ夢の山の出現となるにちがいない。

排泄物もこの問題の範中に入る。そして他のゴミと違って分解度が速く、まったくの有機物であるのが問題を特異にする。まったく分解しないやつも困りものだが、分解されやすくしかもそれが土壤に変化を及ぼすものであればこれ又困ったことになる。そこの生態系が必然的に破壊される怖れがあるからだ。高山植物などは

やせた土壤に適応しており、人糞による富養化に耐えれなくなる可能性が、そしてその後人によって運ばれる本来そこでは成長しないはずの草木がニョキニョキと……。第二第三の尾瀬となることも考えられるわけだ。ただ尾瀬の場合とちがって、極端に環影が厳しく、いきなりセイタカアワダチ草が可憐な高山植物を駆逐するといったことは起きないだろう。けれども年々ヒマラヤ、カラコルムを訪れる人はふえつづけているし道路整備などでかなり山奥深い所まで手軽に入れる様になってきている現状を見れば、いつまでも自然の浄化作用にのうのうとあぐらをかいているわけにもいかななくなるだろう。更に浄化槽を持ち歩くわけにもゆかず、かといって一ヶ所にためて持ち帰るというのもむずかしいお話で、この問題、意外と大きくなっていくように思うのだが。

今もってABCと言えばあの光景が目に見え、空き缶の山や、弁当ガラの様にあれも又山の一つの訴えで、我々の目にしっかり焼き付けられたものなのかも知れない。 (水川)

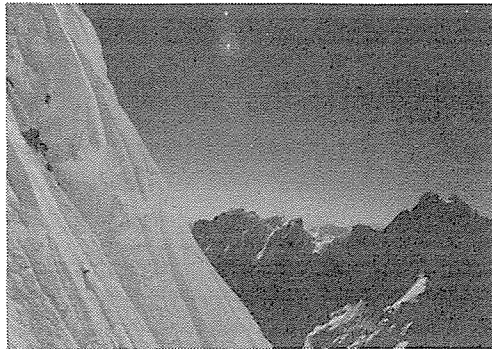
高度及び高度計について

サンゲマルマールの高度については2説あるが、我々は是非それを決定したい、それもできることなら高い方に決定したいと考えていた。高度決定の方法には精密な三角測量が望ましいが、今回はそうした測定機器を持ちあわせていない。そこで用いられたのが高度計及びハチンダールキッシュとの比較であった。サンゲマルマールが7050mと測定された時、ハチンダールキッシュは実に6800mと測定されており、パキスタン公式高度6949mと7163

mの場合とは高低が逆になっている。従って頂上においてハチンダールキッシュとの高さを比較すれば、どちらの測量により真憑性があるかははっきりするであろう。一方高度計としては、7000m用と9000m用を準備したが7000m用はBC・ABCで天候の変化をみる気圧計として用いた為、実際に活躍したのは9000m用のみであった。

さてあらかじめ日本で調整し、アリアバッドに着くやさっそく2つの高度計を取り出してみると、それぞれの値には既にして数10mの違いが生じていた。さらにこれらの平均値は、宮森マップのアリアバッド高度と比べて200mも低い。この頃はまだ登ってもいけないので余裕しゃくしゃく。登山活動に入った後、長崎北稜会のキャンプ高度を参考に修正しようということになったが、実際BC、ABCの値にも200m以上のズレが生じており、恐らく高度計の調整ミスであろうという結論に達するとともに、著しくその精度に対する信頼を失うことになった。

C3まで順調に進みいよいよアタックの段になるが、頂上は遙か彼方、ハチンダールキッシュ



2峰トラバースからハチンダールキッシュ

よりも高そうで7000mの希望が持てる。高度計を携えいそいそと出発。遂にピークに立

って値を見るもがく然。わずか6900mしかない。これでは低い方の6949mにも届かないではないか。ところがポリタンの水をレベルにハチンダールキッシュを眺めたところでは、こちらの方が幾分高い。支尾根や小さな沢までマップはいたって正確だから、高度だけが大きく間違っているととても考えられない。ここに来て高度計の信頼は地に堕ちた感があり、結局サンゲマルマールの高度もはっきりしないままに終わった。

一般に高度計は気圧の減少をもとに高度を算出するものであるから、そうたいした精度は期待できない。しかし精度が悪くてもそれが都合の良い方に狂っているならば大いに信頼される場合もある。減量に励む女性が少しでも値の小さくでるヘルスメーターを愛用する様に、山屋は少しでも高い値のでる高度計を所望するのである。そこで高度計セールスのキャッチコピーはこうなる。「高度100mアップ、6000の山も7000に！」

追記：一般にどの報告書を見ても高度計の値は公式高度よりも低い値しか示していない。同地域のウルタール〔(ボイオハグール・ドゥアン・アシル)〕の広島山岳会によると、原因不明だが、北緯36度付近で高度計が200m程低い値を示すという不思議な現象があるそうだ。(上月)

遠征を振り返って

新米ドクターとして

奥山宏臣

山で病気になるというのは、たいそう心細いもので、ちょうど山を登っていて急に海に放り込まれたような気分になる。周りをいくら見渡してもすがるものが何もない。こういう時は、自分の体温だけを信じて、寝袋にくるまるしかない。しかし人間の体とは素晴らしいもので、こうして一日二日と寝ていると、徐々に自分の体に力が戻ってくるのがわかる。

病み上がりのだるい体でも、一步一步ふみ出す足には、心なしか自信すら出て来る。山では生きていく証をまのあたりにすることが出来る。

というわけで、幸いにして医者としての僕の仕事は何もなかった。医者といっても、卒業したばかりで、薬の名前も知らないものだから、隊員の方々には、心細い思いをさせて申し訳なかった。

しかし現地の人々の医者、というよりも薬に対する憧憬はたいへんなもので、キャラバン中休憩時間になると僕の回りに人が集まってきてまいってしまった。

現地のドクターの話によれば、このふもとのアリアバッド村で、今だにやっかいな病気は結核なのだそうだ。薬さえあれば、という悲哀を何世紀にもわたって、なめ続けてきた結果なのかもしれない。

カラコルムハイウェイが出来て、たいそう便利になった沿道の村々も、まだその恩恵に浴するまでには至っていないのが、現状のようであった。

戯れ言

上月登喜男

足のマヒが始まったのはインドへ入って5日目、デリーからアグラへ向う日の朝だった。左足がしびれたようで少し痛い。根が楽天的な僕は単なる遠征の疲労ぐらいに考え、放って置いても治るだろうと予定通りの旅を続けた。それから3日。左足ばかりか右足も手も動かなくなり、これはおかしいと気付いた時には遅かった。前日知り合った親日家のホテルへ移ろうとするも歩けない。道端で立ち往生しているところをたまたま通りかかった野口（デリーで分かれて別行動をとっていた。何たる奇遇）に助けられ九死に一生を得た思い。カジュラホでのことだ。結局マヒは全身におよび、デリーの病院に10日、寝たきりのまま日本に帰ってからも1年間入院療養生活を送ることになった。現在も握力は20kg程度。走ることができず、完治にはまだ遠い。

遠征の動機。とにかく登って見たかった。偉大なる地球のひだヒマラヤ・カラコルムに。旅してみたかった異文化の国ネパール・インド・パキスタンに。むずかしい理屈はいらない。初めに情熱ありき、思想は後からついてくる。否、そうした思想を、僕の山、僕の生き方を見つける為にこそ行くのだといってもよかった。

結果無事、それも10人もの大量登頂をはたしたことは、隊及び僕自身にとって一つの経験とも自信ともなった。新たな情熱はかつての登ってみたいという盲目的な憧憬から登れるのではないかという現実味を帯びた展望に形を変え、より高峰への夢へとふくらんでいった。しかし人

生どこに落し穴があるかわからない。クレバスは思わぬ所に口を開けて待っていたものである。

かよう84年は実にさまざまなことがあった。トータルするとマイナス面の方が多かったかもしれぬ。遠征が病気の遠因であったのかどうかもわからない。が、よもやそうであったとしても決して後悔はしていない。僕には賭けるものがあったし、目標を持って仕事に山にと一所懸命にやれた。一言でいえば充実していた。ただ問題はその後、ふくらんだ夢が日に日にしぼんでいくこと、それを手をこまねいて見ている僕がいるということである。

基本的に山は登ってなんぼのものと考えている。自ら登らずして語る言葉はないし、語ったところでむなしく響きただけだ。従ってこれは現在次期遠征の計画もムードもないことへの嘆きでもなければ批判でもない。それは全く個人的なもの、僕の問題としてある。

そこで再び夢の話。サンゲはあくまでファーストステップであった。より高峰（高度がすべてではないが）へとつなげてこそ意義がある。確かにサンゲはそれだけで一つの完結した登山であり、こうした考えは傲慢で誤ったものなのかもしれない。しかし僕はサンゲを追憶の道具として思い出のアルバムにはりつけてしまうのを肯んじない。はっきりいってそれでは不満足なのである。

現状では登山は無理だ。逃がした魚は大きい方がいいと同じく、登れない状況の下、未来に夢を馳せ、過大な希望を抱いているだけ。まさしく抱いているだけで、不利な状況に甘んじ、感傷にどっぷり首まで浸っているの反省もある。たとえ状況が許したとしても実際に2度目の遠征隊を組織し、卒先して参加するかどうかは疑

問だ。それでも語るべきは今ある姿・現実とともに、ありたいと思う姿・理想のそれであってもいいだろう。つまり僕にとってサンゲはそうしたものの、ヒマラヤ高峰への試金石としてあった（ありたい）ということだ。

振り出された足は確実に1歩を刻んだ。しかし次の足はむなしく宙に浮かんだまま、降ろす場所を捜し求めている。山は逃げない。が、時間は逃げる。走り続けていないと時の流れに追いつくことは難しい。やがて誰もが追うことをあきらめ、残りの人生をうしろ向きに歩むことになる。今がそのターニングポイントなのか。さすればこれは青春のレクイエムか。おあいにくさま。25かそこらで折り返すつもりは毛頭ない。若いと思っているうちは若いんだ。まっすぐに足を降ろして再び山を目指すか横道にそれて走り出すかはわからない。いずれにせよ僕はロマンチストでありたいし、夢を追い続けていたい。

サンゲを青春の散華たらしめぬ決意を込めて
自嘲的な捨て科白

ヒマラヤ登るにゃ 理屈はいらぬ

足の2本も あればよい

現役の人たちへ

大石 真也

「遠征を振り返って」という原稿を書くように言われたのだが、なかなか書けなかった。仕事が忙しいこともあったが、それ以上に書くことがなかったのである。

行く前には、遠征は自分の人生の中でも最も大きなイベントであり、多くのすばらしい思い出ができると思っていた。ところが、帰ってきて1年以上もたった今、頭の中に残っているのは、キャンプサイトから見たまわりの山々、キ

ャラバン中に見た氷河、牧草地、……。

大学院での2年間は、ほとんど研究を遠征のためて費したと言っても過言ではない。なのにこれと言った思い出はない。思い出そうとすると、色々な出来事、単なる事実はある。しかし、感情を伴ってはいないのである。

東京で、佐々木OBや、会社の山岳部の人と話をして、遠征の話はほとんどせず、現役時代のあのつらく、厳しく、また、貧しい山行、愉快的な人間関係。こんな話ばかりになるのである。

では、「遠征はつまらなかったのか」というかもしれないが、そのようなことはない。どうも、酸素不足のため、脳細胞がかなり死んだだけのようである。

遠征の事を思い出そうとする時、まず、真青の空が思い出される。そして、心が軽くなってゆき、なんとなく、心が踊ってくる。言葉にはできないような気持ちがわいてくる。まるで、好きな女の事を思う時のように。

このような事を書いていると、何を言いたいんだと言われるだろう。つまり、私が言いたいのは、遠征の素晴しさは、行かなければなかなかわからない。現役の若い人たちには、是非、遠征に参加して、この素晴らしい気分を味わってもらいたい。具体的には言えないが、何かが見え、何かを得られ、何か残ると思う。プラスになることはあっても、死なない限りマイナスになることはない。

ただ、注意しておきたいことがある。

1つは、あまり遠征、遠征と言って夢ばかり追って自らを見失わないこと。私も現役時代は海外の山はあまりに遠く、はるかむこうにかすんで見えていた程度であった。だからと言って

ただ空想していても進歩はなく、失望するだけである。それより、自分の目の前にある1回1回のゲレンデでの練習、山行を目標をもって大事にすることが最も大切であり、得ることが大きかったと思う。

もう1つは、私も遠征に「参加する」という言葉を使ったが、意識の上では、自分で遠征を出すという気持ちが重要であると思う。私も遠征に行く前は、この意識はあったが、帰ってからについては、後始末を考えると恥しい限りである。

これからの山行、海外遠征に期待しています。

冬の青い空を見ていると、また、海外遠征に行きたくなる毎日です。

夢のあとさき

野 口 明

私にとって遠征とは、夢であつた。この計画に着手する二年半ほど前から上月と酒の席でのしめくりに「(遠征に)行こう。」が相言葉になりだした。当時、私達は遠征に関し全くの無知であつた。これだけ、情報が氾濫している時代にあつて、まず何をすべきか、とかいったことが皆目わからなかったのだ。ゼロからの出発。私は幼稚だつた。

そんな私達でも、なんとか隊を出し、全員登頂という一見輝しい成果を収めた。その時、私達はお互い恨みっこなで喜んだものだ。しかし、今これを書いている段になって単純に喜べない気持ちになった。ちぐはぐな整理できぬ気持ちを文字にするのは困難だが、あえて試みたい。

そこでまず私達の山登りは現代において、山岳界という立場からどんなものであつたかを考

えたい。周知の事実であるが、現代は、一部のエキスパートが困難な壁に挑みあるいは無酸素、厳冬期、モンスーンといったような条件を課して登山をしている。それは、きびしさや困難性を追求し、人間の肉体の限界を自らが知るような目的で、また記録をつくるためにも行われる。一方では、今まで秘境といわれてきた山々（中国、ブータンの山）が大巾に解禁され、さらにアプローチ等、交通の便利化が進み（ネパール、パキスタンと中国国境開通）、技術、体力、経験がプロの山ヤほどではない。ふつうの大学山岳部でも六千、七千メートル級の山に気がるに挑めるようになった。それには、しばしば学術調査隊なるものが付随する。このような情勢にあって、私達の遠征を“山岳界”で位置づけを試みるならばそれは無意味であろうと思う。

私達の目ざしたサンゲマルマールは未踏峰ではあったが、それは困難さ等、初登頂の価値を生み出す要素があったからではない、まわりの鋭峰にかこまれて目だたぬ存在であったためと思われる。カラコルムハイウェイが外国人に開放されて秘境といわれていたフンザも日本語や英語の看板がやたら目についた。秘境であるゆえに興味がそそられる未知なるものも、それを公にするほど価値のある発見ができそうもなかった。ただ少なくとも私達にとって全てが真新しい発見で、驚きと驚嘆の連続だったが。しかし感性の問題ではない。今日の秘境フンザは文庫本を二三冊も買えば一通りのことはわかってしまうのだ。

サンゲマルマールを登ることに決めた当初は、このような事に私は一切気づかなかった。当時は何にしろ技術的に登れる山で、未踏峰で、アプローチが短く安くあげよう、というのがスロ

ーガンだった。今考えるとなんと情けない計画のため方だろうかと思う。まさしくバーゲンセールのちらしの中から、半額大奉仕といった太字がちらついている山を血まなこになって捜し出したのだ。貧困な下宿生はバーゲンセールで物を買えばよい。それを恥しいと感ずるのは私のおごりだろうか。常に安易な方へ流れて山に挑む。不自然な気がする。こんな事を書く仲間から、技術もなく、集金能力もないくせに大それた事を言うでない。と、叱られるかもしれない。「しかたのない事だ。私達にはそれがせいっぱいだったのだ。」と慰められるかもしれない。確かに海外遠征がスポーツとなった今日では、技術、組織力、資金運営力に見合った登山隊を送り出すのが、正しいやり方だろう。私達はまさしくその正しいやり方で成功を収めた。本当に成功だったのだろうか。私の本能が疑問をなげかける。

私は、私の夢について語るために、この遠征を私個人の中で位置づけてみたいと思う。

私にとっての遠征は単なるもやもやとした憧れに由来していた。信念が欠如していた。結果的には、青春期の思い出づくりとなってしまった。それゆえ一度過ぎ去ってしまうと幼年期の思い出のようにしか頭には残らない。ちょうどブランコに初めて乗った時のように。それはあまりにも簡単に成功してしまったからだろうか。簡単というのは、プロセスの意味においてもある。一昔前の遠征では、家業を投げ打ってとか、少なくとも人生のある部分を削って、何しろ山へ行くのだとそれを最優先してやってきた人間のみが、海外登山を許された。今やそういった苦勞なしに対象さえ選ばばたやすくパーミッションは取得でき、そこそこの日本の冬山を

こなす技術、体力があれば遠征隊をおくりだせるのだ。

ここでサンゲマルマールの思い出話をしてみたい。遠征を思いついた当時は無知のおかげで私は一所懸命になれた。小さな事ではあるが大学も休学し、すべてを山登りに注ぎ込まなければと考えた。しかし、私や仲間たちが私の思い描いていたような情熱を傾けて、切迫しながら遠征の準備はしていなかった。そうする必要もなく、すべてがスムーズにいったのだ。原因と結果が、どちらが先でも同じ事だと思う。パキスタンに入学し山登りが始まると私の頭は空になった。異国情緒にふれながら、ただ今まで身体で覚えた作業をくり返せばよかった。頂きが近づくにつれ、C3を設営した頃より私は必ず成功すると、ほとんど確信していた。少なくとも2〜3名は頂上に立てるであろう。そう思った頃もやはり私の頭は空だった。幸いにも全員登頂できた。登頂の瞬間はあまり感激がわいてこなかった。やっと終えたと思っただけだ。その後、やはりじわじわと喜びが空の頭にわいてきた。喜びは大切である。この喜びのために皆努力したのだと思う。しかし、喜びは時と共に過ぎ去ってしまうものだ。「登山とは、最高の自己満足を得るための、最も簡単な方法である。」というシンプルな論理を私達の登山は満した。しかし、それはその場かぎりの快樂であった。インドを少し旅行して空の頭がいろいろ物を考えはじめて、今まで私はいったい何をやってきたのだろうかという思いがする。登頂の時の喜びでさえ、何かしら私自身の全てが喜んでいなくて、私が喜んでいてる状態を観察していた自分があったように思う。第三者的に素直に喜んでいてる自分に言うべきことは何だろうか。

登山は個人的スポーツであると思う。スポーツはすべてそうかもしれない。個人の意志と力の上に、協調性、チームワークといったものが成立するのだ。そして、常に向上心をもって続けるためには、経験が非常に重要な要素となるので、一つの山行は、一つの夢であると同時に一つのステップであるはずだ。私もせめて数段は、階段を登るつもりだった。少なくとも登攀期間が終わってアリアバッドのキャンプサイトでは皆もそう思っていたにちがいない。隊員達の遠征後の感想では次なる山の話が多かったように覚えている。

お祭りのように遠征が過ぎ去り、空まわりの夢がふくらんだまま、私達は帰国し、思い思いの道に歩みはじめた。そしてこの行事は、人生の中の点として見なされたようだ。私はこの点が滲んで今なお頭に広がっている。それは、サンゲマルマールが逃げの姿勢で行なわれた登山だからだろうか。それでも、これを階段の第一ステップと考えたら、私のもやもやした気持ちがすっきりするかもしれない。

私はサンゲマルマールの遠征は皆にとってレジャーだったと思っている。「遊び」から夢を取ったらレジャーになるだろう。私の「遊び」からも夢は消えていった。その煙りのぬくもりが残っていた時、私は、独りでネパールの小さな山に登りに行った。それは、消えかけていた夢にすがりつくみっともない行為だったかもしれない。

遠征をふりかえると、これまで述べたような複雑な気持ちになってしまうが、私は、陰気なペシミストでもないし、絶望した性格破綻者でもない。今はただ、眠っている夢が起き出して燃え上るのを楽しみに待っている。

遠征が終わって

榊原 淳

早いもので、この遠征が終わって一年半以上もたってしまいました。ようやく報告書が出せることになり、ホッとしているところです。ただし、私は遠征終了後ほとんど何もしていませんので、他の報告書編集に頑張ってくれた隊員たちに足を向けて寝られません。

私は、遠征の後、大学院をなんとか修了し、就職して現在に至っております。山に行こう行こうと思いつつも、仕事で疲れ、その上少ない休みに、なかなか行くことができない日々です。せいぜい六甲のゲレンデに行って岩遊びをする程度。仕事をしながら山に登っている人たちの山にける情熱のすごさがやっとわかったような気がします。学生は本当に恵まれているんですね。この遠征も、私は、社会人であったら参加していなかったと思います。私自身、山に対する情熱はけっして他の社会人より劣るとは思いませんが、私にはもう一つ勇気が足りません。

遠征で味わった満足感も一年以上たってしまうときめてしまい、最近は何となくつまらない毎日です。先日、私の小学生のときの恩師から年賀状が届き、そこにはこんなことが書かれていました。「次の山は是非人生の山だ。」と。いつまでも「私はサンゲマル・マールを初登頂しました。」ではいけないと思いつつも、ただならぬと過していた自分が恥しくなりました。後輩たちには、サンゲマル・マールで味わった以上の満足感を求めて次の山を目ざしてくれることを期待します。私はサンゲマル・マール以上のものを山以外のところで求めようと思いません。それが何であるか私自身もわかりませんが

……。サンゲマル・マールに登るのは一年がかりでしたが、これからの長い人生、ゆっくりと自分の山を登っていこうと思います。

遠征を振り返って

佐藤 健哉

なぜ、サンゲマルマールへ登ることになったのだろうか。最初のきっかけは、高校へ入学して友人の誘いでワンダーフォーゲル部へ入ったことだった。しかし、ここでは何の活動もせず1年してからふとしたことで登山部へ移った。そのころ続んだ新田次郎の「弧高の人」の影響で槍ヶ岳へ登ってみたいと思うようになった。そして、この希望は高2のときに実現した。折立から西鎌尾根を通して槍ヶ岳へ登り、槍沢を下りるという一般コースで、季節は当然夏だった。槍ヶ岳の頂上へ立つことができたとき、今度は北鎌尾根へ行ってみたくなった。しかし、高校の登山部ではとても無理な話で、大学へ入ってから山岳部の門を叩くことになった。大学山岳部へ入ってすぐには北鎌尾根へ行く機会はなかったが、その間いろいろな山へ登っているうちに、今度はとにかく今まで誰も登ったことのない山へ登ってみたいと思うようになった。しかし、日本国内では未踏峰というものはなくルート開拓をしたいと考えるようになっていった。このことは考えている以上に難しく、結局実現はできなかった。しかし、このころ登っていた山は自分自身にとって新鮮で、十分満足していた。たぶん3年生の頃だったと思う。海外遠征の話が出てきて、とにかく登れそうな未踏峰を捜すようになり、自分の1つの夢がかなえられそうになってきた。しかし、実際に行ってみて、アリアバッド近くの橋の上からちょうど

劔岳のような形をしたサンゲマルマールを見てこんな山本当に登れるのだろうかと不安に思った。登り始めてみると、一步一步が苦しかった。10歩歩いたら立ちどまって休もうとこればかりを考えて登っていた。その他、2峰トラバースのルート工作と自分自身苦しいことはいくつもあったが、結局、頂上へ立つことができた。嬉しかった。嬉しかったというよりは気持ちがよくかったと言ったほうが正確だろうか。今まで何十日もかけて、たったひとつのピークを目指すということがなかったから、1つのことを達成したという喜びとともに、何か快感というものが感じられた。

今まで自分は何のために山へ登ってきたのだろうか。苦しい思いをして、恐い思いをして、危険な目に遭って、お金を使ってまでなぜ山へ登ってきたのか。自己満足のためと言ってしまえばそれまでだが、頂上へ着いたとき、あるいはルートを完登したときの快感というものが、次の山へまた自分を導いてきたのだということがわかったような気がした。

遠征を振り返って

大西啓之

遠征中の思い出として記憶に残っている光景の中でも、登頂後C1で皆と談笑していた時の一人一人の顔が鮮やかである。日焼けした顔に無精ひげ、登頂後の解放感で生き生きとしている。私も決して元気いっぱいという訳ではなく、登山中に相当やせて、頬もこけていたとは思いますが、何しろ自然に頬の筋内が緩んでしまう。サンゲのピークに立った時には、そんなに感激はなかった。疲れもあったし、雪庇上で絶頂のはっきりしない事につながりもしたが、何よ

りもC3にたどり着くまで油断は禁物と思うと新たな緊張感に登頂を楽しむこともできなかった。それが、翌日、翌々日と日が経つに従って喜びがどんどんふくらんでいったのである。こういう感じは私だけではなかった様で、2次隊も登頂に成功し全員登頂が実現した日は、皆少々興奮気味であった。私の記憶に残るC1の様子というのは、まさにその日の事で、よく印象に残っているのである。

その日からテントの中では、今後の山行の話に花が咲いた。帰国後の山岳部での山行の話はもちろんの事、次回の遠征にまで話は及んだ。登山成功直後だし、テントの入り口から外を見れば月明りにラカポシ、ディランなどカラコルムの名峰たちが青白く輝やいてくるし、どんどん話がはずむ。私も、下痢で泣き言を言っていたのをころっと忘れていろいろ馬鹿な事を言ってしまった。特に、次回の遠征に関しては「次も絶対行きますよ。もう1年ぐらい留年したらよろしい」という様な調子で、酒も飲んでいないのにいい気なものであった。

光陰矢の如しであれからすでに1年半がたった。本当にあっという間で、次回の遠征どころか今ごろ報告書の原稿を書いている始末である。この1年半は山岳部現役としての山行に追まわれ、成果は上がらなかったものの私自身としては充実した1年半であり、それ以外の事に手を出す余裕がなかったのも仕方がないと思っている。しかし、最近でも遠征の話が出る。そんな時も私はC1などで話した大ボラが禍いして、それに根っからの山屋根性も加わってその話しに首を突っ込んでしまうのだが、いつも後から「待てよ」という事になる。確かに山は好きだし、遠征へもう一度ぐらいいは行きたい。し

かし、金もいるし何よりも暇がない。暇をむりやり作ろうものなら一生暇になってしまいそうで、そんな勇氣はない。人に相談したなら、「甘えるな」の一言で終わるのだろうか、貧之症というかそんな機会があるなら参加したくて仕方がない。とにかく、大学生生活あます所1年となって、将来を悩む遠征体験後の今日この頃である。

今夜もサンゲに雪が降り
私はコタツで酒を飲む。の巻

水川 朋吉

もうあれから一年半が過ぎようとしている。炬燵なんぞにあたりながら写真を眺めていると、フツフツと懐かしさが込上げてくる。それも異常な程のリアリティを持った懐かしさだ。

あの三ヶ月間、いつもある感情の中にいた様に思う。最初その感情に襲われたのは、空港で飛行機のタラップを降りる時だった。晩春の快い日本から数時間でやって来た異国の風は触れたとたん汗が滲み出す程蒸し暑く、何処で焚いているのか香を運んでくるのだ。「日本ではない」というあたりまえの事実が肉感を通して脳に打ち込まれた、そんな感じだった。そして、ちょうどスイッチを入れ換えた様なそんな衝激を受けた。このスイッチが何処に繋がっているのか？それは翌朝ホテルで目覚めてすぐ、賑い始めた街を散歩している時にわかった。僕の頭は子供に帰ったのだ。毎日が新鮮で喜怒哀楽にどっぷりつかっていた頃の自分と、バザールの喧噪の中で喜々としている自分が同じなのに気が付いたのだ。このスイッチは日本に帰るまでの三ヶ月、ずっとそのままであった。異国で見聞き、そして触れたものは全て驚き喜び悲しみに変えられて心の中に刻まれていった。ところ

が日本に帰り、成田のロビーに立ったとたん、このスイッチはまた元にもどってしまったのだ。刻みつけたものは記憶になって残っているのだが、それ以上刻むことはしなくなった。目に見えるものはただ目に見えるものそのものであるだけで自分とはまったく関係のないものになってしまった。僕自身、まるで何もなかった様にうだる暑さの中へ埋没していった。そして、何かの景品か粗品の様にあの三ヶ月間が写真となってアルバムに収まっている。ただ普通のオマケと違うのはそれを広げる度にフツフツと何か沸き上がってくることなのだ。

と、大分構えた文章になってしまったが、そういう訳で、「あの遠征は自分にとって一体何だったのか」という、おそらく、ここで一番求められているだろう問に思わず口を閉じてしまうのだ。まるで自分の人生の中でそこだけ切り取ってガラスケースか何かに収めその前後をつないだ様だ。しかし完全にピタリとつながった訳ではない。不整合の一番の原因は、山への認識がより明確になったことだと思う。「そこに山があるから……」という常套句があるが僕の場合「山の向うに何かがあるから……」ということになる。本当に子供っぽい好奇心と感動が厳寒の中重い荷をかつがせつづけたのだ。ただ今までの山ではどうしても日常性もしくは惰性といったものをぬぐえなかった様に思う。この怪物が山の威容をかすませてしまうのだ。それでも山を続けてきたのは怪物を圧倒してしまう自然の奥深さと、仲間が存在があったからだろう。ところが今回の遠征ではこの怪物に襲われる事は一度もなかった。前に述べた様にパキスタンに着くなり、そんなものが入り込める余地さえなくなってしまったのだ。自分が登山をし

ている事が本当に自然なこととして受け入れることができた。山に何を求めていたのか、その時わかった様な気がした。

このスイッチの切り換えは、次何時おこるのだろうか。それは山でだけ起こるものではないだろう。海でも空でも何かを期待させるものがあるなら何でも試してみるべきだろう。しかしいつかは又山に帰ってくる様な気がする。そして当分は山にこだわるつもりである。となると、次の遠征は……という話になる。ところが今は、再び何か遠いことの様な感じさえする。ちょうどポテンシャルの底をさまよう粒子の様だ。何故そんなことになってしまったのだろうか。一つにはこの遠征がそれ自体、完結性の中に埋もれてしまった。つまり、次なる目標を具体的に提示できなかった事にあるのかも知れない。組織の性格上、どうしても同じ人間が同じ条件で次の遠征にまで参加する事はむずかしい。となれば、次々と入れ換わる人間を結ぶものは一つのテーマではないだろうか。そして、そのテーマに沿った、あるいはアンチテーゼとして新たな目標を次々と打ち立ててゆく必要があると思う。まだ粒子が揺れ動いている内に、次のポテンシャルの山におし上げなければならない。そして再び動かす時には谷底にとらわれない様に十分な初速をつけてスタートさせなければならないだろう。

海外遠征を終えて

宮田 俊一

海外遠征が終って、一年と7ヶ月あまりが過ぎた。現時点での考えをまとめてみたい。

この遠征に参加したのは、“海外へでて登山をしたい”からであったはずだ。しかし僕自身

が真剣に登山と取り組んでいたかというとはなはだ疑問である。未踏の山に自らの手でルートを築き、頂上に立つ。そのためには様々な準備が必要である。現地、山についての情報集収から始まり、高度順応、日数を考慮したタクティクス、ルートの計画。それらをもとにしての食料、装備の計画。これらと実際の登山、すべてを含めて海外遠征と言える。個人個人にとってのその成果は、登頂したか否かのみでかたづけられるのではなく、とり組みへの姿勢、その情熱の方が問題になると思う。

では、どんな点で真剣でなかったのか。

その1

出発直前の一ヶ月間は、梱包などの仕事で大忙がしであった。だが責任のある仕事は一つもなく、あれこれと指示を受けその通りに動くだけ。雑用係ながらであった。下級生だから係を担当してはならなかったのではない。ただやらなかったのである。

その2

国内の冬山、岩登りではいかにルートをとるか、どこが危険であり、どう対処するのか、どのようなトレーニングが必要なのか、を考えねばならない。またそれが楽しみでもある。そして海外の7000m級の未踏峰ではそれらを十分に味わうことが可能だったのである。しかし、今回こうしたことをじっくりと考えたことがあったか。タクティクスなど、すべてまかせきりであったのではないのか。

どうもすっきりしない。満足のいかない気分が心の中に居座り続けている。その理由は真剣に登山と取り組んでいなかったこと、そしてその真剣さを支える“海外へでて登山をしたい、するんだ”という気持が僕に根付いていなかった

ことにある。言ってしまうと、人ごとのようなものであったのかもしれない。人ごとであれば情熱が湧いてこないのも責任感が希薄になるのもうなずける。

遠征後1年間半、山岳部というクラブの枠内で登山をしてきた。しかし本当に納得のいく山行との出会いはない。というよりも、何のために山へ登っているのか、一体どんな登山を求めているのかわからないのである。この打開策として“再び海外遠征へ”という気にもならないし、今はその時期ではない気がする。このままの状態でも登山と縁が切れてしまうことはないだろう。気長につき合っていきたいものだと思うし、又そのつもりである。

サンゲマルマール下山記

広 田 雄 彦

無理遣いにももらった一ヶ月の休暇が終わろうとしていた。ABCで隊員の皆と、BCでMr.ミールとコックのアユーブに別れを告げ、僕はMr.シャーと麓の村へ下り始めた。途中、羊飼いの爺さんに、チャイやアプリコットを御馳走になったりしてアリアバードのテント村に着いたのは、夜の九時半頃だった。ラカポシの上には満天の星、びっこをひきつづけた僕の左膝は、ヒルドイドで白くふやけ、僕自身のサンゲマルマールは終わったのだからと、強いて山の事は考えまいとした。何故って、皆が踏む白い頂きはきっと素晴らしいだろうから。コーランの声が響いていた。悠久と寂しさの同儀を証明しようとするかのように。

翌朝、コーンフレークとチャイの朝食を済ませて僕は、Mr.シャーとカリマバード迄足をのびした。ここは、絨毯の名産地で観光客の姿も見

える。食堂へ入り、ダルカレーとチャパティの昼食をとりキャンプサイトへ帰ると、一人の黒人が僕のテントのもう一つ余っているベッドを使わせて呉れと言って来た。「ああ、ええよ。あんた黒人?」「黒人に見えるか。嬉しいなあ。俺はパキスタン空軍のパイロットや。ハルーンや。ラホール迄行く。」「僕はヒロタ。日本人や。ピンディ迄。」「ほんならピンディ迄一緒に行こうや。」「俺は軍のパイロットやから、ギルギッドからピンディ迄飛行機に乗れるようにうまいことやったるで。」そんな訳で、二人は、次の朝車でまずギルギッドへ向った。

ハルーンは約束通り、ギルギッドの空港で交渉して呉れたが、とうとう僕のチケットは取れなかった。空港の管制塔で、ハルーンの友人の空港職員と三人で飛行機を眺めながら僕は「しょうがないからバスで行くわ。」するとハルーンが「十九時間も掛かるで。」「240ルピーかかるけどホンダで行くか。」と言いながら、通りに止まっているアコードを指さした。「飛行機が200でアコードが240か。」「ほんならワゴンはどうや。170や。」仕方ないからチナールインでワゴンの予約をしてハルーンとギルギッドの街へ出掛けた。二人でハルーンの顔見知りの土産物屋で話していると、アメリカ人娘が一人入って来た。ハルーンはさっそく近づき何やら話しかけている。僕は、高い高い山並みに囲まれた夕暮れのギルギッドの街並みを眺めながら、時の流れを追い越してあくせく生きるという豊かさが悲しく思えて来た。ハルーンはどうやら彼女と話がついたらしく、ニヤニヤしている。

次の朝、八時、飛行機の天候待ちをするハルーンと別れて僕は、トヨタハイエースに乗り込ん

だ。これから、インダス川添いのカラコルムハイウェーを十五時間ピンディ迄ひた走りに走る。同乗者は、ドイツ人の医者夫婦、アタッシュケースを持ったパキスタン男性、行商人風のパキスタン人の親子連れ、それに髭面の僕。運転手は、アーリア人系の顔をした頬に傷のあるパキスタン人。雲助顔負けの運転ですとばす。風が入ると言うもののクーラーがないので照りつける太陽の下、休憩時間は水ばかり飲んでた。大きく蛇行する濁流のインダス川に添って、ゴミみたいなワゴン車が走り続ける。緑も少なく灰色の景色が続く。インダスの流れとワゴン車が競争する。決して交流することのない別世界のものが同方向へ流れて行く。僕は暑さでボーとした頭で、人生の営みもそんなものかなと考えながら、インダスの流れを見つめていた。

終点ピンディのフラッシュマンホテルに着いたのは夜の十一時だった。Mrs.デービスホテルへ行ったが満員。仕方なく中庭にシュラフを出して寝た。夜中、泊り客のイギリス人が、中庭の僕に気がついたのかマットを持って来て呉れた。

帰国の日。まずカラチへ飛び、東京行きへ乗り継がなければならない。カラチで、ザックの上に腰を降し時間待ちをしていると、「日本人の方ですか。」「ええ、そうです。」「今日は。」一人の日本人青年に声を掛けられた。「山登りですか。私はこれからインドへ入るんです。」その青年は、鍼灸医の卵で、一ヶ月の休暇をとり、ヨーロッパの次はインドを放浪するという。「僕はこれから東京へ帰るんやけど、昼めし一緒にどう。ルピー余ってるんや。」

レストランで昼食をとった後、インドへ立つ彼を見送って、僕は東京行きのPK762に乗

り込んだ。飛行機の窓から、離れて行くカラチの街を眺めながら、青年の言った言葉を僕は思い出していた。「これがエピローグ。青春のね。」彼も僕も、自分自身に手を振っていた。

思いつくまま、一人の帰途を綴りました。この遠征に参加できたのも、皆々様のおかげです。感謝致します。丁度、ドライシェリーが一本空いたようです。これで筆をおきます。

御協力戴いた方々

(敬称, 社団法人, 株式会社 略)

(五十音順)

[団 体]

アシックス	積水化学工業	日本ビクター
味の素	積水成型工業	日本ポラロイド
石田商衡	セルビノ	
伊藤ハム栄養食品	象印マホービン	ハウス食品工業
井村屋製菓	ソニー	日立マクセル
医薬品協会		弘前大学山岳会
岩崎工業	ダイハツ工業	広島山岳会
上島珈琲	大洋漁業	富士昆布
内田食品	大和銀行	富士写真フィルム
S & B 食品	ダイワスポーツ	プリマハム
大阪府山岳連盟	武田薬品	堀田竹材店
大塚製薬	タムロン	
大林組	チノン商事	松下電器産業
小川テント	帝国産業	まつや
小倉貿易	帝人	丸正産業
	東京芝浦電気	丸美屋食品工業
金沢大学山岳会		美津濃
鎌倉ハム	長崎北稜会	ミノルタカメラ
河合防塵眼鏡	永谷園本舗	ミヤコスポーツ
京セラ	ナカバヤシ	明星食品
近畿大学山岳部	新潟屋	明治製菓
甲南大学山岳部	ニチバン	森田製作所
鴻池組	日清食品	森永製菓
小西六写真工業	日東紙器工業	森永乳業
	日東電気工業	モンベル
サクラクレパス	日本アルミニウム	
サントリー	日本山岳協会	八重洲無線
サンヨー食品	日本酸素	山崎製パン
三洋電機	日本水産	雪印食品
杉浦染物店	日本大使館 (在パキスタン)	雪印乳業
住友特殊金属	日本ダンロップ	ユニチカ

リヒト産業

[個人]

水野祥太郎
 国里勇吉
 小林義郎
 酒井英之
 恩地裕
 友田洋一
 大久保勝巳
 伊藤俊夫
 渡辺修治
 徳永篤司
 松久博
 尾藤昭二
 岩永剛
 坪井圭之助
 林伸一
 片山徹
 田村俊秀
 宇野雅明
 豊坂昭弘
 畑中薫
 黒田治郎

 水野健次郎
 大島輝夫
 加藤幹太
 細見一仁
 山本進一郎
 高木俊夫
 玉井康雄
 五百蔵弘典
 牧野大輔

原治左衛門
 佐々木義弘
 石原敏雄
 高橋正身
 藪田勝久
 井上太一
 佐野威和雄

 川戸俊治
 黒川誠一
 遠藤常忠
 福田正治
 奥村正巳
 乾昌弘
 岡三太郎
 久保三朗
 四宮誠祐
 川島勇三
 近璋三
 奎中勝
 兼清喜雄
 平野恵一
 田井英男
 広瀬貞雄
 丸尾能保留
 黒木隆憲
 金子忠男
 白井達郎
 三沢日出夫
 大川和秋
 石浜高明

大笹秀一
 大野義照
 山田靖則
 藪本勝
 上松一雄
 木嶋良雄
 森保知
 重田邦男
 岡部友三朗
 村田正弘
 草尾寛
 小松二郎

 三枝礼子

 石沢命久
 大工原恭
 保母武彦
 大宅幸夫

 甲田吉彦
 明神知
 住田宏己
 森良平
 浅井利彦

 田島汎
 木村裕一
 野田憲一郎
 糸井文彦
 黒岩芳夫

(順不同)

佐々木徹
 越智栄次郎
 湊本喜裕

 山本光二
 広橋茂
 岡田博司
 栗原完治
 渡辺治郎

 横井保枝
 畑幸代
 房本進吾

 畑秀信

 吉矢生人
 堀川浩甫
 酒井芳子
 三ツ井郁子
 山田朝治

SANGEMAR MAR 7050 m(6949 m)

Osaka University Karakorum Expedition 1984

T.Mizukawa, A.Noguchi

Sangemar Mar was an untrodden peak of the Batura Muztagh. She stands as a watershed between the Hispar Glacier and the Muchichul Glacier, and is surrounded by Hachindar Chish (7163m) in the west, Shispare (7611m), Bojohaghur Duan Asir (7329m) in the east, and Batura (7785m) in the north. It seemed that she is the princess guarded by the magnificent castle wall. Sangemar Mar has four ridges, the North, the South, the West and the South-West ridge. We decided to attempt from the South-West ridge. There are three peaks and a van peak which we called Peak I, II, III and Fang. Peak I is the top of Sangemar Mar.

On June 2nd, we left Mrs. Davies Hotel in Rawarpindy for Hunza which is called Shangri-la. We arrived at Aliabad in Hunza next evening and stayed in PTDC campsite. The next day was taken to employ sixty-two porters and to go food-hunting. The caravan was started on the 5th and we needed four days from Aliabad to the Base Camp. Base Camp was set up on the pasture named Ilkish (4100m) where we got water and firewoods easily.

On June 9th and 10th, all of us reconnoitered around Base Camp. After 3 hours traverse, we found a terrace on the foot of Fang where the altitude is 4500m. We decided to set up Advance Base Camp there and began to carry our loads. Each member needed to carry 25kgx4 times and to stay at Base Camp for a week to acclimatize ourselves.

On June 15th, the first team of three members got in Advance Base Camp. It was our plan at higher Advance Base Camp that all members split into three teams and each team did in turn, 1) carrying loads, 2) carrying loads and staying at higher camp, 3) opening

route and getting back to lower camp, 4) taking a rest over again in four days. We almost kept this rotation to the end of this expedition. The success of acclimatization and this plan must have led us to the summit.

From Advance Base Camp we went through a snow slope and a vertical glacier of 100m height. After the glacier, a snow gentle-slope extended to Camp 1. We set up Camp 1 on a plateau (5300m) on June 18th. We went to Camp 2(5800m) smoothly because of the fine weather. Camp 2 was at the foot of Peak III. To Peak III, it started with a steep 45-50 degree snow face like a "Slide". The upper part of "Slide" is mixed with rocks. After the face, a pinnacle stands. Nagasaki-hokuryokai(attempted in 1981) had to give up here because their time was up. Then we gained plenty of fight to climb the unknown route. During this process, Hirota who is a company employee turned back to Japan.

From the pinnacle, we arrived at Peak III via a knife-edge and two steep snow faces. We surmounted from Camp 2 to Peak III using fixed ropes of 600m long with the first difficulty. On June 30th, we established Camp 3 on the top of Peak III with the altitude of 6500m. From here we could see Peak I and II which were so beautiful. To go to the summit we could not appreciate the beauty as we had to tide over the second difficulty. The Peak II consists of several pinnacles about 100m in height. At first we tried to get over these pinnacles, but it was very difficult. Next our trial was to traverse the foot of the pinnacles. But this route was also impossible. At last we decided to go down 70m from the foot of Peak II to the Batura side of the glacier, and to traverse from here. This route was right.

On June 11th, we , six members, left Camp III at 04:05. We reached the col between Peak I and II via the glacier beyond two crevices. At 13:20 all of the first members reached the summit. The weather was unluckily cloudy. We stayed on the summit for half an hour. When

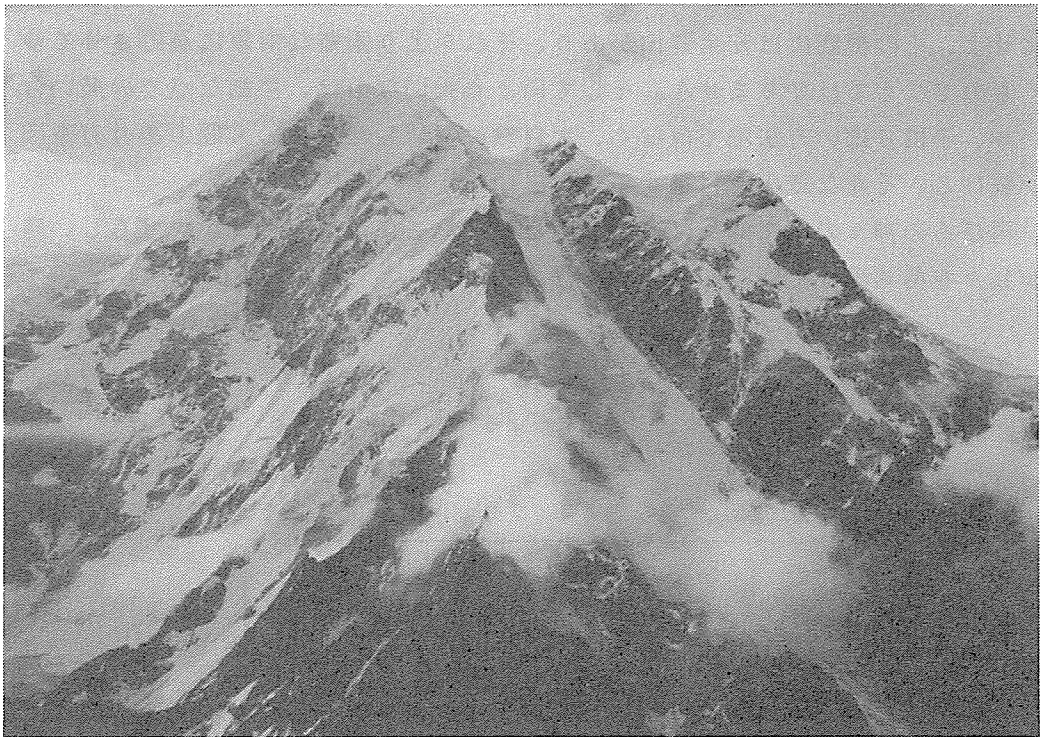
we got back to Camp 3, it was 19:00. We had the best night at Camp 3. The second attack team started for the summit from Camp 3 on June 13th. They stood on the summit at 11:30. The weather of this day was very fine. They enjoyed the fine panoramic view. We were very glad that all of us reached the summit.

Summary of Statistics

Area: Karakorum Range, Pakistan.

Ascent: First ascent of Sangemar Mar; We reached the summit via the South-West ridge on July 11th and 13th 1984. (All climbing members)

Personal: Takashi Matsuo, leader; Masahiko Hirota, Hiroomi Okuyama, Tokio Kozuki, Masaya Oishi, Akira Noguchi, Atsushi Sakakibara, Kenya Sato, Hiroyuki Onishi, Tomoyoshi Mizukawa, Shunichi Miyata.



パツーラ BC からのサンゲマルマール

あ と が き

サンゲの項に立ち二年あまりもたつてようやく報告書をまとめる事ができました。この様に発行が遅れましたのも、一重に我々隊員の怠慢にあります。御援助下さった各方面の方々には実に申し訳けなく思います。そしてこんな我々に多大な御厚情を頂いた事、改めてお礼申し上げます。

さて、我々はこのサンゲマルマールという山を「次なる山へのステップ」として位置付けてきました。「次なる山」とはどの山か？現在山も多様性をいわれる中であつて、山の選択、ルートを選択、更にはスタイルの選択に我々の山に対する姿勢を問われるまでになりました。しかし我々がいつれの方角を選ぶにせよ、その根底には安全登山があり、それをより困難な対象に適応させてゆくものでなくてはなりません。そして何より大切なのは、些細な点での競い合いや、子供っぽい方法論ではなく、大自然に対峙した一人の人間のあり方を問い続ける、そんな登山を目指す事だと思います。

再びあの神々の座に向うのはいつの日か？そこにはきっと又、すばらしい時が我々を待ち受けていることでしょう。

(水川)

昭和61年12月 1日 印刷

昭和61年12月24日 発行

発行所 大阪大学山岳会

〒565 豊中市待兼山町1の1

印刷所 秀 栄 社

〒534 大阪市都島区片町2-7-21

天業ビル201

TEL 06-353-5268

